

新宮遺跡Ⅱ

－ C地点の調査 －

2011

本庄市遺跡調査会

しん ぐう い せき
新宮遺跡Ⅱ

— C地点の調査 —

2011

本庄市遺跡調査会

序

ここに報告する新宮遺跡の周辺は、児玉工業団地が付近に造成されたことから開発に伴う発掘調査が相次いで実施されている区域に相当しております。これらの発掘調査の結果、台地縁辺部に沿って縄文時代の複数の大規模な集落遺跡が連なるように存在していることが確認され、県内でも屈指の遺跡群であることが知られるようになりました。

縄文時代は、一般に採集狩猟社会であるとされておりますが、自然との共生の中で自然を理解し、動植物のもつ繁殖力を維持し活性化することによって、四季折々の自然の恵みを糧とする豊かな生活をおくっていたようです。彼らの生活は、自然に依存することからくる限界をもちながらも、自然を生かすことによって自らが生かされるような、柔軟でエコロジカルな生活をおくっていたのです。季節を愛し自然を愛でる私たちの自然観の基層には、このような先人たちから継承した自然に対する感謝と畏敬の念の積み重ねが横たわっているものであるとあってよいでしょう。

今回の発掘調査された埋蔵文化財も、このような先人達の営みの一端を垣間見るための基礎資料となるものであり、この新宮遺跡C地点の調査によって、さらに本遺跡の具体的な姿が明らかとなりました。この発掘の記録は、先人達が本庄の大地で生きた証であります。このたび調査報告書という形で永く後世に伝えることになりましたが、今後はさらに、私たちが育んでくれた環境と歴史への理解が徐々に深まっていくことでしょう。ここに、本書が刊行できましたことは、有限会社練馬製本工場をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。この調査報告書がこの地域の皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成23年2月16日

本庄市遺跡調査会
会長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市児玉町大字共栄字南共和 214 番地に所在する新宮遺跡 (No. 54 - 030) の C 地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は工場建設計画に伴う事前の記録保存を目的として児玉町遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査、整理および報告書作成に要した経費は、有限会社練馬製本工場からの委託金である。
4. 発掘調査面積は本庄市新宮遺跡のうち 747.7 m²を対象とした。
5. 発掘調査期間は以下のとおりである。
自 平成 2 年 5 月 15 日 至 平成 2 年 8 月 18 日
6. 発掘調査担当は鈴木徳雄及び徳山寿樹 (児玉町教育委員会社会教育課：当時) があたり、児玉町遺跡調査会尾内俊彦が現地調査員として専従した。
7. 発掘調査に関する発掘基準点測量、遺構等の測量は(株)間正測量設計事務所に委託して実施した。
8. 整理期間は以下のとおりである。
自 平成 22 年 4 月 1 日 至 平成 23 年 2 月 10 日
9. 整理作業の一部および報告書刊行にかかる業務は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
10. 本書の執筆は、I・II を本庄市教育委員会文化財保護課が、III - 1・3 を高橋清文 (有限会社毛野考古学研究所) が、それ以外を宮田忠洋 (有限会社毛野考古学研究所) が担当し、編集は宮田が行った。また、縄紋土器を宮田が、石器を土井道昭 (有限会社毛野考古学研究所) が担当した。
11. 本書の編集は、本庄市教育委員会文化財保護課の指導に基づき、宮田が担当した。
12. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関連する資料は本庄市教育委員会において保管している。
13. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます。(敬称略)
井上慎也、江原 英、小川卓也、金子彰男、坂本和俊、櫻井和哉、菅谷通保、関根慎二、外尾常人、谷藤保彦、高橋一夫、田村 誠、寺崎裕助、永井智教、中沢良一、長滝歳康、中村倉司、早坂廣人、平田重之、福田貫之、丸山 修、矢内 勲、山口逸弘、綿田弘実、埼玉県教育局生涯学習文化財課、児玉地区文化財保護協会
14. 新宮遺跡 C 地点の発掘調査、整理および報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

新宮遺跡 C 地点発掘調査組織

児玉町遺跡調査会 (平成 2 年度：抜粋)

会 長	野口敏雄	児玉町教育委員会教育長	
	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長	
理 事	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員	
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員	
	日向國俊	児玉町文化財保護審議委員	
	中兼久偉	児玉町文化財保護審議委員	
	吉川 豊	児玉町教育委員会社会教育課長	
	幹 事	立花 勲	児玉町教育委員会社会教育課課長補佐
		前川由雄	〃 社会教育係長
金子幸弘		〃 社会教育係	
恋河内昭彦		〃 社会教育係	
調査員	鈴木徳雄	児玉町教育委員会社会教育課社会教育係	
	徳山寿樹	〃 社会教育係	
	尾内俊彦	児玉町遺跡調査会調査員	

会 長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長	
理 事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員	
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長	(会長代理)
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長	
	田島弘行	本庄市会計課長	
幹 事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長	(事務局長)
	鈴木徳雄	〃	副参事兼課長補佐
	太田博之	〃	埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃	埋蔵文化財係主査
	大熊季広	〃	埋蔵文化財係主査
	松本 完	〃	埋蔵文化財係主任
	松澤浩一	〃	埋蔵文化財係主任
	的野善行	〃	埋蔵文化財係臨時職員

凡 例

1. 本書所収の遺跡全測図におけるX・Y座標値は世界測地系に基づく。各遺構図における方位針は座標北を指す。
2. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真中の遺構名称も同一の記号を用いた。

SI…住居跡・堅穴状遺構 SJ…埋設土器 SK…土坑 SU…遺物集中部 P…ピット

3. 本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。

【遺構図】

遺構全測図… 1/160 SI… 1/30、1/60 SJ・SK・SU・P… 1/30

【遺物実測図】

縄文土器… 1/3、1/4 石器… 1/1、1/3 土製品… 1/2

4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
5. 遺構図及び遺物実測図中のトーンが示す内容は以下のとおりである。
 - a. 遺構断面図中の斜線は遺構確認面以下を示す。
 - b. 遺構平面図中の焼土範囲は以下のトーンで示す。



焼土範囲

6. 本調査における遺構の土層断面図及び遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。
7. 遺構の規模は上端での計測値を原則としている。
8. 挿図中で使用しているドット記号（●）は出土土器を、（△）は出土石器を示す。
9. 遺物観察中の単位は、法量はcm、重さはgである。（ ）内の数値は推定値、[]内の数値は残存値を示す。
10. 本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」「藤岡」、位置図は児玉町現況図1/2,500「5」、写真図版の空中写真は国土交通省国土地理院『高崎』「CKT-00-01X-003-8」2000年10月に加筆したものをを用いた。

目 次

序
例言
凡例
目次

挿図目次
挿表目次
写真図版目次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	3
III	調査の成果	9
1	遺構の概要	9
2	遺物の概要	9
3	検出された遺構と遺物	9
(1)	竪穴住居跡	9
(2)	竪穴状遺構	25
(3)	単独埋設土器	28
(4)	土坑	30
(5)	遺物集中部	30
(6)	ピット	33
4	遺構外出土遺物	34
IV	まとめ	45

写真図版
報告書抄録
奥付

挿 図 目 次

図 1	新宮遺跡調査地点	図 24	2号竪穴状遺構出土遺物
図 2	埼玉県の地形	図 25	1号埋設土器
図 3	新宮遺跡の位置と周辺の縄紋時代の遺跡	図 26	1号埋設土器出土遺物
図 4	新宮遺跡C地点全測図	図 27	2号埋設土器
図 5	1a・b号竪穴住居跡	図 28	2号埋設土器出土遺物
図 6	1a・b号竪穴住居跡模式図	図 29	2号土坑出土遺物
図 7	1a・b号竪穴住居炉跡	図 30	1号～4号土坑
図 8	1a・b号竪穴住居炉跡出土遺物	図 31	1号・2号遺物集中部
図 9	1a・b号・2号竪穴住居跡遺物出土状況	図 32	1号・2号遺物集中部出土遺物
図 10	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(1)	図 33	1号小穴
図 11	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(2)	図 34	1号小穴出土遺物
図 12	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(3)	図 35	遺構外出土遺物(1)
図 13	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(4)	図 36	遺構外出土遺物(2)
図 14	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(5)	図 37	遺構外出土遺物(3)
図 15	2号竪穴住居跡	図 38	遺構外出土遺物(4)
図 16	2号竪穴住居跡出土遺物	図 39	遺構外出土遺物(5)
図 17	3号竪穴住居跡	図 40	遺構外出土遺物(6)
図 18	3号竪穴住居跡出土遺物	図 41	遺構外出土遺物(7)
図 19	4号竪穴住居跡	図 42	新宮遺跡集落変遷(1)
図 20	4号竪穴住居跡出土遺物	図 43	新宮遺跡集落変遷(2)
図 21	1号竪穴状遺構	図 44	新宮遺跡周辺の縄紋時代中期中葉から後半にかけての遺構分布
図 22	1号竪穴状遺構出土遺物		
図 23	2号竪穴状遺構		

挿 表 目 次

表 1	1a・b号竪穴住居炉跡出土遺物観察表	表 12	2号土坑出土遺物観察表
表 2	1a・b号竪穴住居跡出土遺物観察表(1)	表 13	1号遺物集中部出土遺物観察表
表 3	1a・b号竪穴住居跡出土遺物観察表(2)	表 14	2号遺物集中部出土遺物観察表
表 4	1a・b号竪穴住居跡出土遺物観察表(3)	表 15	1号小穴出土剥片計測表
表 5	2号竪穴住居跡出土遺物観察表	表 16	1号小穴出土遺物観察表
表 6	3号竪穴住居跡出土遺物観察表	表 17	遺構外出土遺物観察表(1)
表 7	4号竪穴住居跡出土遺物観察表	表 18	遺構外出土遺物観察表(2)
表 8	1号竪穴状遺構出土遺物観察表	表 19	遺構外出土遺物観察表(3)
表 9	2号竪穴状遺構出土遺物観察表	表 20	遺構外出土遺物観察表(4)
表 10	1号埋設土器出土遺物観察表	表 21	遺構外出土遺物観察表(5)
表 11	2号埋設土器出土遺物観察表		

写真図版目次

写真図版表紙	新宮遺跡の位置と周辺の地形	写真図版 7	1a・b号竪穴住居炉跡出土遺物
写真図版 1	調査区全景(北から) 調査区全景遺物出土状況(北東から) 調査区全景遺物出土状況(不明)	写真図版 8	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(1)
写真図版 2	1a・b号竪穴住居跡(北東から) 1a・b号竪穴住居炉跡(南西から) 1a・b号竪穴住居跡遺物出土状況(北西から)	写真図版 9	1a・b号竪穴住居跡出土遺物(3) 2号竪穴住居跡出土遺物(1)
写真図版 3	2号竪穴住居跡(南西から) 3号竪穴住居跡(西から) 4号竪穴住居跡(西から)	写真図版 10	2号竪穴住居跡出土遺物(2) 3号竪穴住居跡出土遺物 4号竪穴住居跡出土遺物 1号竪穴状遺構出土遺物 2号竪穴状遺構出土遺物
写真図版 4	2号竪穴状遺構(南西から) 1号埋設土器(北東から) 2号埋設土器(南東から)	写真図版 11	1号埋設土器出土遺物 2号埋設土器出土遺物 1号遺物集中部出土遺物 2号遺物集中部出土遺物 2号土坑出土遺物 1号小穴出土遺物
写真図版 5	1号土坑(北東から) 2号土坑(南東から) 4号土坑(北から)	写真図版 12	遺構外出土遺物(1)
写真図版 6	1号遺物集中部(北東から) 2号遺物集中部(北東から) 1号小穴(ピット)(南東から)	写真図版 13	遺構外出土遺物(2)
		写真図版 14	遺構外出土遺物(3)
		写真図版 15	遺構外出土遺物(4)

I 調査に至る経過

本報告にかかる発掘調査は、工場建設計画に伴って現状変更される埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は以下の通りである。

埼玉県児玉郡児玉町大字共栄（現本庄市児玉町共栄）字南共和 214 番地の約 2,000 m²において、昭和 63 年、山本登志雄から工場建設にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについて照会があったので、周知の埋蔵文化財包蔵地（No. 54-030）新宮遺跡に相当し埋蔵文化財が包蔵する可能性が高く、試掘調査を実施する必要がある旨の回答を行った。その後、昭和 63 年 11 月 24 日付けで試掘調査の依頼書が児玉町教育委員会に提出された。同年 11 月 29 日に試掘調査を実施し、10 か所の竪穴住居と思われる落ち込みが確認されたところから縄紋中期集落遺跡である旨を同日に回答した。

その後、平成 2 年に有限会社練馬製本工場による工場建設に計画が持ち上がり児玉町教育委員会に照会があったところから、再度現地を確認したところ、地表にはロームブロックが無数に散乱しているとともに多量の遺物が散布しており、明らかに直前に重機によるローム層に達する天地返しが行われている状況であったことが判断された。この埋蔵文化財にかかる無断の現状変更について厳しく指導を行ったが、重機による天地返しがどのような経緯で行われたかについては明らかにすることはできなかった。しかし、開発予定区域全域の遺構確認面には著しい攪乱が及んでいると推定されたが、地表から攪乱に及んでいない区域の存在が予想されたところから、児玉町教育委員会は周知の埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するように有限会社練馬製本工場と協議を行った。しかし、埋蔵文化財への影響は避けがたく、工場建設計画によって埋蔵文化財に影響の及ぶ区域の発掘調査を実施する必要性が生じた。以上の協議を踏まえて、児玉町教育委員会の指導に基づき、児玉町遺跡調査会と有限会社練馬製本工場との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで、発掘調査を実施することとなった。

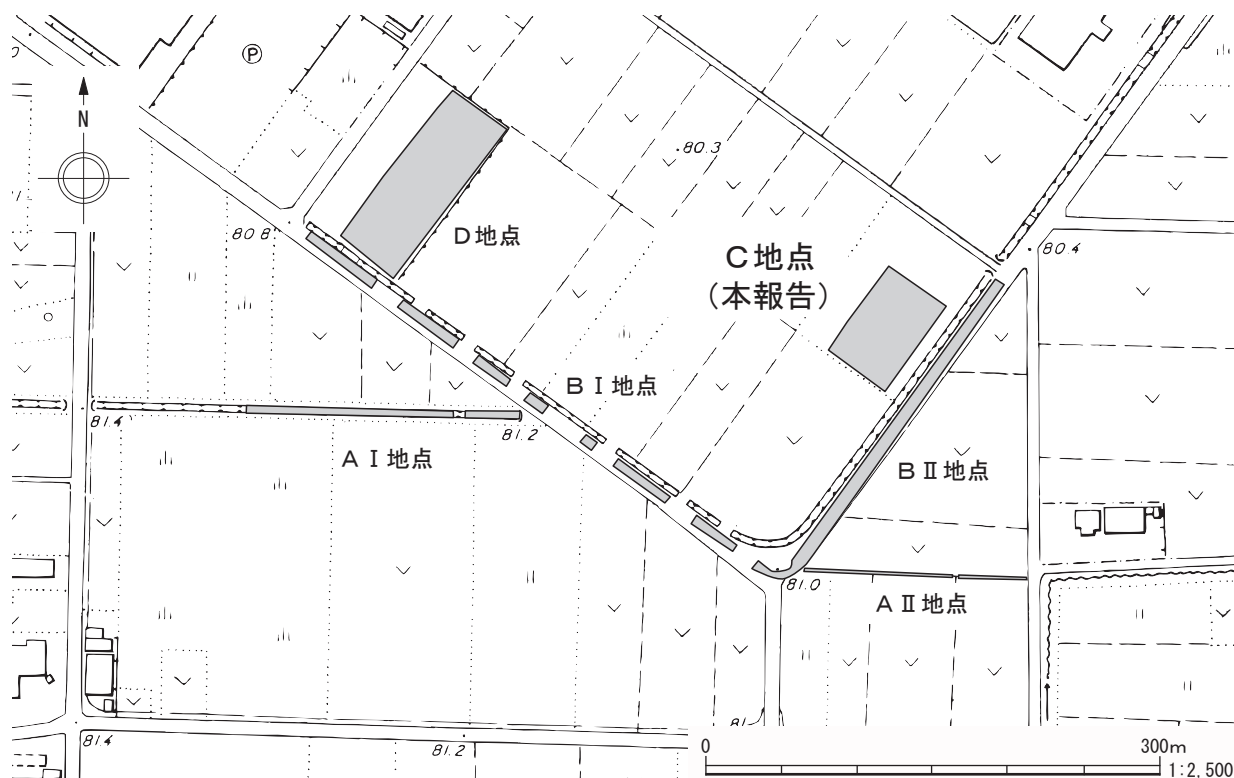


図1 新宮遺跡調査地点

発掘の実施にあたって、平成2年4月27日に有限会社練馬製本工場代表取締役村野はなより、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届け出について」が提出された。この発掘調査の届け出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、平成3年3月30日付け教文第3-364号で有限会社練馬製本工場代表取締役村野はなに「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があった。

発掘調査の実施については、児玉町遺跡調査会会長野口敏雄から文化財保護法第57条第1項の規定に基づいて、平成2年4月27日付けで「埋蔵文化財発掘調査の届け出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日児教社第29-2号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この届出に基づいて、平成3年6月6日付け委保第5の821号で児玉町遺跡調査会会長野口敏雄宛に「埋蔵文化財の発掘について（通知）」があった旨、埼玉県教育委員会教育長から児玉町教育委員会教育長に、平成3年6月24日付け教文第5-222号で通知があった。

なお、現地の発掘調査は、平成2年5月15日に開始され、同年8月18日に終了した。

(本庄市教育委員会文化財保護課)

II 遺跡の環境

1 地理的環境

新宮遺跡の所在する本庄市は、東側を深谷市および児玉郡美里町、西側を児玉郡神川町、南側を秩父郡皆野町および長瀨町、北西側を児玉郡上里町、また北側には利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接しており、埼玉県の北西部に位置している。本庄市には、市域の北東部に位置する本庄市街にJR高崎線本庄駅が、南西部に位置する児玉市街にはJR八高線児玉駅がある。また、市の北東部には上越新幹線本庄早稲田駅があり、現在駅前の区画整理事業が実施されている。本庄市街の北側には国道17号線が、児玉市街には国道254号線がとおり、伊勢崎市から本庄市街、児玉市街を経て藤岡市鬼石方面に国道462号線が延びている。また、市域の中央北東寄りには関越自動車道本庄・児玉インターチェンジがある。

本庄市の地形は、市域の南東側が八王子-高崎構造線上の断層崖を境に三波川系結晶片岩帯に相当する上武山地、北西側は関東平野西端を構成する神流川扇状地が展開し、扇端部に位置する深谷断層を境に烏川低地が展開しており、近世以降ではこの低地帯に利根川が流下している。また、上武山地に接して第三紀層を基盤にもつ児玉丘陵が平野部に突出し、その延長上に同じく第三紀の丘陵である生野山・浅見山の各残丘が点列状に位置している。神流川扇状地は、本庄台地とも呼称されるが、この扇中央部に相当する区域には、神川町大字二宮所在の延喜式内社である金鑽神社付近を水源とする金鑽川と、本庄市児玉町宮内付近から水源を発する旧「赤根川」が合流した「女堀川」によって開析された沖積低地が形成されている。児玉丘陵の南側には、上武山地内の秩父郡皆野町金沢付近に水源を発する小山川（旧身馴川）が流下し、深谷市域を経て利根川へと注いでいる。

本報告にかかる新宮遺跡は、本庄市域の南側、児玉市街の北東約2.5kmの本庄市児玉町共栄の南端に相当し、児玉工業団地周辺の区域として開発が進んでいる。本遺跡の占地する本庄台地は神流川扇状地であり、立川面相当の平坦な台地面を形成している。本遺跡の東側は、本庄台地と金鑽川・赤根

川水系の河川である女堀川によって開析された低地帯に相当する区域であり、現状では低地部と台地部は明瞭な比高差をもっていない。しかし、本庄台地面においては表土層下にローム層が堆積しているのに対し、現在水田が展開している低地部においては粘質の沖積土が堆積しており、縄文時代には相互に一定の比高差をもっていたことが確認される。

条里水田形成以前の地形は、現在の平坦に見える区域においても小支谷や湿地が入り込み、埋没河川が検出されるなど、複雑な埋没地形が確認されている。また、台地に接する区域では、小さな谷状の地形も認められるところから台地縁辺部には湧水の存在も予想することができる。しかし、古墳時代後期には、すでに谷状の区域においても急速に埋没が進行し、大規模な水田化が開始され、奈良時代には次々と条里水田として整備されていった様子が窺える。本遺跡は、「女堀川」の低地を臨む本庄台地東側縁辺部の標高約 80 m の平坦部に位置している。

2 歴史的環境

本遺跡では、縄文時代中期の集落跡が検出されているところから、ここでは本庄市域における縄文中期の遺跡を中心に、本遺跡周辺の縄文集落をとり巻く歴史的な環境について概観しておきたい(註1)。

本調査地点を含む新宮遺跡(1: 恋河内 1995)は、縄文中期の「環状集落」を構成する遺跡であると考えられるが、近接して将監塚遺跡(3: 石塚他 1986)、古井戸遺跡(4: 宮井他 1989)という大規模な縄文中期の二つの「環状集落」が存在している。このように本遺跡の周辺には、将監塚遺跡、古井戸遺跡のような大規模な「環状集落」が隣接して設営されているとともに、本遺跡を含めた三つの「環状集落」の外縁部や周辺にも小規模な住居跡群が検出されていることに注意しておくべきである。たとえば、将監塚東遺跡(5: 鈴木他 1997)で検出された「加曾利EⅢ式」期の2軒の住居跡は、「環状集落」を構成する将監塚遺跡の縁辺部に相当するものである。また、将監塚遺跡の「環状集落」の北方約 200m で検出された2軒の住居跡や土壌等の遺構群(2: 長谷川他 1994)は、

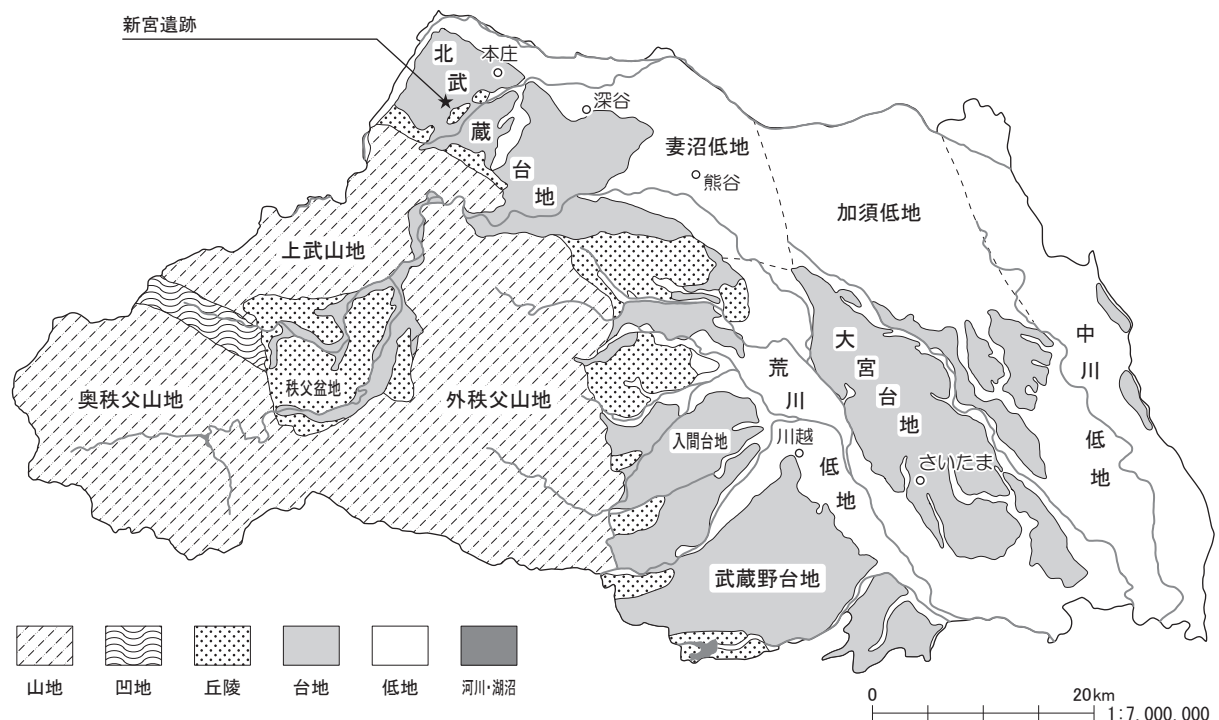


図2 埼玉県の地形

将監塚遺跡の集落の区域とは一定の距離をもち、相互の間に縄紋時代の遺構の存在しない空白区域が存在しているところから、この「環状集落」とは異なった“将監塚北遺跡”とでも呼ぶべき別の住居群を構成するものと捉えることができるであろう。

このように本遺跡周辺の本庄台地面には、縄紋中期の住居跡が数多く確認され、稠密な分布を示しているのに対し、縄紋前期においては、住居跡はおろか土器片の出土も極めて稀である。このような時期による集落の占地域の偏りは、これらの土地に依存する生業形態との関わりを予想させるものであり、中期においては沖積地を臨む平坦で広大な台地面を利用した集約化された用益活動を予想することができる。

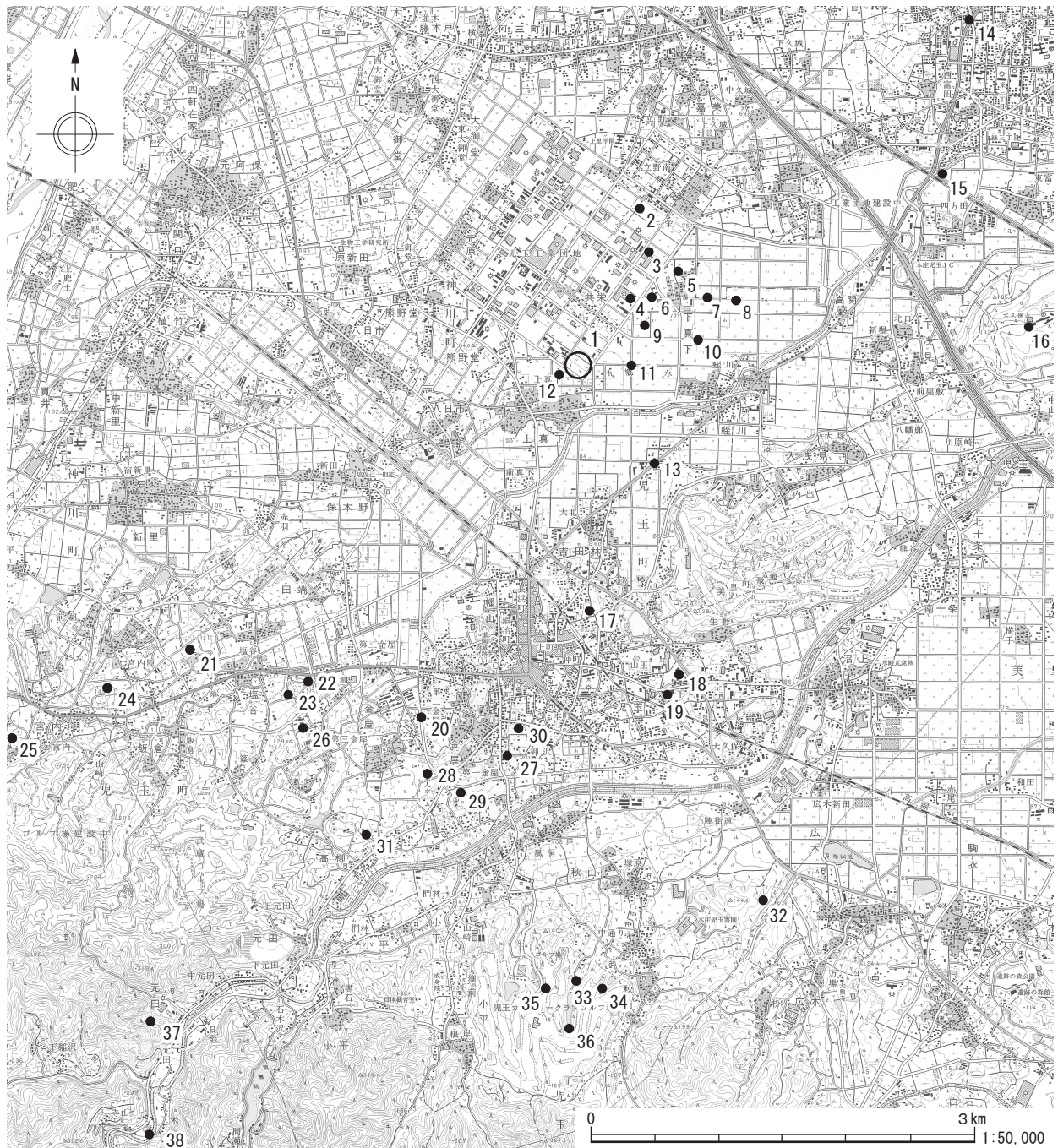
縄紋中期の遺跡は、この扇状地扇央部の平坦な台地面以外にも、縄紋前期以来、集落が営まれる傾向が顕著であった児玉丘陵部においても、塩谷平氏ノ宮遺跡(23: 恋河内他 2006)、宮内上ノ原遺跡(24: 松澤 2005・鈴木他 2006・宮田 2008)等の集落遺跡が数多く確認されている。また、児玉丘陵末端に連なる台地面に位置する長沖古墳群周辺には、長沖賀家上遺跡(27: 埼玉県 1980 他)、長沖村後遺跡(29: 大熊他 2002 他)、金屋中之道遺跡(30: 恋河内 2011)等が認められ、湧水点に近い台地面には児玉大天白遺跡(19: 浅間 2009)が確認されている(註 2)。このほか、橋ノ入遺跡(鈴木他 1986)、塔ノ入遺跡(37: 鈴木他 2007)などの山地域や、河内下ノ平遺跡(38: 松澤 2005)のような山間の河岸段丘上などからも集落遺跡が確認されており、また第三紀の残丘である浅見山丘陵においても大久保山遺跡Ⅱ区(16: 昆他 2001)等の中期の遺跡が確認されている。

これらの縄紋中期の遺跡は、それぞれ集落範囲の一部の調査にとどまっているが、いずれも本庄台地面の集落群と比肩しうような大規模な集落跡であったと考えることは難しい。しかし、集落遺跡の分布自体は、必ずしも特定の地形区分に偏在するのではなく、多様な地形においても相対的に均質な分布を示していることは、縄紋中期においては特定の生態的環境に依存するのではなく、様々な土地においても適応が可能な比較的等質な経済活動の志向性をもっていたことを想起させるものである。

ともあれ、新宮遺跡近傍に位置する「環状集落」の外形規模はおおむね一定であり、住居数が増加しても大規模な「環」を形成するのではなく、その規模には一定のまとまりがあり、住居数が増加する場合においては環状の集落域の外側に付加的に小規模な住居群が接続する現象が認められる。このように集落の外形が環状を構成することは、単に住居が環状の配置をもっているという現象ではなく、その環状という形態とその規模自体が何らかの社会的な関係と相関をもっていることを想起させるものである。おそらく「環状集落」を複数接続して設営しえたこの地域の縄紋中期の社会は、資源量と人口の相関関係に基づく離合集散という問題とともに、質的にもこれらの単位集落の相互を調整しえる弾力的な構成を採用していたものと考えられるであろう。

この地域における、このような大規模な「環状集落」の分解は、「加曾利EⅢ式」頃から始まると考えることができるが、本遺跡や将監塚・古井戸遺跡に見られる本庄台地面の大規模集落の周辺には、同時期の小規模な集落遺跡が検出されていることにも注意しておくべきであろう。例えば、本庄台地に近接する低地内の微高地には、平塚遺跡(9: 鈴木 1997)、中下田遺跡(11: 鈴木 1991)、前田遺跡(15: 増田 1989)、七色塚遺跡(恋河内 2008)等が、ともに「加曾利EⅢ式」以降の時期であり、中期末における集落の占地傾向の多様化の傾向を窺わせる。このように「加曾利EⅢ式」以降の時期には「環状集落」の分解に伴って、従来集落が占地することのなかった区域、とりわけ「環状集落」の近傍の

区域にも小規模な集落が設営されることは、日常的な用益地の分割の過程も予想させるものであるといつてよいであろう。このように中期末葉になると、「環状集落」に見られる居住単位複数による集合居住形態に変動が生じ、住居1～2棟の居住単位に分解し、分散居住する傾向を認めることができる。このような中期末の集落遺跡が拡散分布する様相は、これらの単位居住集団の一定の自立の過程を窺わせるものである。



1. 新宮遺跡 2. 将監塚B地点遺跡 3. 将監塚遺跡 4. 古井戸遺跡 5. 将監塚東遺跡 6. 内手遺跡 7. 藤塚遺跡 8. 堀向遺跡
9. 平塚遺跡 10. 神田遺跡 11. 中下田遺跡 12. 辻ノ内遺跡 13. 辻堂・南街道遺跡 14. 南大通線内遺跡 15. 西富田前田遺跡
16. 大久保山遺跡 17. 吉田林女池遺跡 18. 児玉清水遺跡 19. 児玉大天白遺跡 20. 倉林東遺跡 21. 真鏡寺後遺跡
22. 塩谷下大塚遺跡 23. 塩谷平氏ノ宮遺跡 24. 宮内上ノ原遺跡 25. 天田遺跡 26. 観音山遺跡 27. 賀家上遺跡
28. 長沖梅原遺跡 29. 長沖村後遺跡 30. 金屋中之道遺跡 31. 高柳南遺跡 32. 秋山諏訪平遺跡 33. 秋山北飯盛遺跡
34. 秋山南飯盛遺跡 35. 秋山竹ノ平遺跡 36. 秋山中山遺跡 37. 塔ノ入遺跡 38. 河内下ノ平遺跡

図3 新宮遺跡の位置と周辺の縄紋時代の遺跡

このような、本遺跡の周辺の縄紋中期の集落遺跡から出土する縄紋土器の系統的な組成は、中期後半期においても「加曾利E式」の系統はもとより、所謂「曾利式」の系統を含んでおり、遺跡それぞれの様相も決して等質ではないことに注意しておくべきである。これらの現象は、これらの遺跡群をとりまく社会的な環境を等質な関係に基づくものとして捉えるのではなく、錯綜した社会的な集団関係を何らかの形で反映している可能性を示唆するものである。このような遺跡形成過程の背景には、おそらく複数の土器の系統を包摂しえる社会的な原則が存在しているのであろう。縄紋中期集落の背景には、不均質な土器組成が恒常的に再生産される関係性が見出されるべきであろう。

縄紋土器の「型式」という枠組みには、比較的等質な系統的な関係をもった土器群が一定の地域内で相次いで生起することが前提として想定されており、基本的にこのような型式観を基に「型式」が設定され細別されている。しかし、実際の中期後半期の遺跡から出土する土器群は、複数の系統が一定の比率で恒常的に共存している状態が普遍的に確認されており、従来の型式観を見直す必要があることを教えている。集落の内部にこのような不均質な構成が内包されているとはいえ、集落形態が比較的近似することは、集落形態形成の原則と土器系統が維持される原則に違いのあることを予想させるものである。おそらく、共同用益地の用益形態も集落編成に近いものであろう。土器が互酬的な原則によってそれぞれの居住単位にもたらされるとしても、互酬を支える対抗的な集団が領域内部の社会的関係の内部に存在していなくてはならない。

この地域においては、「加曾利E IV式」期の住居数は激減しているが、古井戸遺跡 J-73 号住居跡が敷石住居であり、少なくとも敷石住居の構築に伴う石材の搬入には、一定の労働の結集を必要としていると考えてよいであろう。敷石住居のもつ儀礼的性格は、特定の社会的単位に基づくものであり、地域的な集団全体に及ぶものでないと推定されることにも注意しておかなければならない。このように集落遺跡の変動は、「環状集落」が分解する「加曾利E III式」期以降、集落遺跡が丘陵部や低地域にも拡散し、「加曾利E IV式」～称名寺式期を端境期として、新しい社会的な関係を前提とする、新しい生態的適応戦略に基づく集落の占地形態をもつ、縄紋後・晩期集落へと変化してゆくものと考えられることができる。

縄紋後・晩期においては、縄紋前・中期において盛んに利用されていた丘陵部や山地域では、零細な資料が検出されるに過ぎない状況へと変化しているが、女堀川流域の低地内の微高地に位置する南街道遺跡（13：恋河内 1996）では、称名寺式期の土壌が検出されている。このような占地傾向は、縄紋中期後半以来の占地形態を継承しているようである。縄紋後期初頭以降において継続する集落には、小河川の河道低地に接して占地する古川端遺跡（鈴木 1978）や藤塚遺跡（7：鈴木他 1997）がある。また、湧水点に接して集落が設営されている吉田林女池遺跡（17：恋河内 2001・2004）や児玉清水遺跡（18：鈴木他 2007）も積極的に水辺の環境を取り込んだ占地を採用する集落遺跡である。このように、縄紋後・晩期においては、湧水点や小河川に面する比較的低位の地点に集落遺跡が位置していることに注目するならば、何らかの形で水資源に依存する部分を想定してよいであろう。このような遺跡の占地形態は、該期における丘陵部や山地域での遺跡数の急速な減少とともに、土地利用形態の変化とも相関があるものと思われる。このように縄紋後・晩期の集落遺跡は、河川や湧水地をもつ小支谷に接する水源に隣接した占地をもち、中期と比較して低地域を集落の周辺に広く取り込んだ占地を採用していることは極めて特徴的である。ここでは、縄紋中期を中心とした歴史的環境を概観したが、今後はより具体的な生態的な環境と遺跡との関係を明らかにしていく必要がある。（鈴木徳雄）

註

(1) 本節は、この地域の縄紋集落の歴史的環境を概観するための覚書である。この地域の縄紋集落の推移等については、既刊の報文中（鈴木他 1986・1997・2006・2007）で、それぞれ検討しながら概観してきたところであり、詳細についてはこれらを参照して頂くことを望みたい。

(2) 埼玉県史（埼玉県 1980）において「賀家上遺跡」とされた地点と「江ノ浜遺跡」とされた地点は、その付近に位置する金屋南地区B地点（松澤 2005）など数地点の発掘調査によって同一の集落遺跡に相当するものと推定され、この長沖古墳群内の縄紋遺跡の区域を仮に“長沖賀家上遺跡”と呼称する。また、同じ長沖古墳群内の中之道地区B地点（恋河内 2011）や村後地区（大熊他 2002）でも縄紋中期の遺構や遺物が検出されており、ともに長沖賀家上遺跡との間に縄紋時代の遺物等が検出されない区域を挟んでいるところから、それぞれ別の集落遺跡として、“金屋中之道遺跡”、“長沖村後遺跡”を構成するものと推定することができる。

引用参考文献

- 浅間 陽（2010）『児玉大天白遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第 34 集
- 石塚久則他（1986）『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 63 集
- 大熊季広他（2002）『長沖古墳群Ⅲ－村後地区・飯玉地区（C・D地点）－』児玉町文化財調査報告書第 36 集
- 恋河内昭彦（1990）『下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第 11 集
- 恋河内昭彦（1995）『南共和・新宮遺跡』児玉町調査会報告第 6・7 集
- 恋河内昭彦（1996）『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第 20 集
- 恋河内昭彦（2001）『女池遺跡－B・D地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第 35 集
- 恋河内昭彦（2004）『女池遺跡－A地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第 16 集
- 恋河内昭彦（2006）『金屋下別所遺跡B地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡E地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 恋河内昭彦（2008）『七色塚遺跡Ⅱ－B1地点－・北堀新田前遺跡－A1地点－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 7 集
- 恋河内昭彦（2011）『長沖古墳群Ⅸ－長沖 172 号墳・長沖 173 号墳・長沖 30 号墳の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 24 集
- 昆 彭生（2001）『大久保山Ⅸ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告 9
- 埼玉県（1980）『埼玉県史 資料編 1』原始 旧石器・縄文
- 鈴木敏昭他（1978）『東谷・前山 2 号墳・古川端』埼玉県遺跡調査報告書 第 16 集
- 鈴木徳雄他（1986）『橋ノ入遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第 6 集
- 鈴木徳雄他（1991）『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第 15 集
- 鈴木徳雄他（1997）『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第 26 集
- 鈴木徳雄他（2006）『宮内上ノ原遺跡Ⅱ』本庄市遺跡調査会報告書第 20 集
- 鈴木徳雄他（2007）『塔ノ入遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第 13 集
- 鈴木徳雄他（2007）『児玉清水遺跡Ⅱ－B地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第 19 集
- 長谷川勇他（1994）『将監塚遺跡B地点発掘調査報告書』本庄市遺跡調査会報告書第 4 集
- 増田一裕（1989）『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 14 集
- 松澤浩一（2005）『宮内上ノ原遺跡－B地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第 18 集
- 松澤浩一（2005）『河内下ノ平遺跡の発掘調査』『児玉郡市文化財担当者会報』第 5 号 児玉郡市文化財担当者会
- 松本 完他（2009）『浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）・久下東遺跡（Ⅲ次）A1・A2地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
- 宮井英一他（1989）『古井戸－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 75 集
- 宮田忠洋（2008）『宮内上ノ原遺跡Ⅲ－E地点の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 10 集

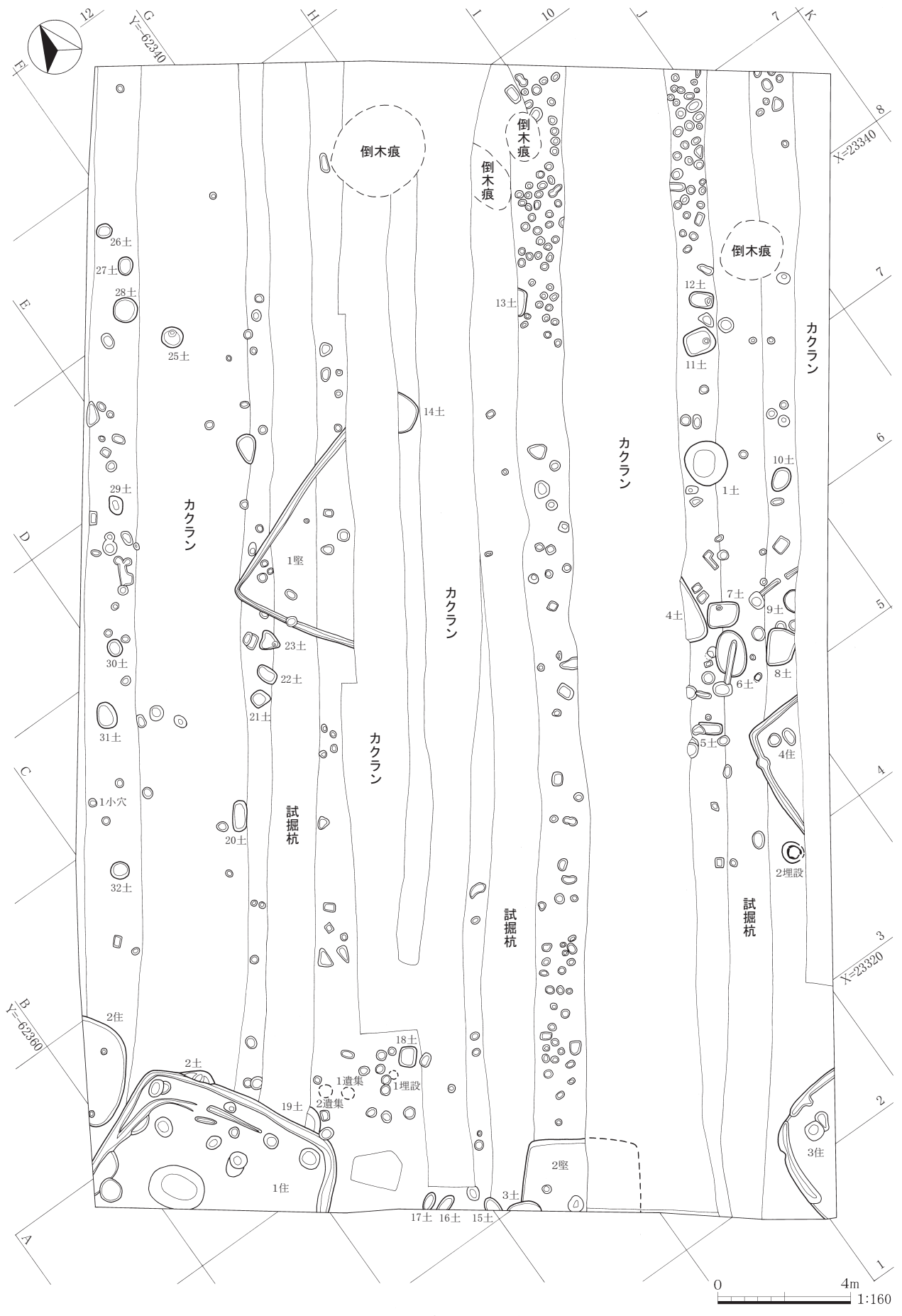


図4 新宮遺跡C地点全測図

Ⅲ 調査の成果

1 遺構の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡4軒、竪穴状遺構2棟、埋設土器2基、土坑32基、遺物集中部2箇所、小穴（ピット）である。所産時期が判明するものは縄紋時代中期後葉に比定される。なお、調査範囲の制限や現代の掘削による攪拌のため全容を把握できていない遺構が多い。竪穴住居跡には様々な形態が認められる。1号住居跡では加曾利EⅠ式期（1a住）と加曾利EⅢ式期（1b住）のものが入子状に重複していた。竪穴状遺構は炉や柱穴配置など定型的な施設をもたない不明瞭な遺構で竪穴住居跡である可能性を有する。埋設土器は残存状態の良好な縄紋土器が逆位で埋設されており、異なる埋没過程が予想される遺物集中部の事例と区別した。土坑や小穴（ピット）は多数検出されたが、判然としないものが大半を占める。ただし、1号小穴には多量の黒曜石片が検出されており、石器製作に伴う痕跡を想起させる。なお、土坑や小穴は選択して図化した。

2 遺物の概要

検出された遺物は縄紋時代と古代の所産である。

縄紋時代の遺物は縄紋土器と石器及び土製品である。縄紋土器は縄紋時代中期中葉から後葉の土器群を主体に後期中葉及び晩期前葉の土器群が微量認められている。中期では中葉の土器群である勝坂式と阿玉台式が確認されている。遺構に伴う出土はなく、他時期の遺構覆土中や遺構外から検出されている。中期後葉の土器群は本遺跡の中心であり、1a・b号竪穴住居跡や埋設土器等遺構に伴った出土を中心として調査区全体にわたって検出されている。本時期は加曾利EⅠ式から加曾利EⅢ式のほか唐草文系土器が出土しているが、その大部分を加曾利EⅠ式が占める。後期中葉加曾利B式期の土器群及び晩期前葉安行3d式の土器群については遺構外のみ出土である。

石器はスクレイパー、打製石斧、磨製石斧、砥石、磨石、敲石、凹石、台石等が出土している。そのほか、緑色岩質及び結晶片岩質の棒状の自然礫が多数出土している。

土製品では土製円盤のほか、1a・b号竪穴住居跡からは土偶の一部が検出されている。土偶は将監塚遺跡や古井戸遺跡をはじめとする近隣遺跡では検出されていないことから貴重な資料であるといえる。

古代の遺物では土師器坏や甕、須恵器碗の碎片が少量ではあるが出土しており、概ね8世紀代に比定される。本調査では当該期の遺構は検出されていないが、本調査区西側にある新宮遺跡D地点や北側に位置する南共和遺跡において同時期の遺構が検出されていることから、本調査区周辺においても遺構が存在する可能性がある。

3 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡（SI）

1a・b号竪穴住居跡（図5～14、表1～4/写真図版3・8～10）

位置：調査区の南側、A4～6、B4～6、C4・5グリッドに所在する。遺構南・西側が調査範囲外にかかる。重複：1a号・1b号竪穴住居跡の2軒が重複し（1a住：5～10層、1b住：1～4層）、

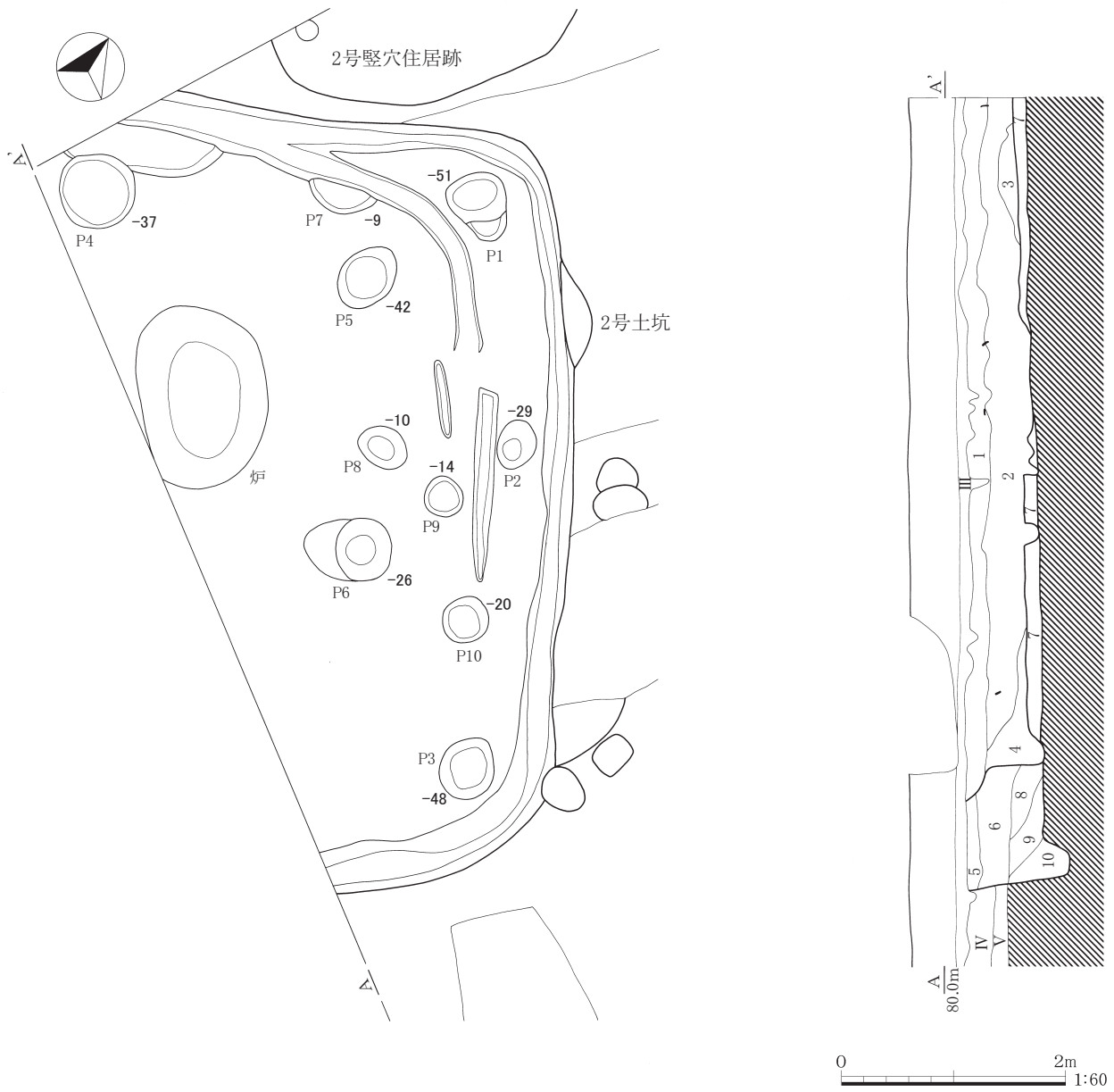


图5 1 a · b号竖穴住居迹

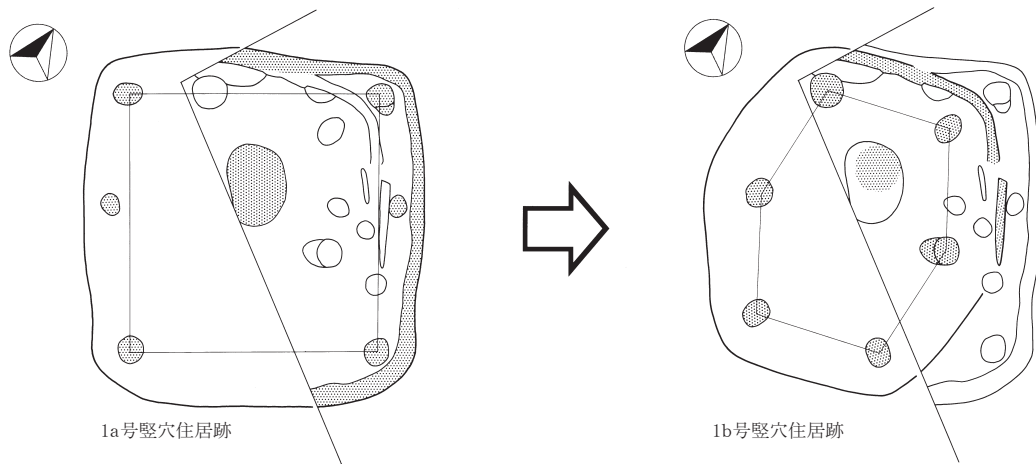


图6 1 a · b号竖穴住居迹模式图

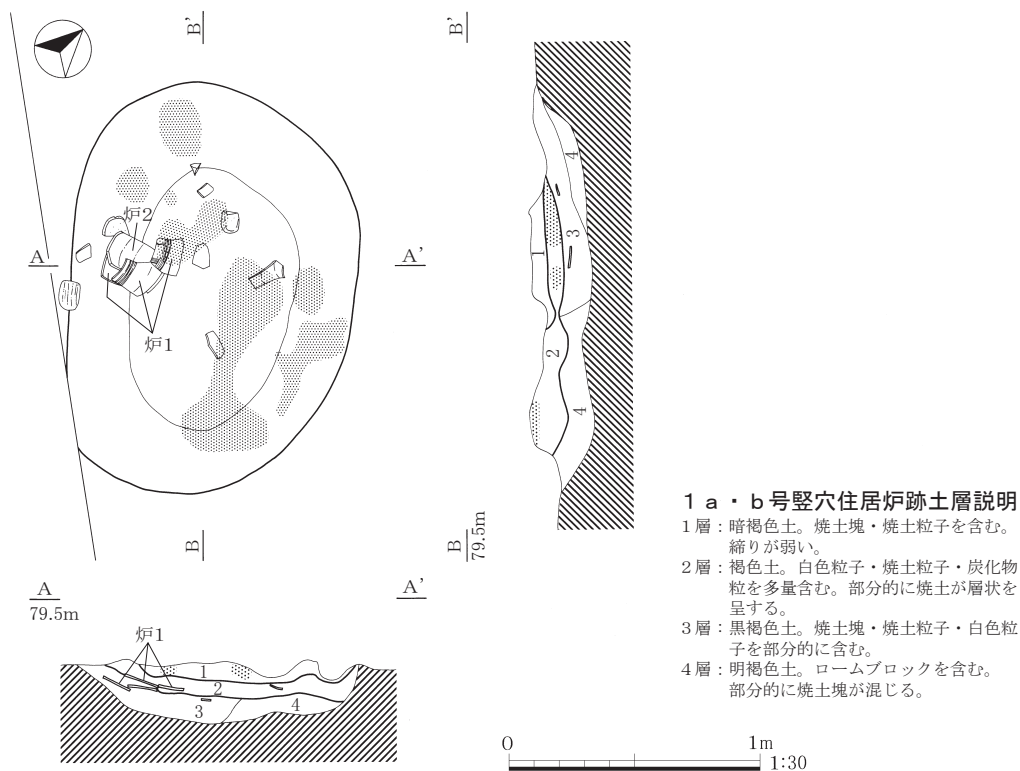


図7 1 a・b号竪穴住居炉跡

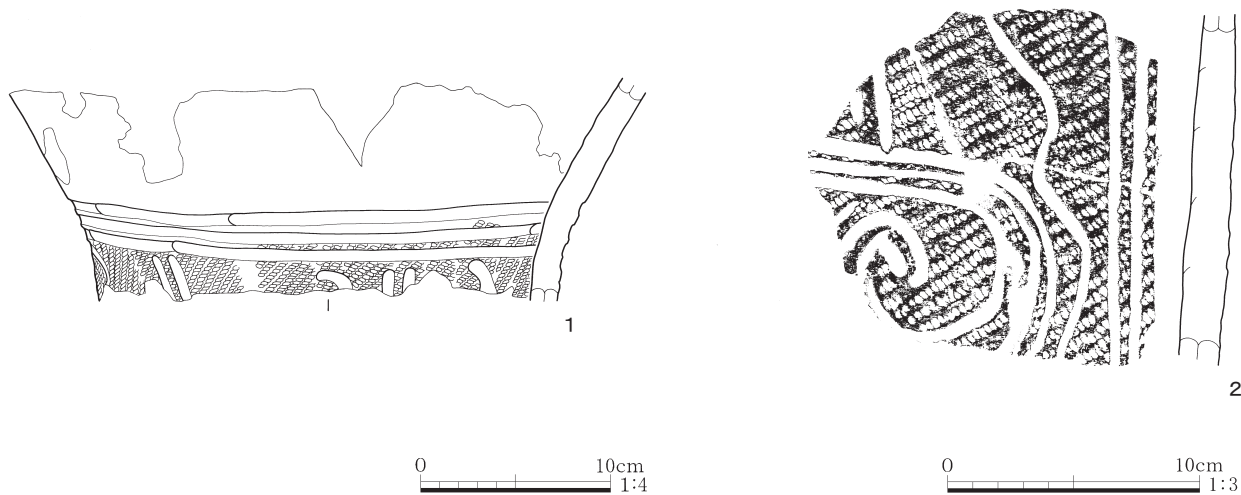


図8 1 a・b号竪穴住居炉跡出土遺物

表1 1 a・b号竪穴住居炉跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径 — 底径 — 器高 [11.7]	頸部に3条の横位沈線区画。胴部に単節RLの縄紋を縦位施紋したのち、懸垂文を施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	2と同一。頸部。
2	深鉢	口径 — 底径 — 器高 [14.8]	胴部に単節RLの縄紋を縦位施紋したのち、懸垂文を施文。	角閃石、石英、片岩、白色岩片、砂粒 内 灰黄褐色 外 にぶい褐色	1と同一。胴部片。



图9 1 a · b号 · 2号竖穴住居跡遺物出土状況

後者が新しい。なお、現代の掘削により著しく攪拌されている。**形状・規模**：1 a号竪穴住居跡の平面は隅丸方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は残存長軸6.84 m、残存短軸4.55 m、深さ68cm程を測る。1 b号竪穴住居跡の平面は楕円形ないし隅丸六角形を呈すると推測される。壁は垂直に立ち上がり、上端に段を持つ。規模は残存長軸5.07 m、残存短軸4.13 m、深さ43～55cmを測る。**床面**：ほぼ平坦で、周溝が巡る。また、P 4脇に浅い掘り込みが認められる。**柱穴**：10基の小穴を検出した。P 1・3は1 a号竪穴住居跡、P 4～6は1 b号竪穴住居跡の主柱穴に想定される。**炉**：1 a号竪穴住居跡に相当する炉の平面は長軸161cm・短軸111cmの楕円形で、深さ29cmに及ぶ掘り方を有する。1 b号竪穴住居跡の炉は1 a号住居跡の炉上に重複する。平面形は攪拌により判然としない。**遺物出土状況**：多量の縄紋土器・石器が出土した。竪穴の上～下層にかけて濃密に分布し、接合する資料も多い。特に、1 a号竪穴住居跡の炉床では遺存状態の良好な土器片が見受けられた。なお、遺物のない空白部は攪拌の範囲である。縄紋土器は加曾利E I・Ⅲ式、曾利I式、有孔罌付土器が認められる。石器はスクレイパー・打製石斧・リタッチドフレイク・凹石などが組成し、打製石斧が多い。また、片岩質の棒状の自然礫が大量に出土している。他に、器台・土偶・土製円盤が検出された。**所見**：1 a号住居跡は縄紋中期後葉加曾利E I式期、1 b号住居跡は加曾利E Ⅲ式期の住居跡に比定される。

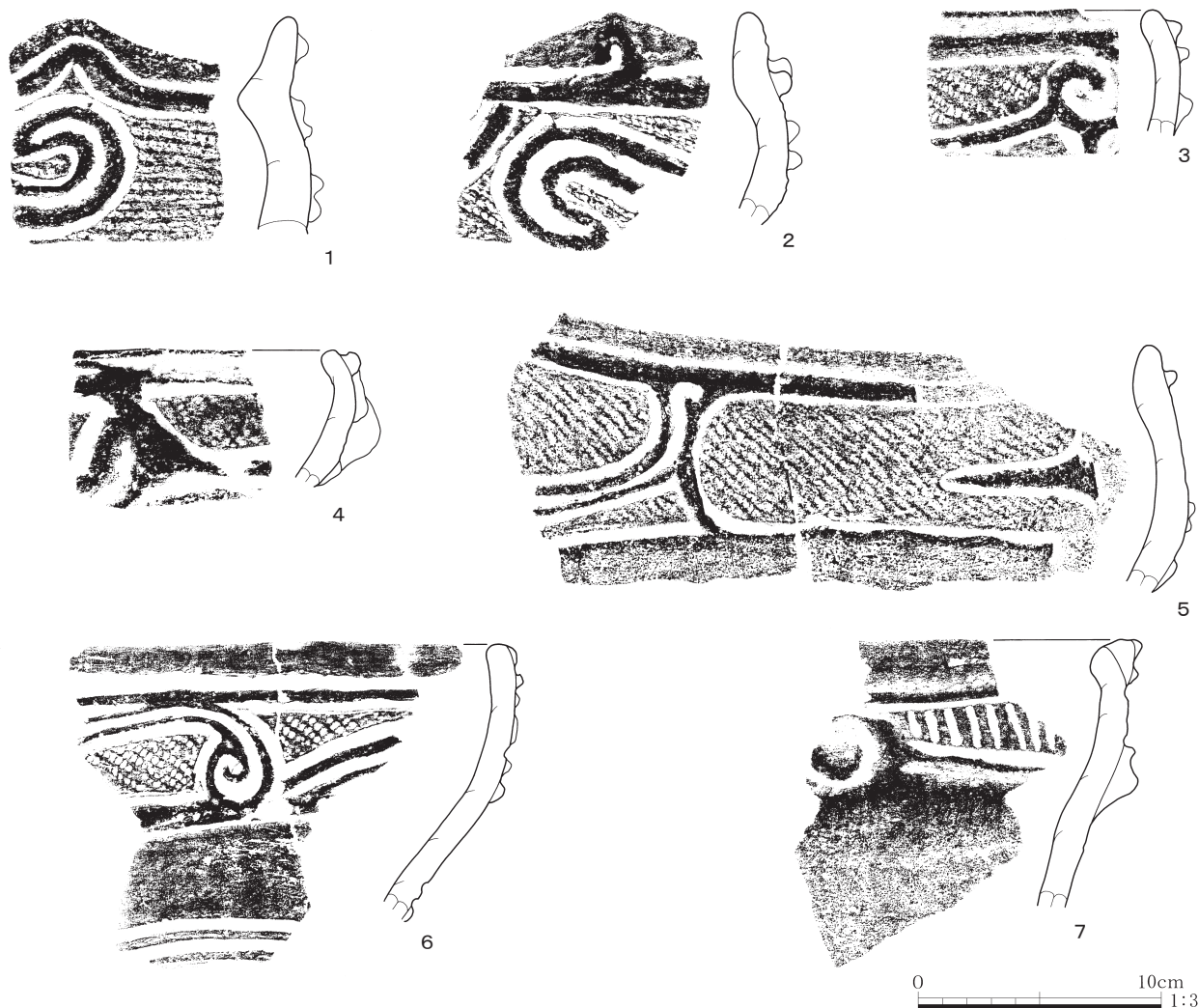
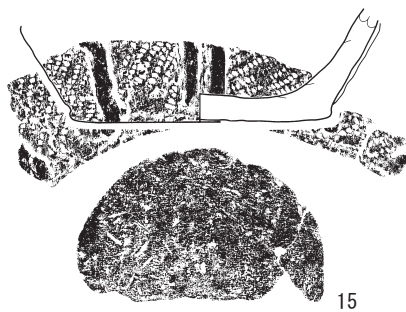
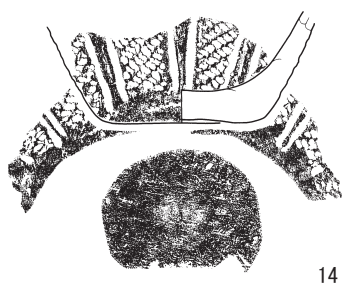
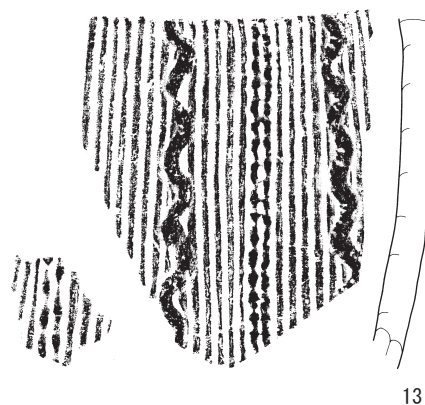
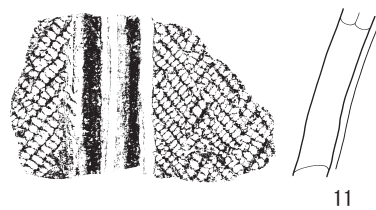
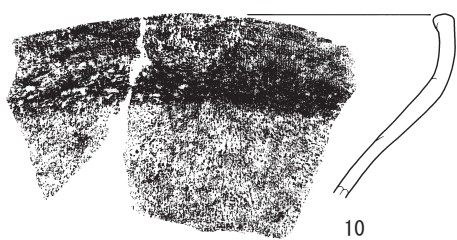
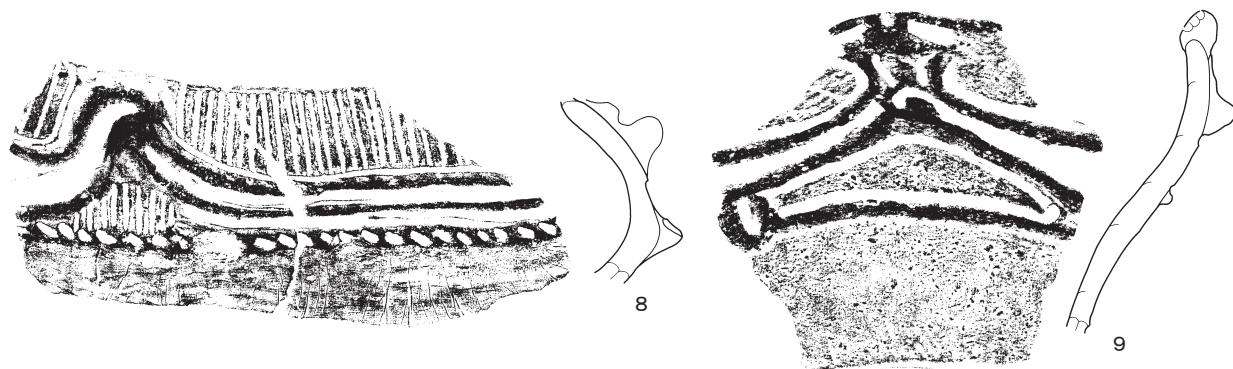


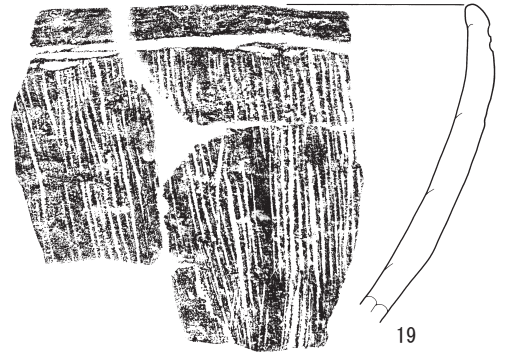
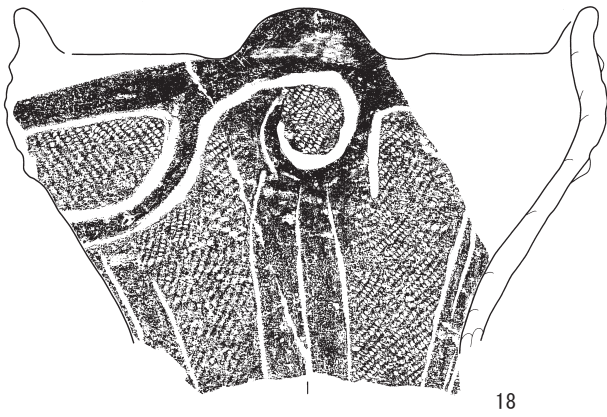
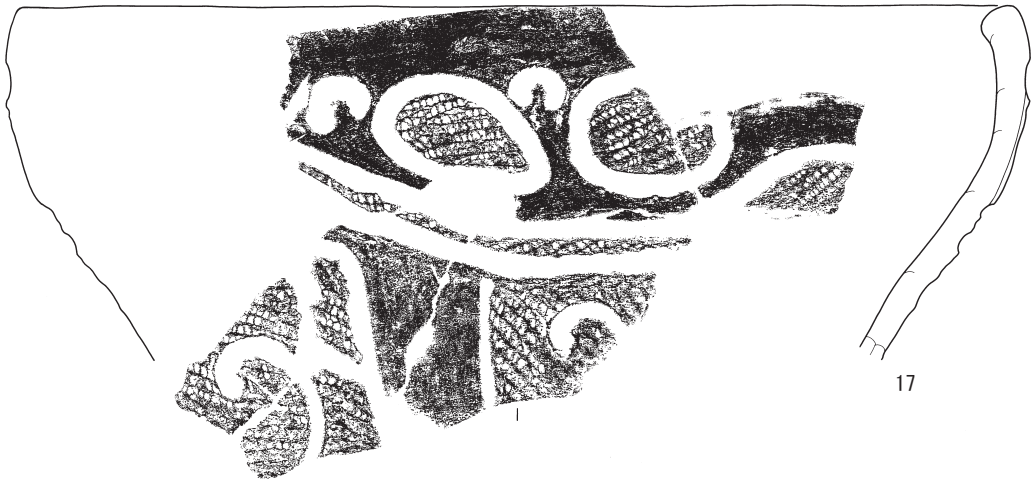
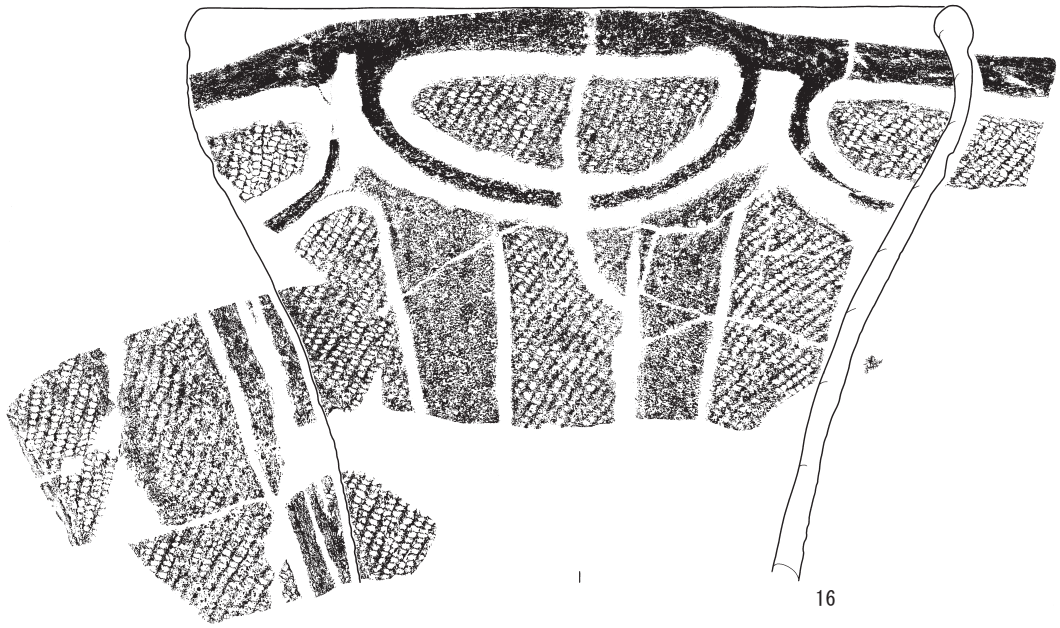
図10 1 a・b号竪穴住居跡出土遺物(1)



0 (14·15) 10cm
1:4

0 10cm
1:3

图11 1 a · b号竖穴住居迹出土遗物(2)



0 (16·17·18) 10cm
1:4

0 10cm
1:3

图 12 1 a · b 号竖穴住居跡出土遺物 (3)



图 13 1 a · b 号竖穴住居迹出土遗物 (4)

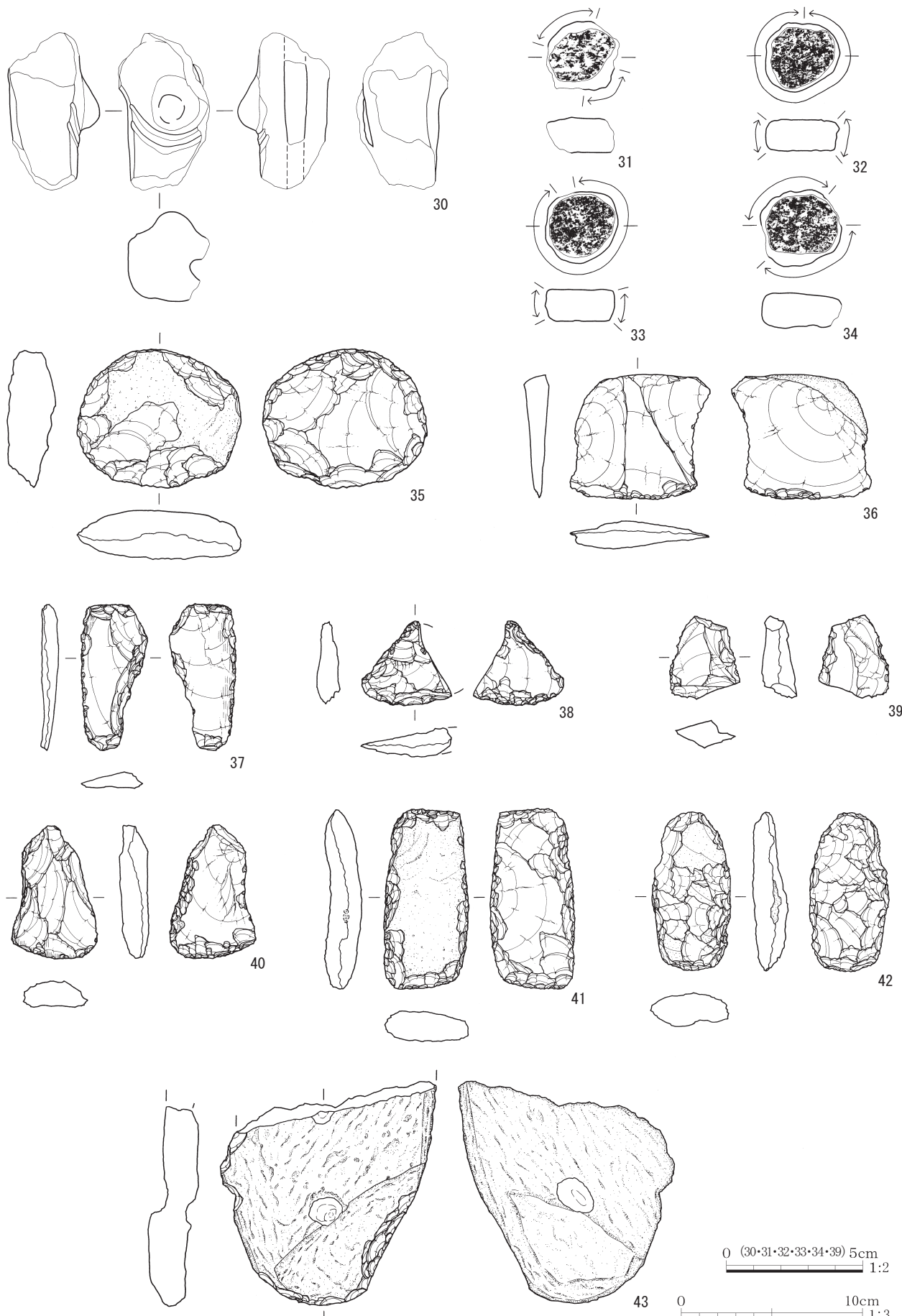


图 14 1 a · b 号竖穴住居跡出土遺物 (5)

表2 1a・b号竪穴住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	文様・形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.8]	小波状口縁。地紋に無節Lの撚糸紋を縦位施紋。 口唇部に隆帯区画。口縁部に隆帯の横S字文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.5]	小波状口縁。地紋に無節Lの撚糸紋を斜位施紋。 口唇部に隆帯区画。口縁部に隆帯の横S字文。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.1]	口唇部に隆帯区画。口縁部に隆帯の渦巻文を連結。 区画内に単節RLの縄紋を横位施紋。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 明赤褐色 外 にぶい橙色	口縁部片。
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.5]	口唇部に隆帯区画。口縁部に隆帯の渦巻文を連結。 区画内に単節RLの縄紋を横位施紋。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
5	深鉢	口径— 底径— 器高 [10.2]	波状口縁。口縁部に単節RLの縄紋を横位施紋。 口唇部に隆帯区画。口縁部に隆帯の渦巻文を連結。 区画内に隆帯三叉文。貼付後、区画外の縄紋を磨消。 頸部無文帯表出。	角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 浅黄橙色 外 浅黄橙色	口縁部～ 頸部片。
6	深鉢	口径— 底径— 器高 [11.2]	口縁部に単節RLの縄紋を横位施紋。口唇部と口縁部に隆帯区画。口縁部に隆帯の横位渦巻文を連結。 貼付後、区画外の縄紋磨消。頸部に2条の横位沈線区画を配し頸部無文帯を表出。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 赤褐色 外 赤褐色	口縁部～ 頸部片。
7	深鉢	口径— 底径— 器高 [10.9]	口唇部に隆帯区画。口縁部に隆帯の渦巻文を連結。 区画内に縦位の単沈線を充填施文。頸部無文帯を表出。	角閃石、白色岩片、砂粒 内 赤褐色 外 赤褐色	口縁部～ 頸部片。
8	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.2]	胴部最大径部に刻みを施した横位隆帯区画。胴上半に縦位沈線を充填後、横位隆帯文を貼付。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 灰黄色 外 にぶい橙色	胴部片。
9	深鉢	口径— 底径— 器高 [12.7]	口唇部と口縁部に横位隆帯区画。区画内に横位隆帯文を施文。頸部に横位沈線区画を配し頸部無文帯を表出。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	口縁部～ 頸部片。
10	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.2]	口縁部無文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部～ 頸部片。
11	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.5]	地紋に単節LR、RLの単節縄紋で縦位羽状縄紋を施紋。のち、隆帯懸垂文を貼付。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 灰黄褐色 外 にぶい橙色	胴部片。
12	深鉢	口径— 底径— 器高 [9.9]	半截竹管状工具による櫛目文と等間隔に縦位連続刺突文を胴部地文とし、隆帯による唐草文と蛇行懸垂文を貼付。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	15と同一カ。 胴部片。
13	深鉢	口径— 底径— 器高 [13.8]	半截竹管状工具による櫛目文と等間隔に縦位連続刺突文を胴部地文とし、隆帯による蛇行懸垂文を貼付。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	14と同一カ。 胴部片。
14	深鉢	口径— 底径 8.8 器高 [5.9]	底部直前まで懸垂文を施文。懸垂文内磨消。懸垂文間に単節RLの縄紋を充填施紋。底面はミガキ調整でやや上げ底。	角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	底部、3/4 残存。
15	深鉢	口径— 底径 13.8 器高 [5.9]	地文に単節RLの縄紋を縦位施紋したのち、隆帯懸垂文を貼付。底部はミガキ調整で中央やや上げ底。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	底部、1/2 残存。
16	深鉢	口径 (39.8) 底径— 器高 [30.3]	口唇部肥厚。口縁部に隆帯による楕円区画。区画内に単節LRの縄紋を横位充填施紋。胴部は懸垂文による区画。区画内に単節RLの縄紋を縦位充填施紋したのち、懸垂文間を磨消。	角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部～ 胴部上半。
17	深鉢	口径 (52.0) 底径— 器高 (18.7)	口縁部に隆帯による楕円文区画と渦巻文。区画内に単節LRの縄紋を縦位充填施紋。胴部に沈線による横位及び懸垂文区画。区画内に単節LRの縄紋を縦位充填施紋したのち、蕨手文を施文。懸垂文間は磨消。	片岩、赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 浅黄褐色	口縁部～ 胴部上半。

表3 1a・b号竪穴住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	文様・形態・成形手法の特徴				胎土・色調	備考
18	深鉢	口径(30.0) 底径— 器高[18.2]	口唇部に4単位の突起。口縁部に隆帯による横渦巻文区画。区画内単節RLの縄紋を横位充填施紋。胴部に沈線による懸垂文区画。区画内に単節RLの縄紋を縦位施紋したのち、懸垂文間を磨消。				石英、角閃石、赤色岩片、砂粒 内 浅黄橙色 外 浅黄橙色	口縁部～胴部上半。
19	鉢	口径— 底径— 器高[12.5]	口縁部に一条の横位沈線区画。区画下の胴部には櫛歯状工具による縦位条線文。				石英、角閃石、片岩、白色岩片 内 橙色 外 橙色	口縁部～胴部上半。
20	深鉢	口径— 底径— 器高[10.4]	口縁部に横位交互刺突文区画。胴部に沈線による懸垂文区画。区画内に単節RLの縄紋を縦位充填施紋したのち、懸垂文間を磨消。				石英、角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 浅黄橙色 外 橙色	口縁部片。
21	深鉢	口径— 底径— 器高[11.0]	口唇部は無文。単節RLの縄紋を口縁部に横位、胴部には縦位に施紋して地紋とし、その後胴部に沈線文を施文。				角閃石、片岩、砂粒 内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	口縁部～胴部上半。
22	深鉢	口径— 底径— 器高[7.8]	口縁部に隆帯による渦巻文と方形区画。区画内単節RLの縄紋を横位充填施紋。				角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 灰黄褐色	口縁部。
23	深鉢	口径— 底径— 器高[8.5]	口唇部に4単位の突起。内面に渦巻文。口縁部に隆帯による渦巻文区画。区画内単節RLの縄紋を縦位施紋。				角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
24	深鉢	口径— 底径— 器高[7.8]	口唇部に4単位の突起。内面に渦巻文。口縁部は隆帯による楕円区画。区画内に単節RLの縄紋を横位充填施紋。隆帯区画下端に丸棒状工具頭部による連続刺突文。				石英、角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
25	鉢	口径— 底径— 器高[10.8]	胴部上面に大形把手を配す。単節RLの縄紋を縦位施紋したのち、把手間に沈線による楕円文。				角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
26	深鉢	口径— 底径— 器高[15.0]	沈線による懸垂文。懸垂文間に「U」字文と蕨手文を施文。懸垂文区画内に単節RLの縄紋を縦位充填施紋。				角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 にぶい黄橙色	胴部片。
27	深鉢	口径— 底径(6.8) 器高[3.6]	上げ底底部。全体によく撫でられている。				角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい黄橙色 外 にぶい橙色	底部、1/2残存。
28	有孔罎付	口径— 底径— 器高[5.0]	罎付土器。罎部に2ヶ所穿孔がみられる。器面はよく磨かれる。				角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 褐色	胴部片。
29	器台	口径— 底径(19.0) 器高[5.2]	残存部2ヶ所に円孔がみられる。内外面ともによくナデ調整が行われている。				角閃石、片岩、白色岩片 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	胴部～底部片。
No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	
30	土偶	[5.8]	[3.4]	3.4	-	右上半身。芯棒がみられる。右乳房を表現し、その下端に2条の平行沈線を施文。側面及び背面は無文。	角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	
31	土製円盤	2.5	2.7	1.3	9.30	側面一部に摩耗痕。	片岩、砂粒 表 明赤褐色 裏 にぶい赤褐色	
32	土製円盤	2.5	2.7	1.2	9.44	側面全面に摩耗痕。	片岩、砂粒 表 明赤褐色 裏 にぶい褐色	
33	土製円盤	2.6	2.7	1.2	9.89	側面一部に摩耗痕。	角閃石、片岩、砂粒 表 にぶい黄褐色 裏 橙色	
34	土製円盤	2.8	3.0	1.3	11.30	側面一部に摩耗痕。	石英、角閃石、片岩、砂粒 表 明赤褐色 裏 にぶい橙色	

表4 1a・b号竪穴住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	製作技法・特徴
35	スクレイパー	安山岩	7.60	9.00	2.68	210.9	礫皮をもつ剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。刃部周辺やや摩耗。
36	スクレイパー	頁岩	6.83	7.65	2.50	63.3	礫皮を打面とする剥片を素材とする。縁辺を直接打撃による両面調整。右側縁の一部に微細剥離痕。
37	スクレイパー	頁岩	7.98	3.65	0.95	25.1	縦長剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。刃部周縁に微細剥離痕や摩耗痕があり、微細剥離痕が新しい。
38	スクレイパー	頁岩	4.65	[4.95]	[1.56]	20.3	右半部欠損。剥片を素材とする。周縁に直接打撃による両面調整。刃部に微細剥離痕。横型石匙の可能性あり。
39	スクレイパー	チャート	3.05	2.60	1.30	7.7	風化面をもつ小型剥片を切断し、右側縁を押圧剥離による両面調整。左側縁に微細剥離痕。石鏃未製品の可能性あり。
40	打製石斧	頁岩	7.26	4.70	1.65	55.2	剥片を素材とする。二側縁を直接打撃による片面調整。左側縁の一部に微細剥離痕。表面の刃部周辺に摩耗痕。
41	打製石斧	砂岩	9.85	4.65	2.05	122.5	短冊形。礫皮をもつ剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。右側縁の一部に節理面。
42	打製石斧	ホルンフェルス	8.70	4.35	1.95	74.0	礫皮をもつ剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。全体に風化が顕著。
43	凹石	緑色岩類	[12.10]	[11.85]	2.80	441.1	上部欠損。表面2穴、裏面1穴。表面の周縁に剥離痕。

2号竪穴住居跡(図15・16、表5/写真図版4・10)

位置: 調査区の南側、A6、B6グリッドに所在する。遺構北西側の大半が調査範囲外にかかる。**形状・規模:** 平面は隅丸方形ないし楕円形を呈すると推測され、壁は傾斜して立ち上がる。規模は残存長軸2.88m、残存短軸1.35m、深さ9~42mを測る。**床面:** ほぼ平坦である。**柱穴:** 支柱穴に想定される2基の小穴を検出した(P1・2)。他の住居跡と比べて平面径が小さいものの、掘りこみは深い。**炉:** 調査範囲の制限から存否を確認できなかった。**遺物出土状況:** 少量の縄紋土器や土製円盤が出土した。いずれも小片ばかりで、竪穴上層に分布する。加曽利EⅠ・Ⅲ式が認められる。**所見:** 縄紋中期後葉加曽利EⅢ式期の住居跡に比定される。

3号竪穴住居跡(図17・18、表6/写真図版4・11)(旧4号竪穴住居跡)

位置: 調査区の南側、E2・3、F2・3グリッドに所在する。遺構南東側の大半が調査範囲外にかかる。**重複:** 土坑状・ピット状の掘りこみが、断面の観察から認められる(2・3層)。**形状・規模:** 平面は隅丸方形を呈すると推測され、壁は傾斜して立ち上がる。規模は残存長軸2.61m、残存短軸2.28m、深さ33~45cmを測る。**床面:** やや凹凸が見受けられ、北・東壁際に部分的な周溝が巡る。**柱穴:** 2基の小穴を検出した(P1・2)。支柱穴に想定され、重複することから柱の付け替えが見込まれる。**炉:** 調査範囲の制限から存否を確認できなかった。**遺物出土状況:** 少量の縄紋土器・石器が出土した。いずれも小片ばかりで、竪穴内に散在する。加曽利EⅢ式や瓢形注口土器が認められる。**所見:** 縄紋中期後葉加曽利EⅢ式期の住居跡に比定される。

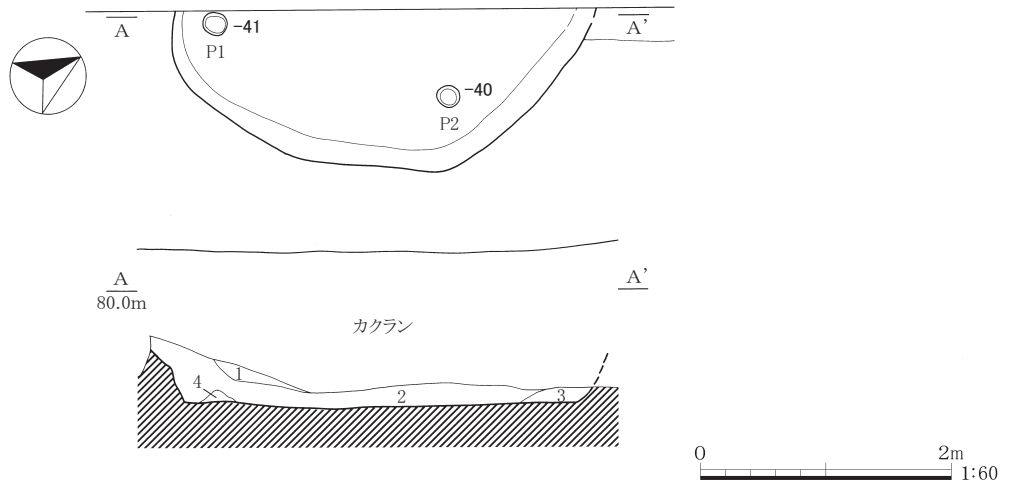


図15 2号竪穴住居跡

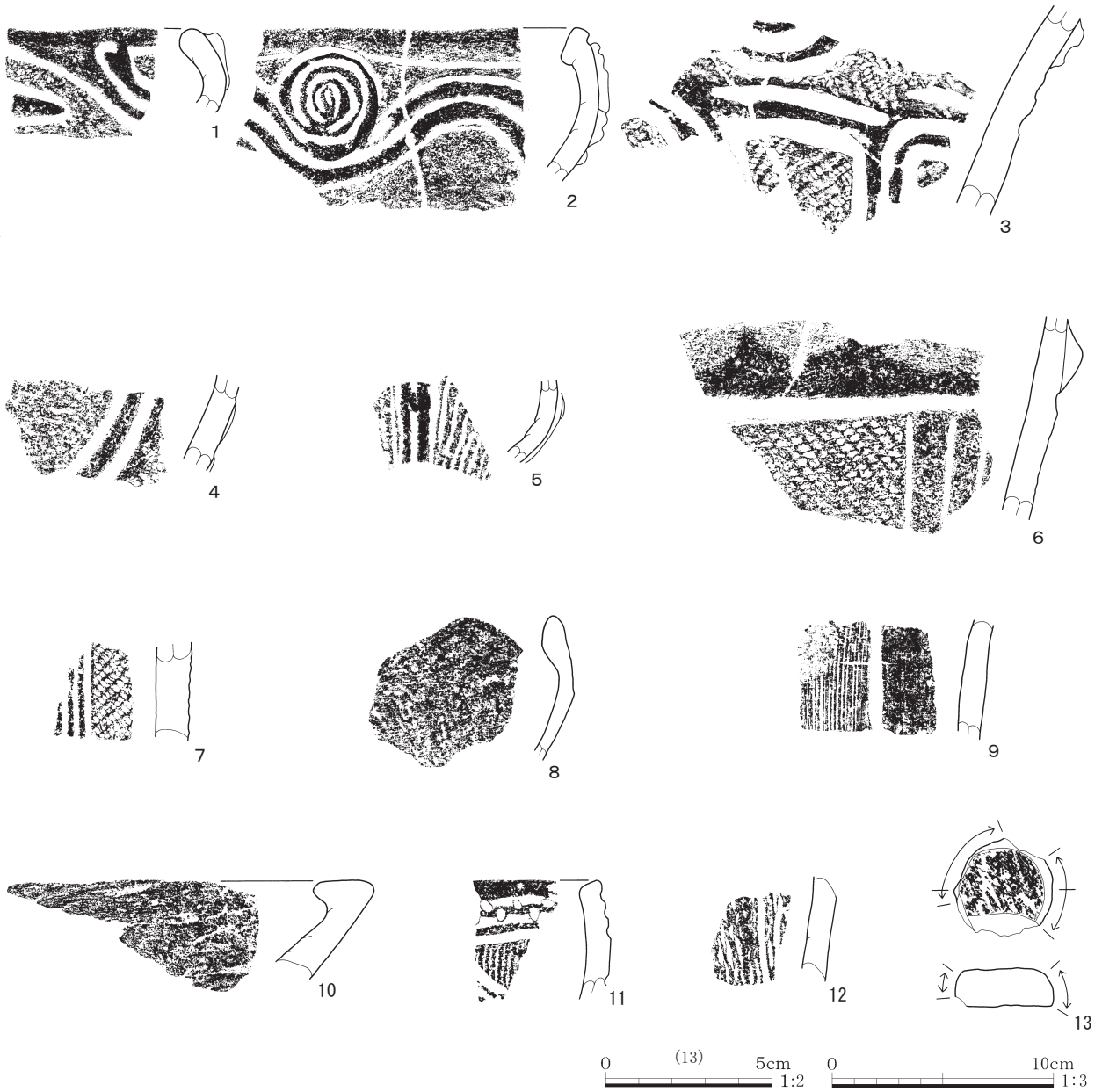


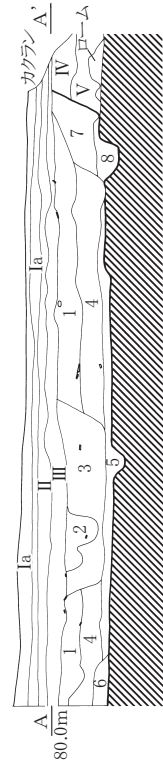
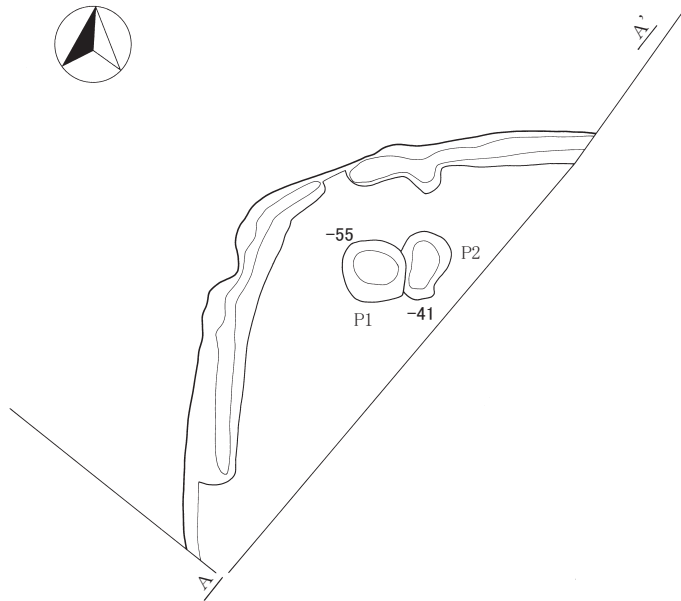
図16 2号竪穴住居跡出土遺物

表5 2号竪穴住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	文様・形態・成形手法の特徴				胎土・色調	備考
1	深鉢	口径— 底径— 器高 3.7	口縁部に隆帯区画と横位渦巻文。区画内に単節RLの縄紋を横位施紋。				角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.8]	口唇部に隆帯区画。口縁部に横位蛇行隆帯と渦巻文。				角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 橙色	口縁部片。
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [9.4]	口縁部に隆帯による渦巻文を施文。区画内に単節RLの縄紋を横位施紋。頸部に横位短沈線で区画。胴部には隆帯による懸垂文と沈線区画。区画内に単節RLの縄紋を縦位充填施紋。				石英、角閃石、片岩、白色・黒色岩片、砂粒 内 橙色 外 にぶい橙色	胴部片。
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.2]	胴部に隆帯による渦巻文。渦巻文内には刺突文カ。				角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 明赤褐色	胴部片。
5	鉢	口径— 底径— 器高 [3.6]	櫛目文を地文としたのち隆帯による懸垂文と円形貼付文を施文。				片岩、白色・黒色岩片、砂粒 内 灰黄色 外 浅黄褐色	胴部片。
6	深鉢	口径— 底径— 器高 [9.0]	口縁部は隆帯による区画。隆帯下に1条の沈線を廻らせ頸部区画とする。胴部に沈線による3条の懸垂文区画を施文。懸垂文区画に単節LRの縄紋を縦位充填施紋したのち懸垂文内を磨消。				石英、角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 明赤褐色 外 橙色	胴部片。
7	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.4]	単節RLの縄紋を縦位施紋したのち、沈線による3条の懸垂文を施文。懸垂文内は磨消。				角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	胴部片。
8	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.5]	波状口縁。波状口縁部内面肥厚。口縁部無文。頸部に単節RLの縄紋を横位施紋。				石英、角閃石、赤色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい黄褐色	口縁部片。
9	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.3]	沈線による懸垂文。懸垂文内に櫛歯状工具による縦位条線文。懸垂文間は磨消。				片岩、白色岩片、砂粒 内 明黄褐色 外 にぶい黄褐色	胴部片。
10	鉢	口径— 底径— 器高 [4.4]	無文の口縁部。				角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 浅黄褐色 外 橙色	口縁部片。
11	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.4]	口縁部に連続交互刺突を施した2条の横位沈線が廻る。横位沈線下に楕円区画を配し、区画内に無節Lの燃糸紋を縦位充填施紋。				片岩、白色岩片、砂粒 内 明赤褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
12	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.7]	反撚を地紋としたのち、懸垂文を施文。				角閃石、片岩、白色岩片 内 にぶい黄褐色 外 橙色	胴部片。
No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	
13	土製円盤	2.9	2.9	1.1	-	側面一部に摩耗痕。	角閃石、片岩、白色岩片 表 明赤褐色 裏 灰褐色	

4号竪穴住居跡 (図19・20、表7 / 写真図版4・11)

位置：調査区の南側、G5、H5グリッドに所在する。遺構南東側の大半が調査範囲外にかかる。**重複**：現代の掘削により攪拌される。**形状・規模**：平面は矩形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は残存長軸2.73m、残存短軸1.59m、深さ12～14cmを測る。**床面**：ほぼ平坦で、壁際に周溝が巡る。**柱穴**：2基の小穴(P1・2)が検出され、支柱穴に想定される。**炉**：調査範囲の制限から存否を確認できなかった。**遺物出土状況**：僅少の縄紋土器片や石器が出土した。縄紋土器は加曾利EⅡ式・EⅢ式等、石器では砥石が認められた。**所見**：時期は不明である。



3号竖穴住居跡土層説明

- 1層：褐色土。 第三層土を主体とし、第四層土が混じる。白色粒子・赤色粒子を多量含む。第三層より色調が明るく、締りがある。
- 2層：暗褐色土。 白色粒子・赤色粒子を多量含む。
- 3層：暗褐色土。 白色粒子・赤色粒子を多量含む。締りが強い。
- 4層：褐色土。 第四層土を主体とする。ローム粒子（径1～10mm）・白色粒子・赤色粒子を含む。
- 5層：明褐色土。 第四層土を主体とする。ロームブロック（25mm程）・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を含む。締りが弱い。
- 6層：明褐色土。 第四層土を主体とする。ロームブロック（30～50mm）や部分的に白色粒子を含む。
- 7層：褐色土。 1・4層に似る。白色粒子を多量含む。締りが強い。
- 8層：明褐色土。 第四層土を主体とする。焼土粒子・白色粒子を部分的に含む。締りが弱い。

図 17 3号竖穴住居跡

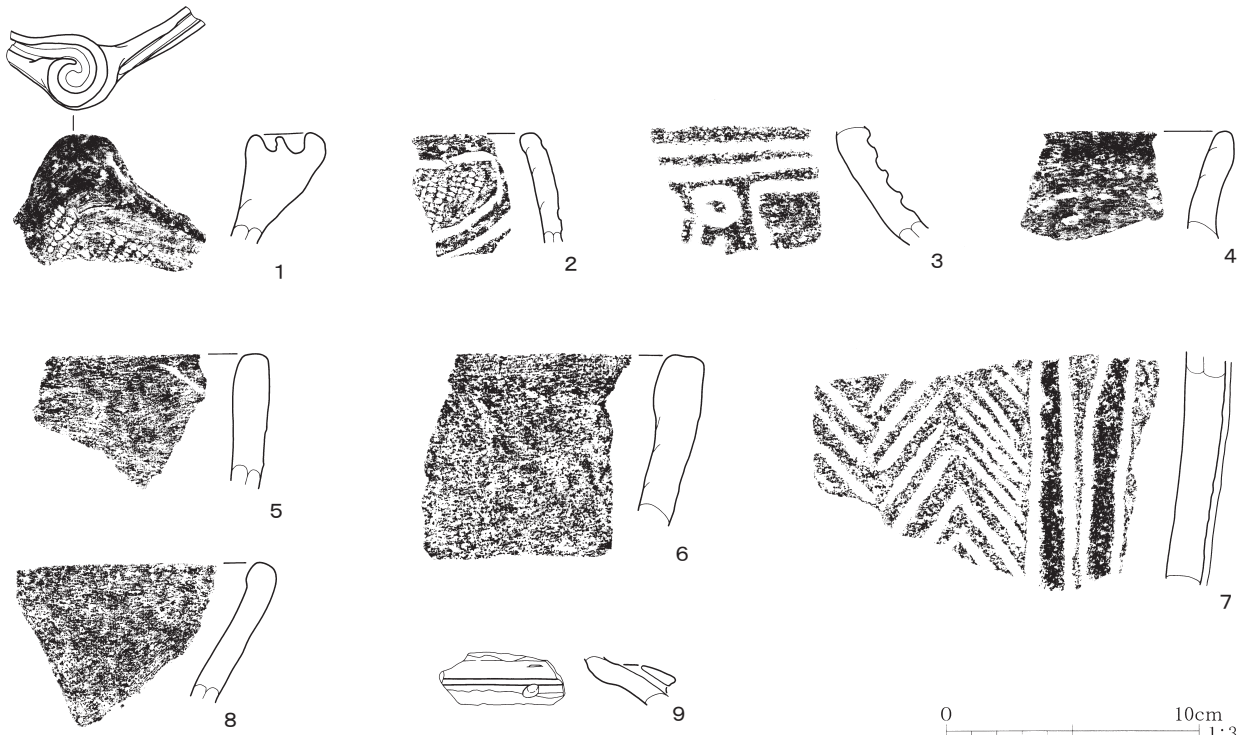


図 18 3号竖穴住居跡出土遺物

表6 3号竪穴住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.3]	口唇部に突起を配す。突起内面には突起間を連結する渦巻文を施文。口縁部に単節RLの縄紋を縦位施紋。	角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.3]	口縁部に沈線による楕円区画。区画内に単節LRの縄紋を横位充填施紋。	角閃石、片岩、砂粒 内 灰黄褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.6]	頸部に2条の横位沈線区画。胴部上半に円文と沈線区画。	片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 明黄褐色	胴部片。
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.2]	無文。横位ミガキ調整。	石英、角閃石、白色岩片 内 灰黄褐色 外 橙色	口縁部片。
5	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.3]	無文。横位ミガキ調整。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
6	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.7]	無文。口唇部内面肥厚。横位ナデ調整。	角閃石、片岩、白色岩片 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
7	深鉢	口径— 底径— 器高 [9.2]	隆帯による懸垂文。懸垂文内は磨消。懸垂文間には綾杉文を施文する。	片岩、角閃石、黒色岩片、砂粒 内 橙色 外 にぶい黄橙色	胴部片。
8	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.4]	無文。横位ナデ調整。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 黄灰色 外 橙色	口縁部片。
9	瓢形注口	口径— 底径— 器高 [2.1]	頸部に鏝部を廻らせる。そこに有孔を斜位に施文。	角閃石、片岩、白色岩片 内 橙色 外 橙色	胴部片。

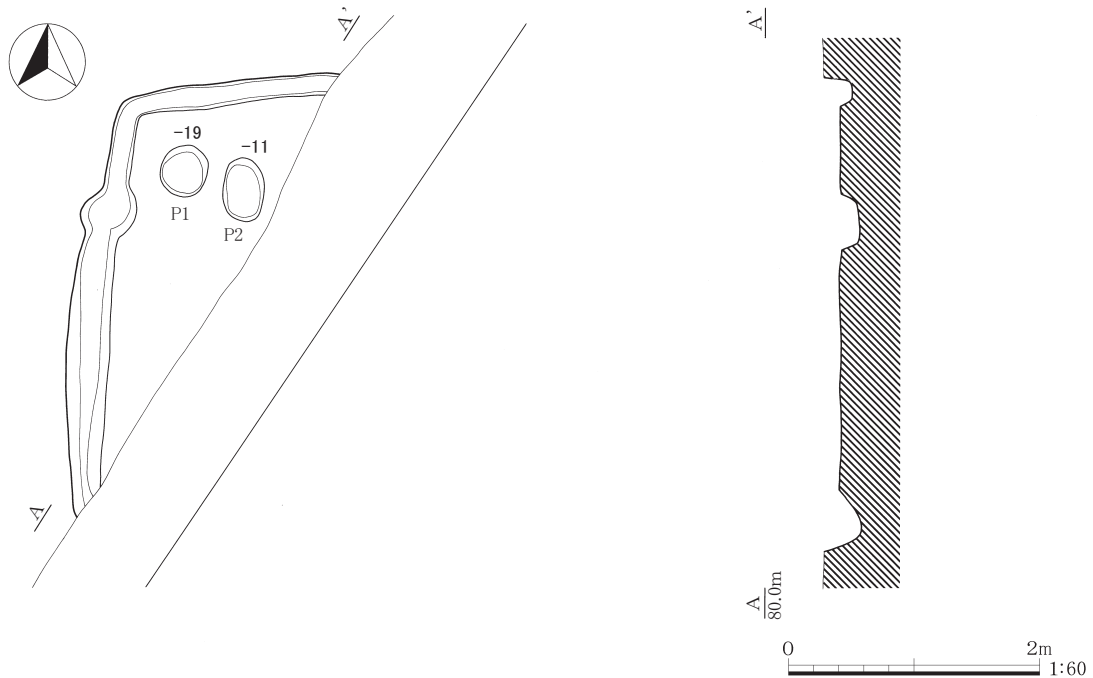


図19 4号竪穴住居跡

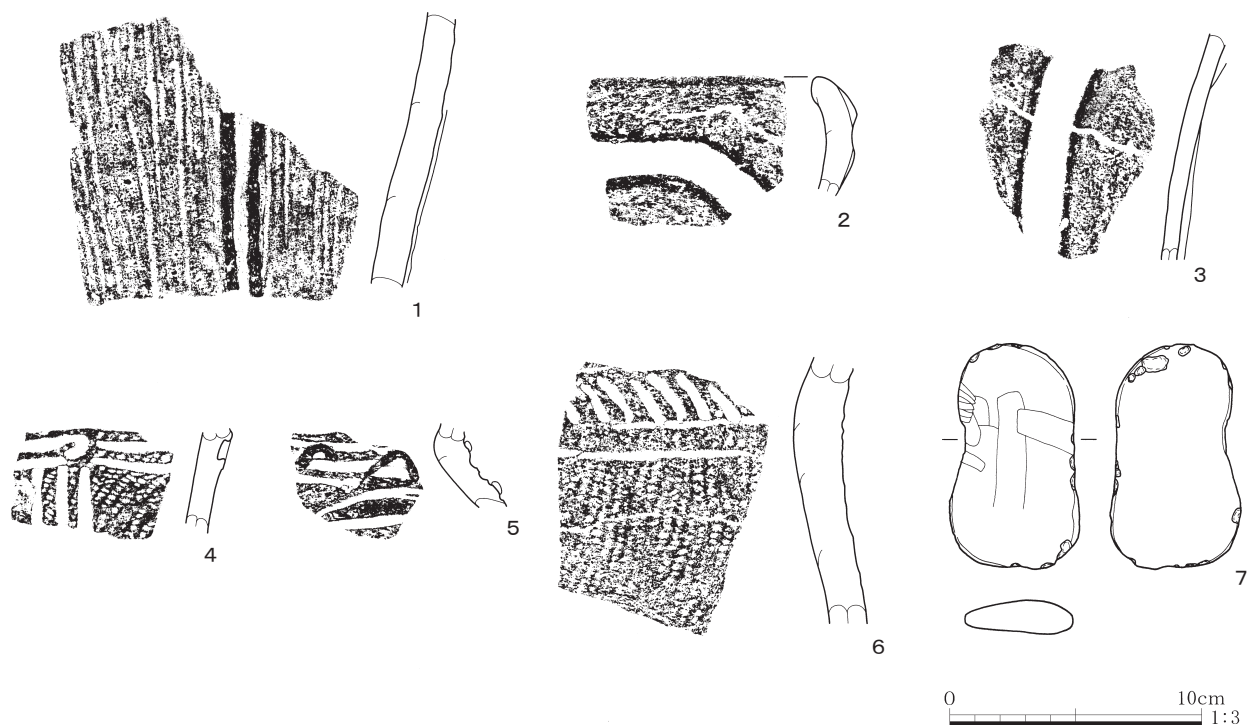


図 20 4号竪穴住居跡出土遺物

表 7 4号竪穴住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考		
1	深鉢	口径— 底径— 器高 [10.8]	条線文を地文とし、隆帯による懸垂文を施文。	石英、角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。		
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.8]	間隔の広い微隆起線文を施す。	石英、角閃石、黒色岩片、砂粒 内 浅黄橙色 外 橙色	口縁部片。 3と同一カ。		
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.8]	間隔の広い微隆起線文を施す。区画内に単節RLの縄紋を縦位施紋。	角閃石、片岩、赤色・黒色岩片、砂粒 内 浅黄橙色 外 浅黄橙色	胴部片。 2と同一カ。		
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.2]	単節LRの縄紋を横位施紋し地紋とする。頸部に3条の横位沈線区画。胴部に3条1帯の懸垂文を施す。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。		
5	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.3]	頸部から胴部にかけて横位沈線文。頸部に隆線による蛇行隆線文を貼付。	角閃石、片岩、砂粒 内 灰褐色 外 にぶい赤褐色	胴部片。		
6	深鉢	口径— 底径— 器高 [10.4]	単節RLの縄紋を斜位施紋し地紋とする。頸部に横位沈線を多条に廻らせ、その間に斜位の短沈線を充填する。	角閃石、片岩、黒色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。		
No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	製作技法・特徴
7	砥石	砂岩	8.80	5.15	1.35	72.2	表・裏面は顕著な摩耗により平滑。周縁の一部に敲打痕。

(2) 竪穴状遺構 (SI)

1号竪穴状遺構 (図 21・22、表 8 / 写真図版 11)

位置: 調査区の南側、E 8・9、F 8・9 グリッドに所在する。重複: 現代の掘削により大半が攪拌される。

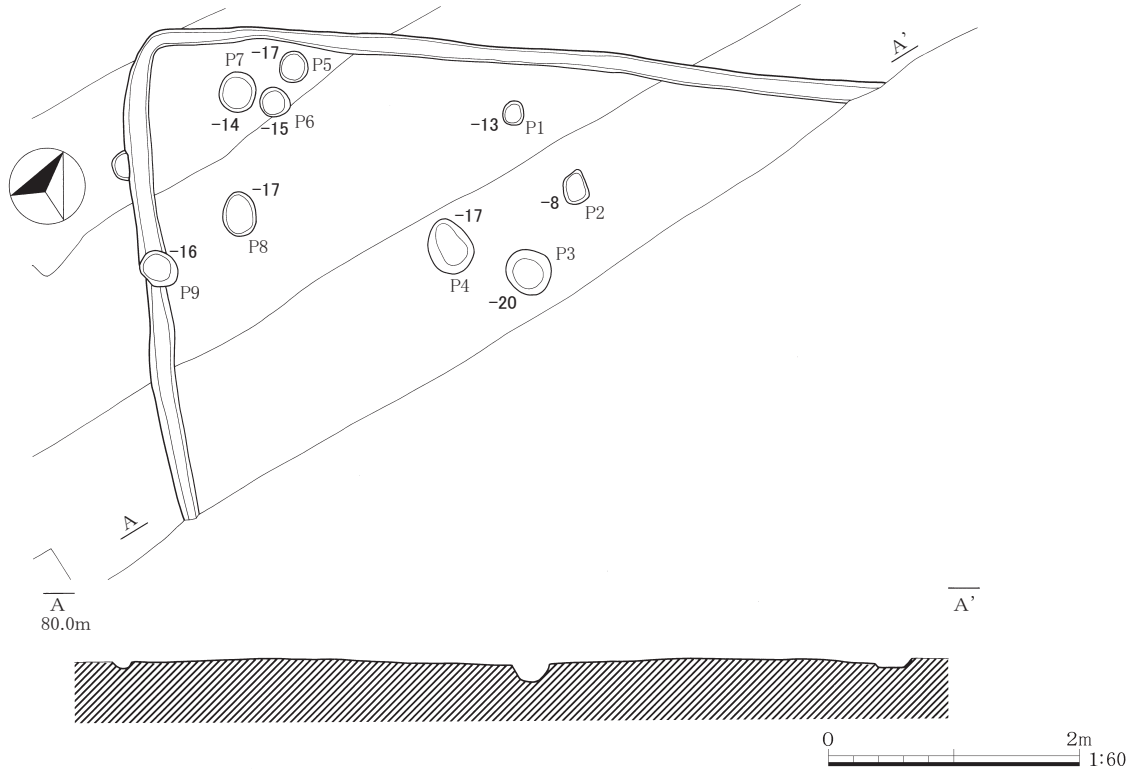


図 21 1号竖穴状遺構

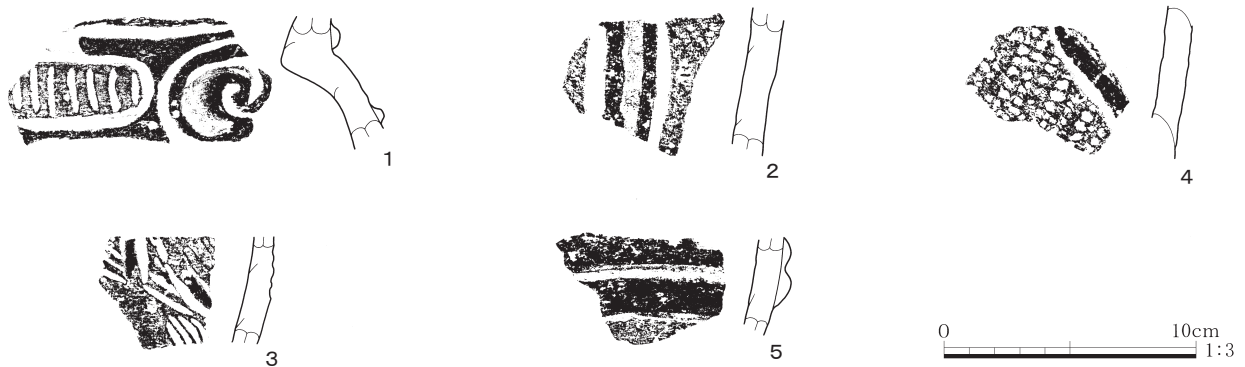


図 22 1号竖穴状遺構出土遺物

表 8 1号竖穴状遺構出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.1]	隆帯による渦巻文と楕円区画。楕円区画内に縦位の短沈線を充填。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	単節LRの縄紋を縦位施紋したのち、隆帯による渦巻文を配す。	角閃石、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.2]	隆帯貼り付けたのち、短沈線を充填施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 浅黄橙色 外 にぶい黄橙色	胴部片。
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.0]	隆帯貼り付けたのち、単節RLの縄紋を縦位施紋。	片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 灰黄褐色	胴部片。
5	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.9]	胴部に隆帯を貼付。	角閃石、砂粒 内 橙色 外 にぶい赤褐色	胴部片。

形状・規模：周溝のみ検出されており、壁は残存しない。平面は矩形を呈する。規模は残存長軸 6.00 m、残存短軸 3.87 m を測る。**床面**：北・西壁に周溝が巡る。**柱穴**：多数の浅い小穴（P 1～9）が点在するものの、本遺構に伴うものか不明である。**遺物出土状況**：僅少の縄紋土器片が出土した。加曾利 E I 式が認められる。**所見**：時期は不明である。

2号竖穴状遺構（旧6号住居跡）（図23・24、表9/写真図版5・11）

位置：調査区の南側、D 3・4、E 3 グリッドに所在する。遺構南西側の大半が調査範囲外にかかる。**重複**：現代の掘削により攪拌される。また、4号土坑やピット（4層）と重複する。**形状・規模**：平面は矩形を呈し、壁は傾斜して立ち上がる。規模は残存長軸 2.88 m、残存短軸 2.13 m、深さ 19～42cm を測る。**床面**：やや平坦で、断面の観察から部分的な周溝の存在が読み取れる。**柱穴**：2基の小穴（P 1・2）を検出した。**遺物出土状況**：僅少の縄紋土器片が出土した。加曾利 E I 式・E III 式が認められる。**所見**：時期は不明である。

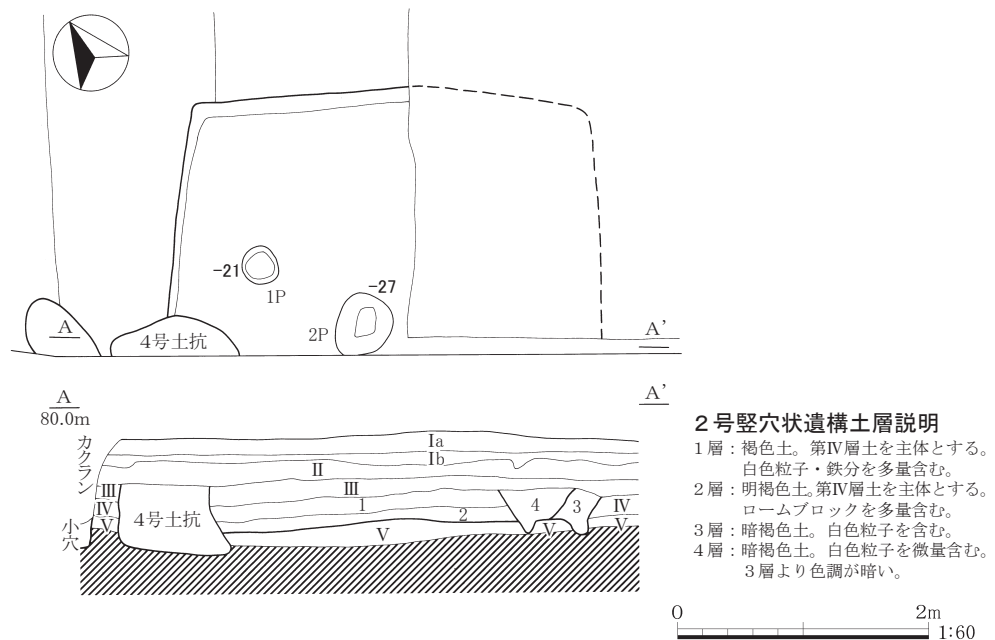


図 23 2号竖穴状遺構

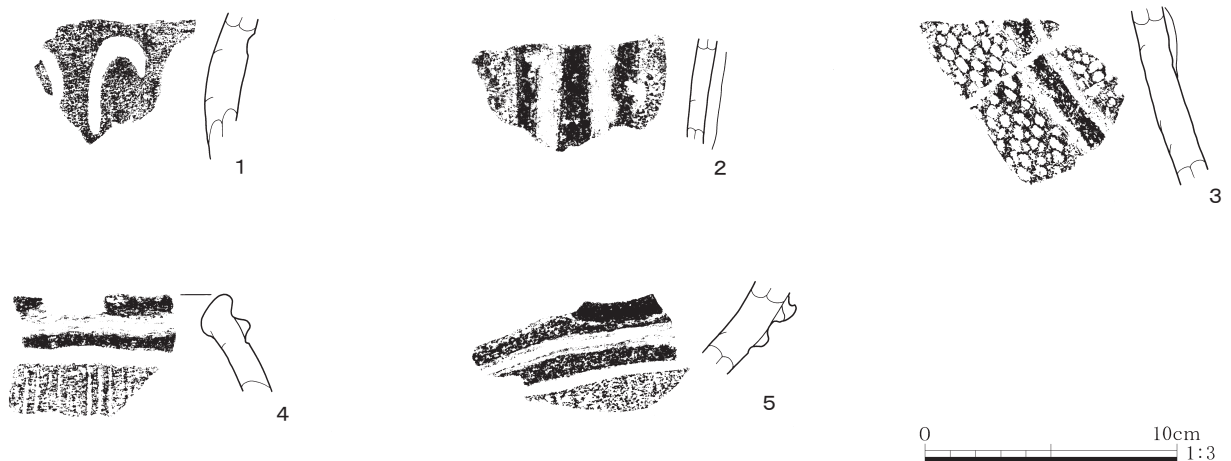


図 24 2号竖穴状遺構出土遺物

表9 2号竖穴状遺構出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	胴部に沈線区画と蕨手文を施文。	角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 明黄褐色 外 明黄褐色	胴部片。
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.1]	3条の微隆起線文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 明黄褐色 外 明黄褐色	胴部片。
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.0]	隆帯による懸垂文。懸垂文間に単節RLの縄紋を充填施文。	石英、角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 にぶい黄橙色 外 にぶい黄橙色	胴部片。
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.8]	口唇部に2条の隆帯が廻る。隆帯下に横位沈線が1条廻る。胴部に条線文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
5	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.6]	胴部に横位隆帯区画と隆帯による渦巻文。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。

(3) 単独埋設土器 (S J)

1号埋設土器 (旧3号埋甕) (図25・26、表10/写真図版5・12)

位置：調査区の南側、C5、D5グリッドに所在する。形状・規模：埋設土器は口縁部上端がほぼ残存する深鉢形土器で、逆位に埋設している。原位置における最大径28.5cm、深さ8cmを測る。掘り方は確認できなかった。遺物出土状況：埋設土器は加曾利EⅢ式である。また、埋設土器上端の周囲に少量の縄紋土器片や礫が散在する。所見：縄紋中期後葉加曾利EⅢ式期の埋設土器に比定される。

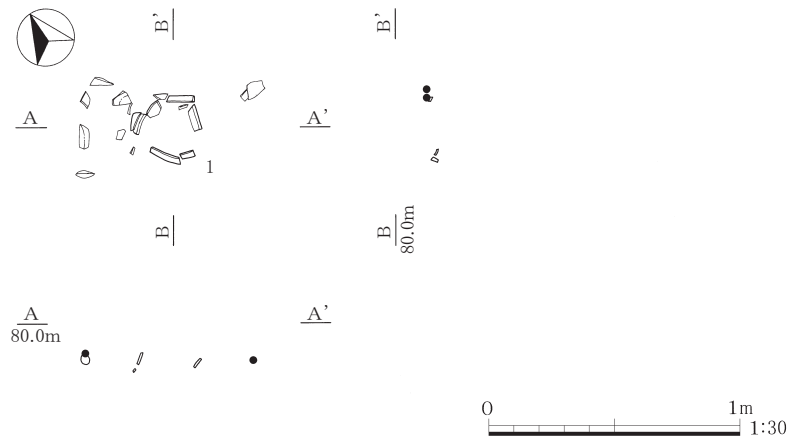


図25 1号埋設土器

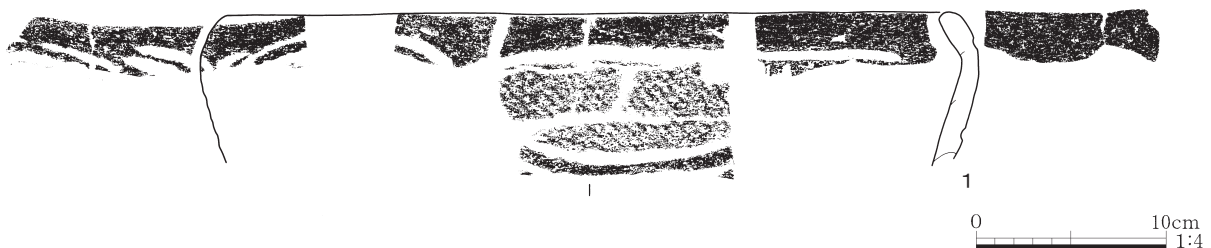


図26 1号埋設土器出土遺物

表 10 1号埋設土器出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径 (38.0) 底径— 器高 [8.1]	口縁部に沈線による楕円区画。区画内に単節RLの縄紋を横位充填施紋。	角閃石、片岩、砂粒 内 明黄褐色 外 灰黄褐色	口縁部 1/4 残存。

2号埋設土器（旧4号埋甕）（図27・28、表11/写真図版5・12）

位置：調査区の南側、G5グリッドに所在する。形状・規模：埋設土器は口縁部がほぼ残存する鉢形土器で、逆位に埋設している。原位置における最大径43.5cm、深さ11cmを測る。掘り方の平面は円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。一部小穴状を呈する。掘り込みが非常に深いことから、土坑と重複している可能性もある。掘り方の規模は平面径65cm、深さ43～56cmを測る。遺物出土状況：埋設土器は加曾利EⅢ式である。また、埋設土器上端の周囲に縄紋土器片や礫が散在する。所見：縄紋中期後葉加曾利EⅢ式期の埋設土器に比定される。

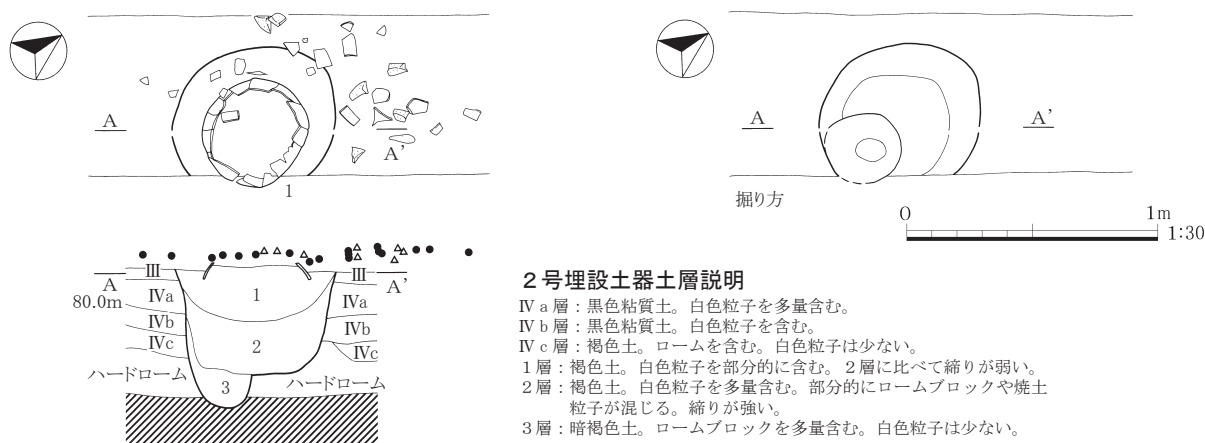


図 27 2号埋設土器



図 28 2号埋設土器出土遺物

表 11 2号埋設土器出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径 34.9 底径— 器高 [12.2]	口縁部は平坦でなく成形段階の痕跡が残る。無文で全体にナゲ調整。	石英、角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 にぶい黄橙色 外 黄灰色	口縁部完形。

(4) 土坑 (SK)

1号土坑 (図30/写真図版6)

位置：調査区の東側、H7グリッドに所在する。**形状・規模**：平面は楕円形を呈し、壁は傾斜して立ち上がる。規模は長軸125cm、短軸119cm、深さ23～34cmを測る。**遺物出土状況**：僅少の縄紋土器片が出土した。**所見**：時期は不明である。

2号土坑 (図29・30、表12/写真図版6・11)

位置：調査区の南西側、B6グリッドに所在する。**重複**：1号住居跡に攪拌される。**形状・規模**：平面は楕円形を呈すると推測され、壁は傾斜して立ち上がる。底面の一部が窪む。規模は残存長軸96cm、残存短軸24cm、深さ13～18cmを測る。**遺物出土状況**：口縁～底部が残存する1個体の縄紋土器が斜位の状態で出土した。加曾利E I式に比定される。**所見**：縄紋中期後葉加曾利E I式期の土坑で、出土遺物の比較から重複する1号堅穴住居跡より古いことが推測される。

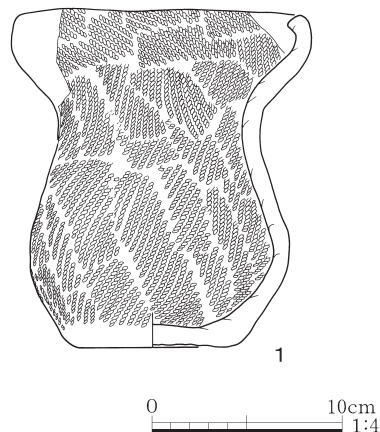


表12 2号土坑出土遺物観察表

図29 2号土坑出土遺物

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径 (15.0) 底径 8.0 器高 17.8	単節RLの縄紋を口縁部は横位に、胴部上半～下半にかけて縦位に施紋する。底面はミガキ調整で中央がやや上げ底になる。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	口縁一部欠損。

3号土坑 (図30/写真図版6)

位置：調査区の東側、D3・4グリッドに所在する。遺構南西側が調査範囲外にかかる。**重複**：3号住居跡と重複し、本土坑が新しい。**形状・規模**：不整な円形ないし楕円形を呈すと推測される。傾斜する底面から壁が垂直に立ち上がり、東壁下位を水平方向に掘削する。規模は残存長軸102cm、残存短軸32cm、深さ50～55cmを測る。**遺物出土状況**：出土しなかった。**所見**：時期は不明である。

4号土坑 (図30)

位置：調査区の東側、G6・7グリッドに所在する。**重複**：現代の掘削により攪拌される。**形状・規模**：矩形を呈し、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がる。規模は残存長軸176cm、残存短軸65cm、深さ17～20cmを測る。**遺物出土状況**：出土しなかった。**所見**：時期は不明である。

(5) 遺物集中部 (SU)

1号遺物集中部 (図31・32、表13/写真図版7・11)

位置：調査区の南西側、C5・E5グリッドに所在する。**形状・規模**：遺存状況の良好な縄紋土器が集中する。遺構に伴うことが予想されるものの、掘り込みを確認することはできなかった。分布範囲は南

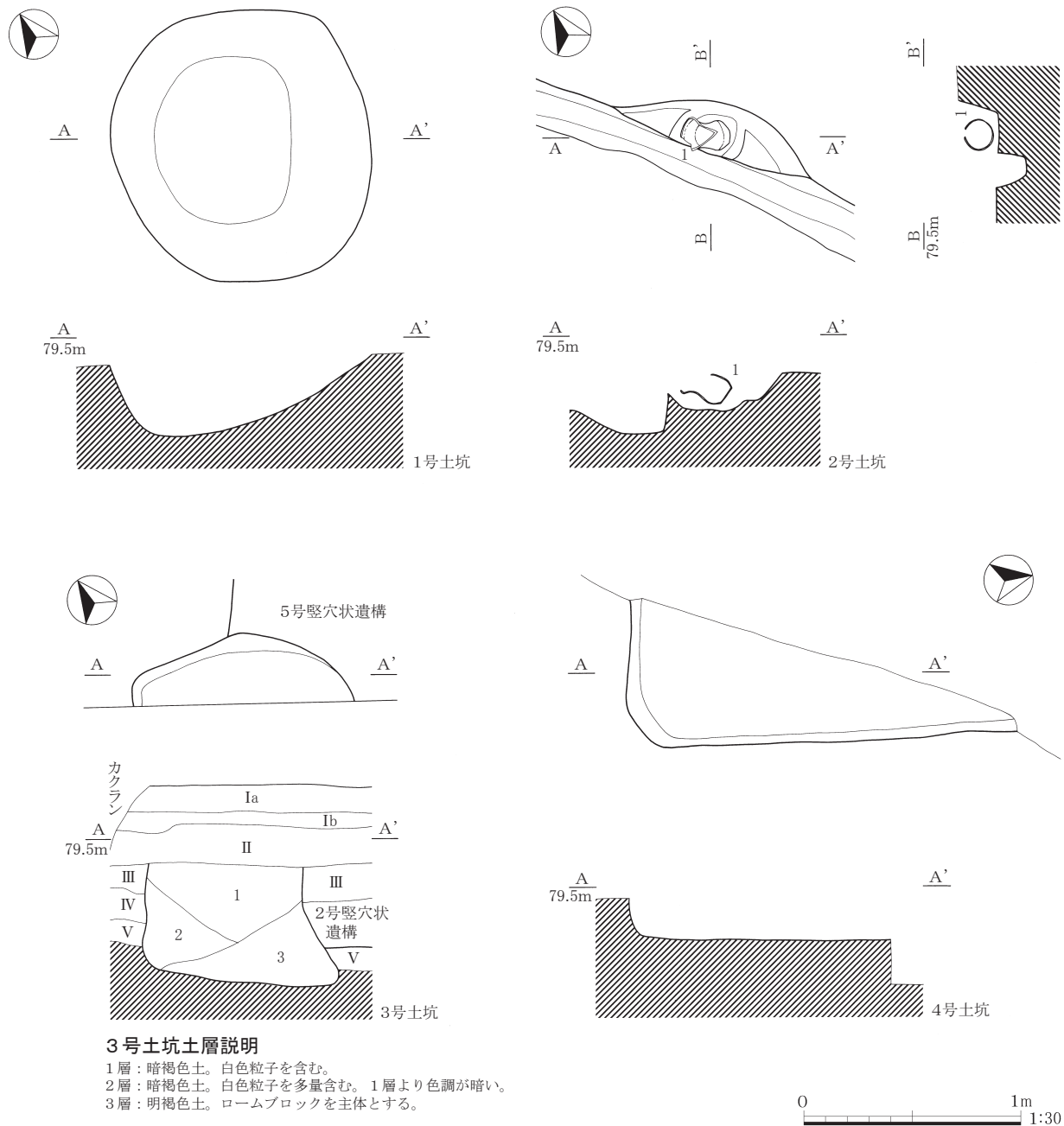


図30 1号～4号土坑

北 57cm、東西 60cm、高低差 18cm を測る。遺物出土状況：口縁から胴部上半の 1/3 が残存する縄紋土器の大形破片が礫の上面を覆う。縄紋土器は唐草文系土器である。所見：縄紋中期後葉加曾利 E II 乃至 III 式期の痕跡に比定される。

2号遺物集中部（図31・32、表14/写真図版7・11）

位置：調査区の南西側、C5グリッドに所在する。形状・規模：遺存状況の良好な縄紋土器が集中する。遺構に伴うことが予想されるものの、掘り込みを確認することはできなかった。分布範囲は南北 47cm、東西 38cm、高低差 21cm を測る。遺物出土状況：口縁から胴部が残存する2個体の縄紋土器が横位に潰れている。周囲の破片が傾斜しており、土坑状の掘り込みに収まっている状態が想起される。縄紋土器は加曾利 E III 式である。所見：縄紋中期後葉加曾利 E III 式期の痕跡に比定される。

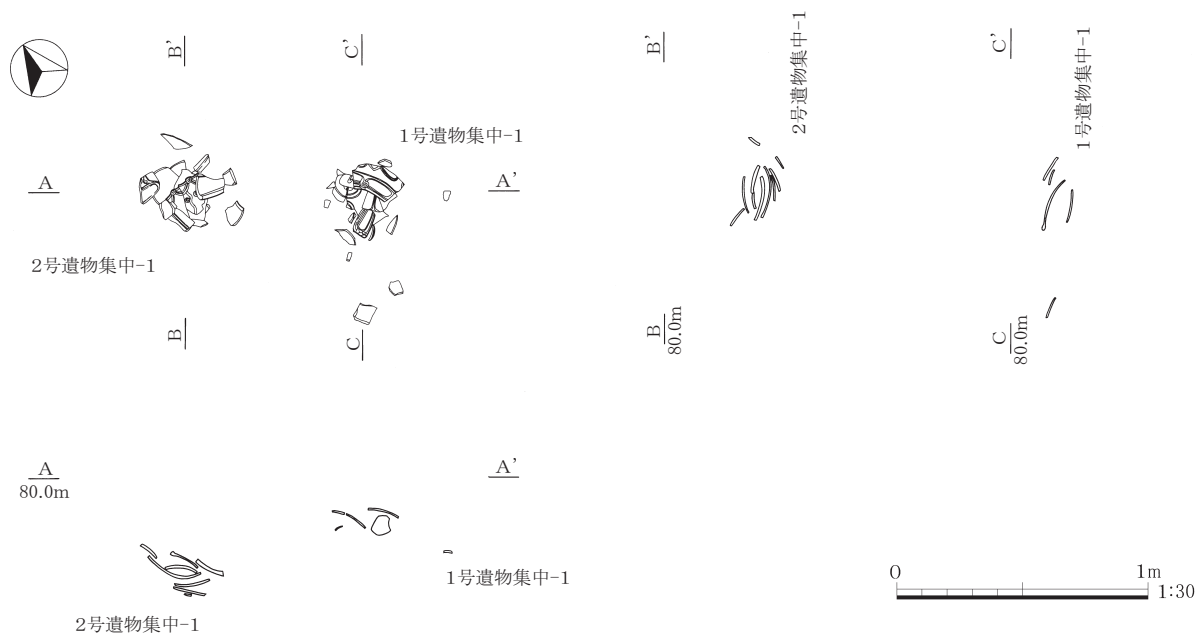


图 31 1号·2号遺物集中部

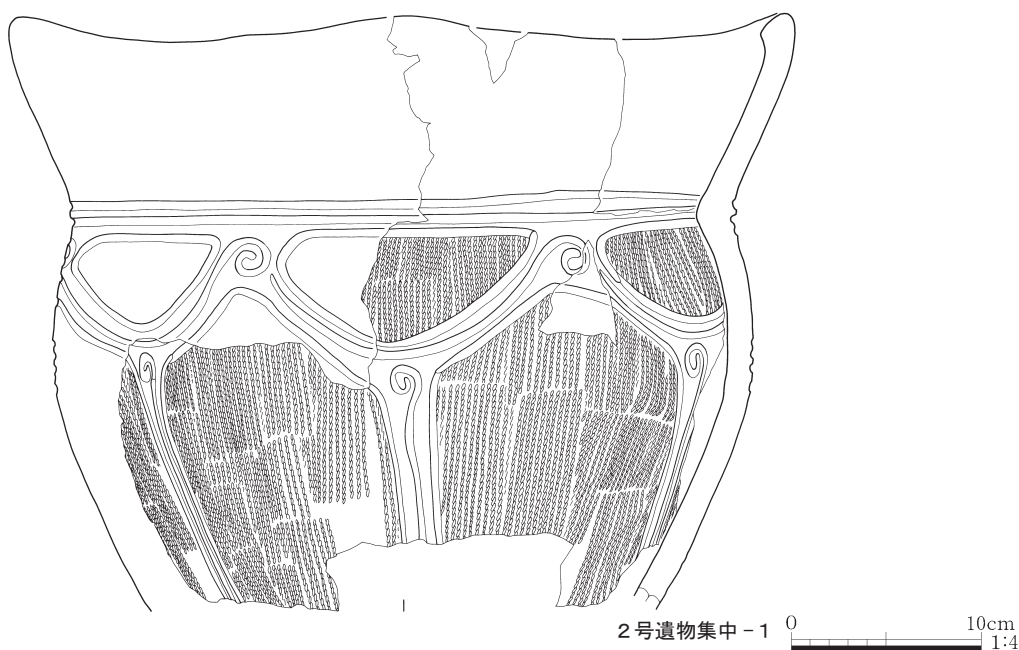
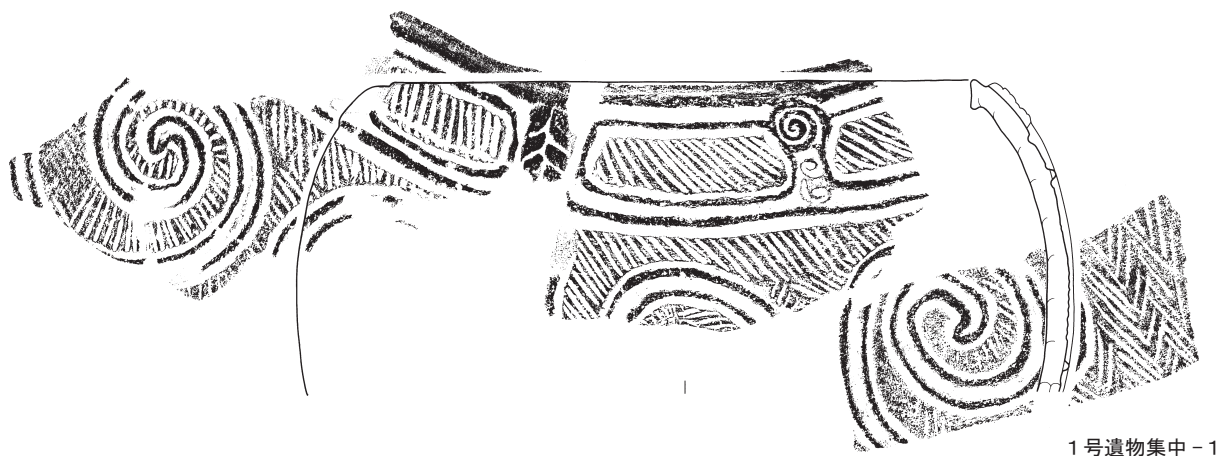


图 32 1号·2号遺物集中部出土遺物

表 13 1号遺物集中部出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢 (樽形)	口径(30.6) 底径— 器高[16.5]	口縁部隆帯による楕円区画。区画間に隆帯による渦巻文や貼付文を貼付。区画内に短沈線を縦位または斜位に充填施文。胴部に隆帯による唐草文を配し、区画内に一方向の短沈線とハの字状文を充填施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	口縁部～胴部上半、1/3 残存。

表 14 2号遺物集中部出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径(40.4) 底径— 器高[31.4]	4単位の小波状口縁。頸部に2条の横位沈線区画。胴部に無節Lの擦糸紋を縦位施紋し地紋とする。胴部上半に渦巻文を連結した連弧文。胴部下半に蕨手文を配す。懸垂文間は磨消。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 にぶい黄橙色	口縁部～胴部下半、2/3 残存。

(6) ピット (P)

1号小穴 (図 33・34、表 15・16/ 写真図版 7・11)

位置：調査区の西側、C 8 グリッドに所在する。形状・規模：平面は円形を呈し、平坦な底面から壁が傾斜して立ち上がる。規模は径 27cm、深さ 5 cm を測る。遺物出土状況：黒曜石を素材とする石鏃 2 点、細かい剥片・碎片 358 点が出土した。石鏃はいずれも折損しており、定型的な基部形成には及ばないなど製作途中で廃棄された様相が見受けられる。剥片・碎片は長さ 2.0～22.5mm (平均 7.9 mm)、重さ 0.01～1.12 g (平均 0.05 g) の細片で、石鏃製作に伴う破片に相当しよう。所見：縄紋中期の石器製作に関する痕跡に想定される。

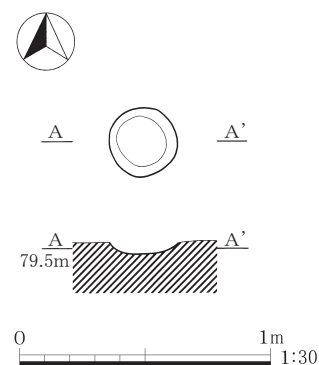


図 33 1号小穴

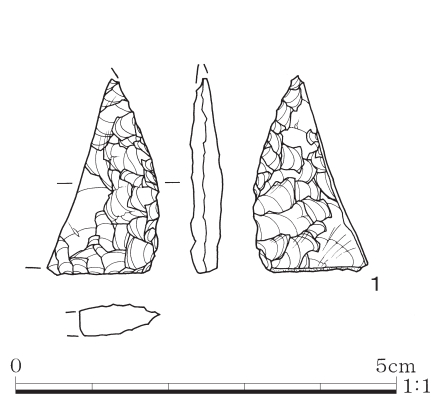


図 34 1号小穴出土遺物

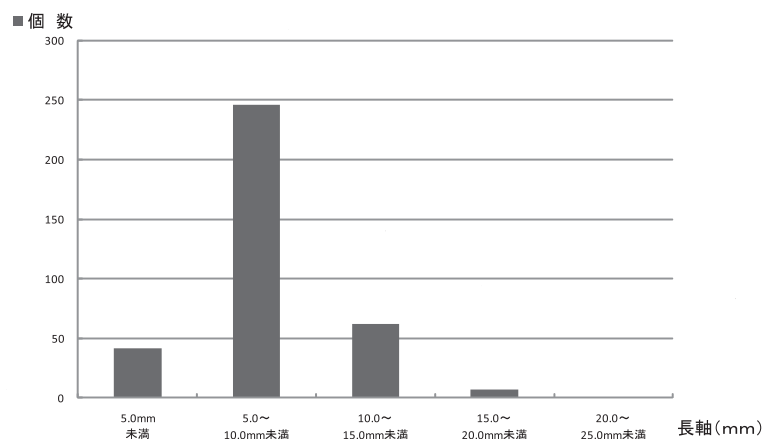


表 15 1号小穴出土剥片計測表

表 16 1号小穴出土遺物観察表

No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	製作技法・特徴
1	打製石鏃	黒曜石	[2.58]	[1.50]	[0.45]	1.2	右半部欠損。風化面(節理)を打面とする小型剥片を素材とする。縁辺を押圧剥離による両面調整。平基無茎の欠損品あるいは凹基無茎の未製品カ。

4 遺構外出土遺物（図 35～41、表 17～21/ 写真図版 12～15）

遺構外からは縄紋時代の遺物と古代の遺物が出土している。これらの出土遺物は表土直下から調査区内に満遍なく、ほぼ同じ標高で出土している。また、特に遺物が集中する部分が数ヵ所見受けられるため、こうした部分には遺構の存在を窺わせる。

縄紋時代の遺物は縄紋土器と石器である。縄紋土器は縄紋時代中期中葉から後半、後期中葉、晩期前葉に分類されるが、その主体を占めるのは遺構出土遺物と同様に中期後葉である。器種は深鉢を中心に、鉢、有孔鏝付土器が出土している。1～25は中期中葉期の土器群である。阿玉台式（1～5）がみられるが、勝坂式が主体である。後半期（26～75）では加曾利E I 式期の土器群の出土量が最も多く、加曾利E III 式期の土器群がそれに次ぐ。加曾利E III 式期では連弧文系や唐草文系土器群がみられるものの、それらが全体の占める割合は低い。曾利式もみられるがその量はさらに少ない。

76・77は縄紋時代後期中葉加曾利B式期、78は晩期前葉安行III d 式期である。後期中葉期の土器群は本遺跡北側に位置する将監塚遺跡において遺構外から、晩期前葉期の土器群は本遺跡北東に位置する藤塚遺跡において竪穴住居跡と遺構外からそれぞれ検出されている。本調査出土をあわせた周辺域が活動領域であったことが窺える資料である。

石器は打製石斧や敲石の出土割合が高い。そのほかスクレイパー、磨製石斧、磨製石器、磨石、凹石、台石、多孔石、剥片が出土しているが石鏃は認められない。また、緑色岩質や片岩質の棒状の自然礫が調査区内から大量に出土している。

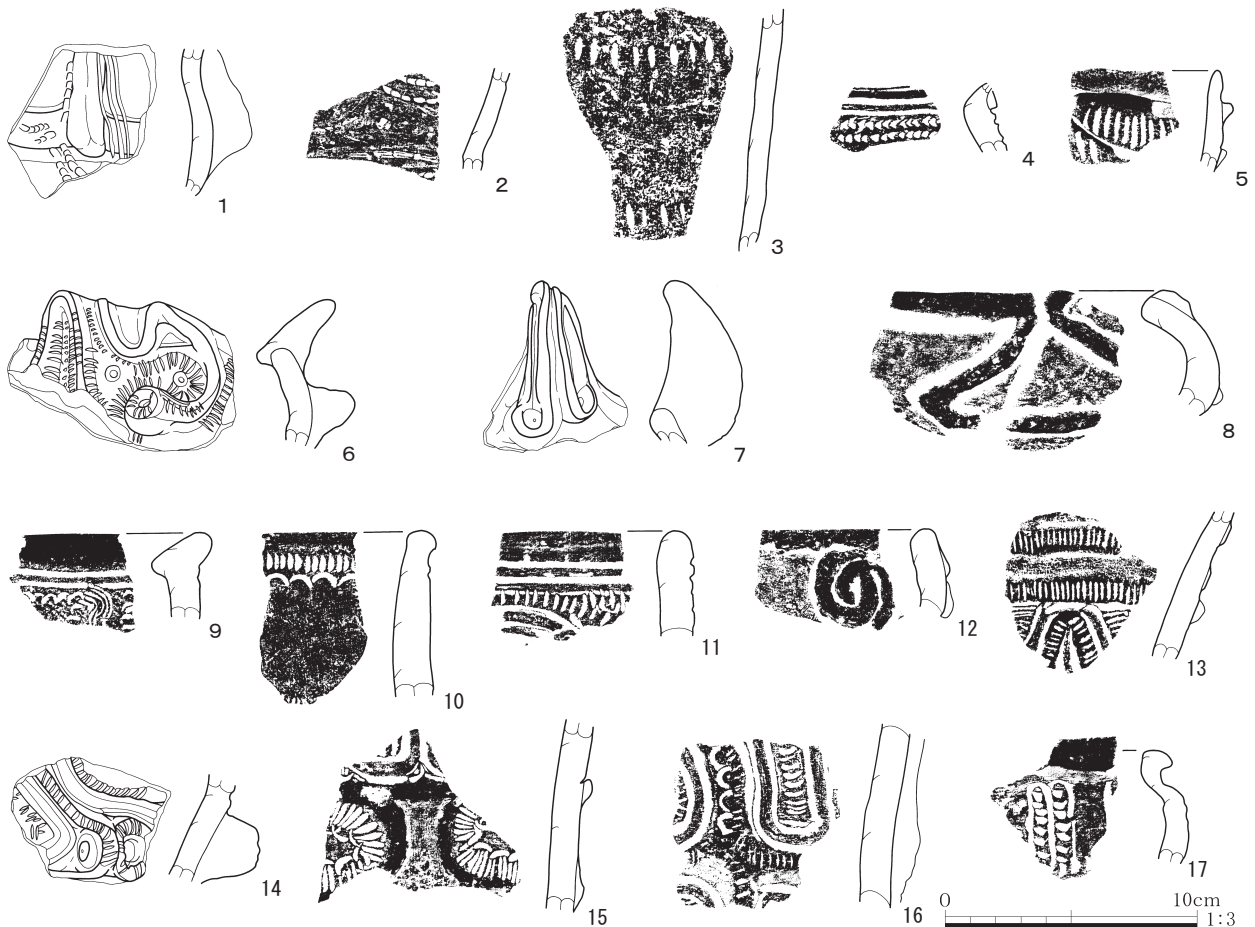
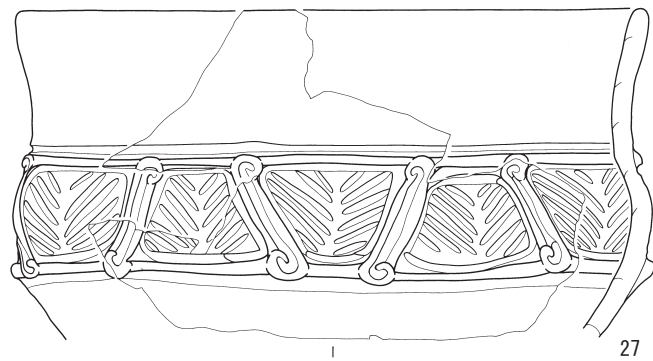
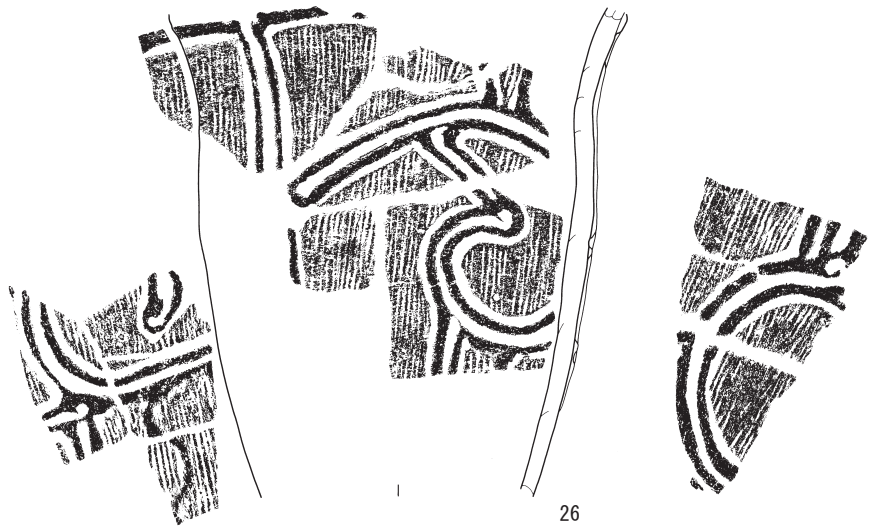
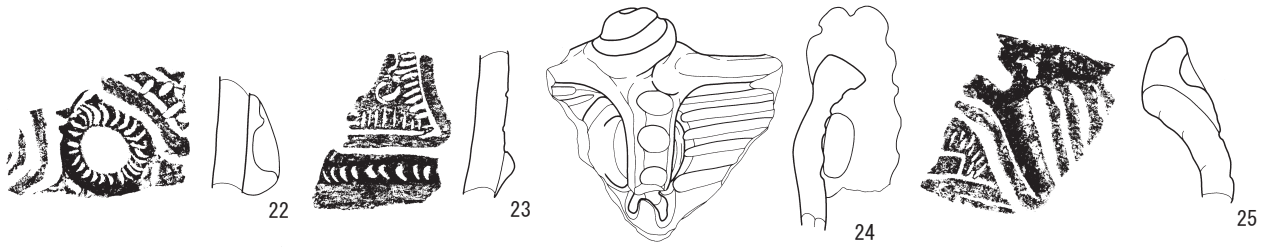
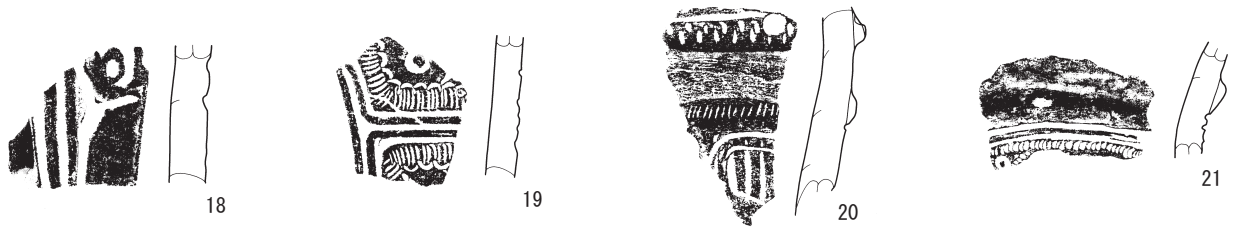


図 35 遺構外出土遺物（1）



0 (26·27) 10cm
1:4

0 10cm
1:3

图 36 遺構外出土遺物 (2)



图 37 遺構外出土遺物 (3)



图 38 遺構外出土遺物 (4)

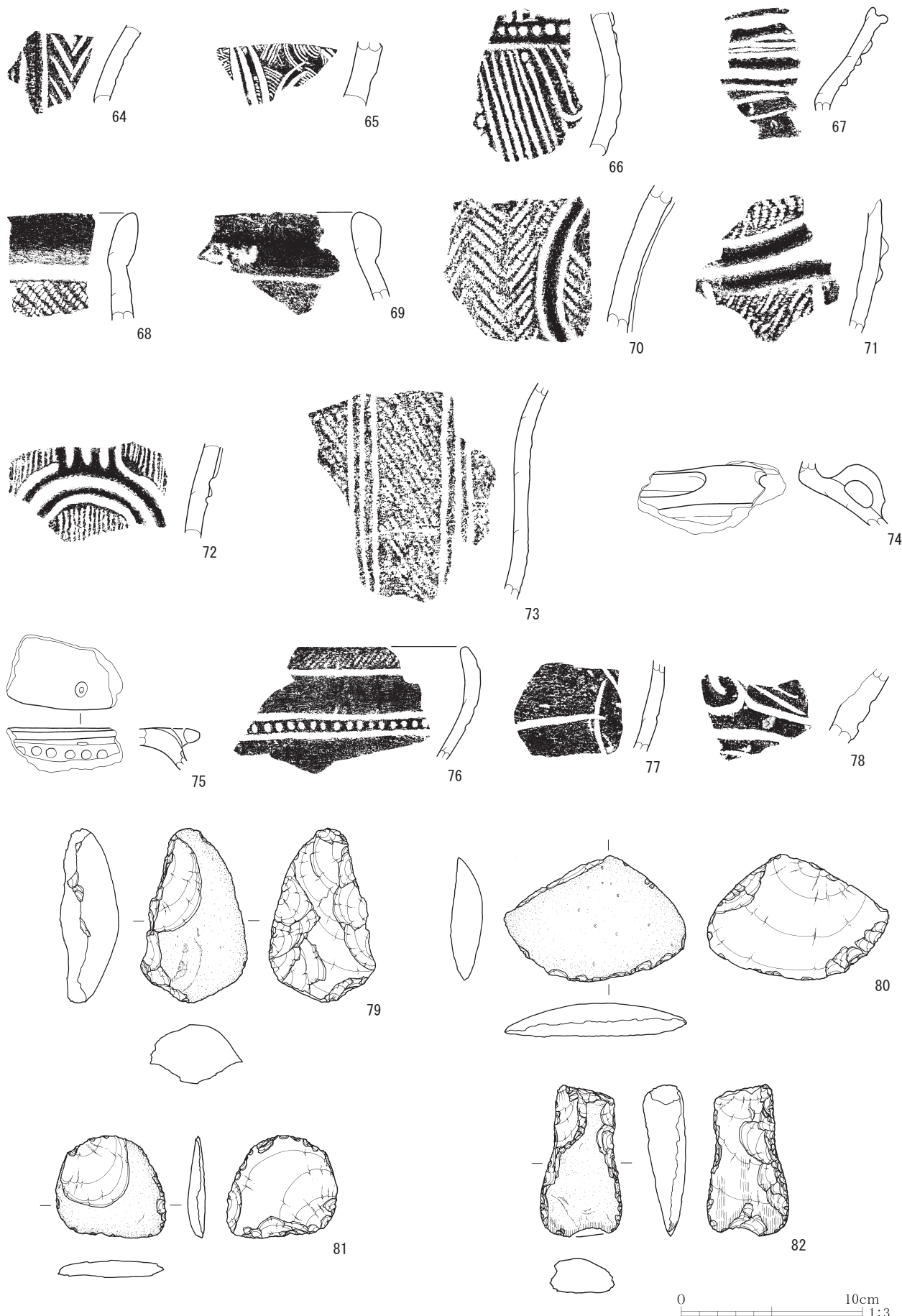


图 39 遺構外出土遺物 (5)

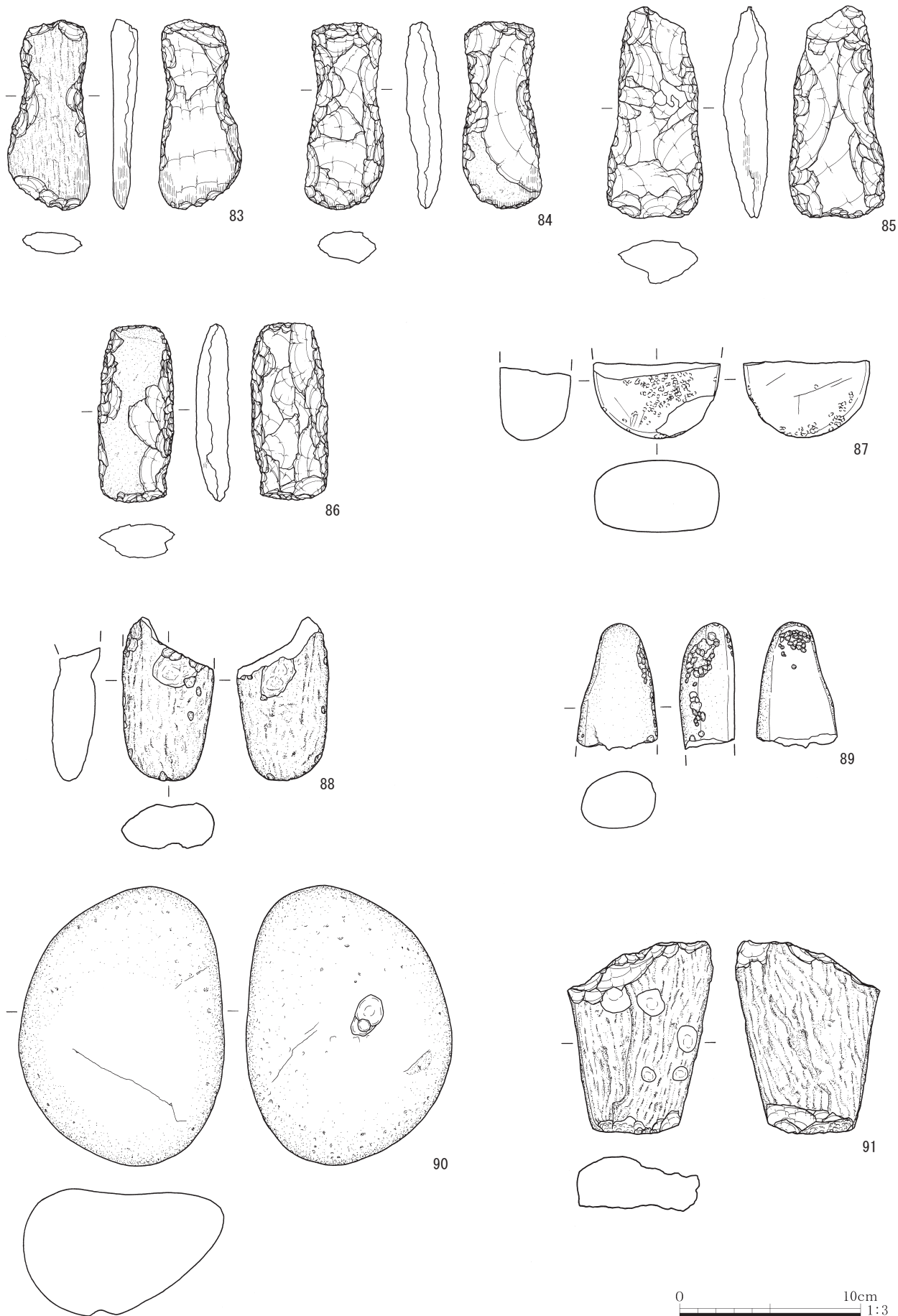


图 40 遺構外出土遺物 (6)

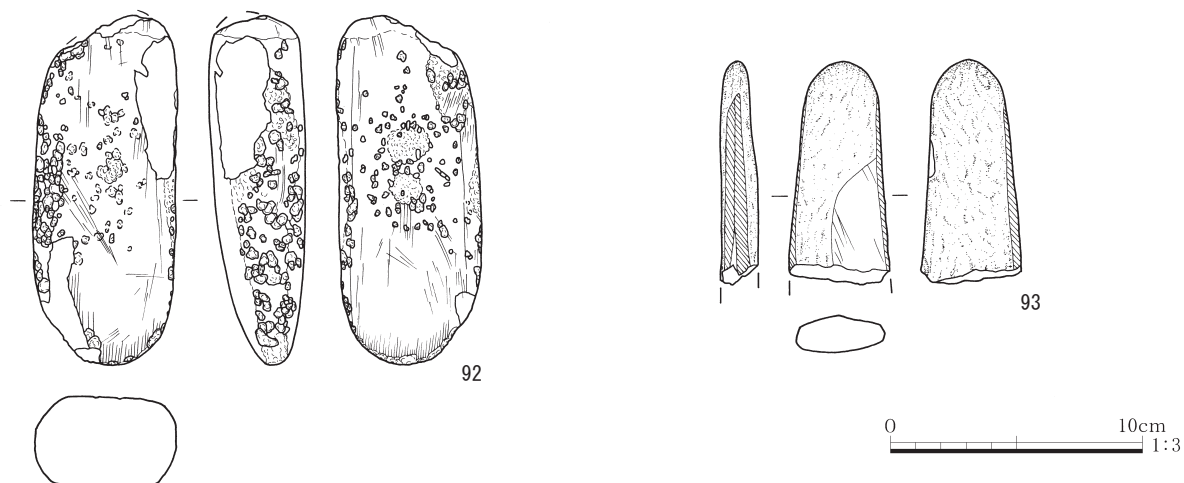


図 41 遺構外出土遺物（7）

表 17 遺構外出土遺物観察表（1）

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
1	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.7]	突起を貼付後、3条の垂下沈線と角押文を施文。	雲母、砂粒 内 橙色 外 にぶい橙色	口縁部片。
2	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.0]	口縁部に角押文。頸部に横位角押文。	雲母、砂粒 内 にぶい褐色 外 にぶい黄褐色	胴部片。
3	深鉢	口径— 底径— 器高 [9.5]	横位の連続爪形文が2段みられる。	雲母、砂粒 内 灰黄褐色 外 にぶい褐色	胴部片。
4	深鉢	口径— 底径— 器高 [2.8]	頸部に横位沈線区画。胴部上半に連続角押文が2段みられる。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 明赤褐色	胴部片。
5	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.0]	口縁部に隆帯区画。区画内に短沈線を縦位充填施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
6	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	口縁部に大形の突起を貼付。突起周辺に連続爪形文と円孔文を施文。	石英、角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 明黄褐色 外 明黄褐色	口縁部片。
7	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.6]	大型突起部。	角閃石、白色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	口縁部片。
8	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.9]	口唇部に隆帯が廻る。口縁部に三角状の隆帯文様を貼付。	片岩、白色岩片、砂粒 内 灰褐色 外 にぶい橙色	口縁部片。
9	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.4]	口唇部に隆帯が廻る。口縁部に半截竹管状工具による横位沈線区画。区画内に単節RLの縄紋を充填施紋し、半截竹管状工具によるパネル文を施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
10	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.5]	口縁部に横位角押文と半截竹管状工具による爪形文。下端にも角押文。	片岩、白色岩片、砂粒 内 明赤褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
11	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.2]	口縁部に半截竹管状工具による横位沈線区画。区画内に半截竹管状工具による文様と爪形文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
12	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.5]	口唇部肥厚。口縁部に隆帯による渦巻文。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
13	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.7]	爪形文を施した隆帯区画が2条廻る。区画内に同様の隆帯で三角文を施文。区画内に爪形文を充填施文。	石英、角閃石、白色岩片、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 橙色	胴部片。

表 18 遺構外出土遺物観察表（2）

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
14	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.9]	連続爪形文を施した隆帯と小突起を配す。隆帯間に半截竹管状工具による沈線区画。区画内に爪形文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい橙色 外 橙色	胴部片。
15	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.5]	横位の隆帯区画。隆帯間に楕円横帯文が2段見られる。	角閃石、片岩、砂粒 内 黄灰色 外 にぶい褐色	胴部片。
16	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.2]	半截竹管状工具による爪形文を施した隆帯区画。区画内は半截竹管状工具による沈線区画とパネル文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 褐色	胴部片。
17	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.5]	口縁部肥厚。胴部には沈線区画内に連続爪形文を施した文様とその直下に横位の連続爪形文を施文。	片岩、砂粒 内 橙色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
18	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.4]	彫りの深い沈線による抽象文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 明赤褐色	胴部片。
19	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.6]	沈線区画内に連続爪形文による蓮華文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	胴部片。
20	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.2]	口縁部に交互刺突文と丸棒状工具の頭部による刺突を施した隆帯区画。胴部上半に刺突文を施した横位隆帯区画。直下に沈線による楕円文。	角閃石、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 橙色	胴部片。
21	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.5]	口縁部に横位隆帯区画。胴部に半截竹管状工具による横位沈線、連続爪形文、円管文を施文。	角閃石、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 褐色	胴部片。
22	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.7]	連続爪形文を配した小突起と抽象文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 明赤褐色	胴部片。
23	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	連続爪形文を配した隆帯区画。区画内に爪形文による文様表出。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
24	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.7]	口唇部に渦巻状の小突起を配し、直下に橋状把手を付す。頸部に横位沈線を多段に施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	口縁部片。
25	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.6]	波状口縁。口唇部から延びる隆帯による口縁部区画。区画内に短沈線充填および平行沈線文と爪形文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
26	深鉢	口径— 底径— 器高 [25.6]	無節Lの撚糸紋を縦位施紋して地紋とする。口縁部に横位隆帯区画。胴部に隆帯による唐草文と蛇行文を施文。	角閃石、白色・赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
27	深鉢	口径 (33.5) 底径— 器高 [17.4]	口縁部は無文。頸部に横位沈線が1条廻る。胴部上半に隆帯による横位台形区画。縦位区画はS字隆帯文で配す。区画内に短沈線による綾杉文を充填。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部～胴部上半 1/4 残存。
28	深鉢	口径— 底径— 器高 [23.5]	口縁部は無文。頸部に横位隆帯を廻らせ、胴部に隆帯による渦巻文と懸垂文を施文。胴部上半の区画内には刺突文を充填施文。	角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部～胴部下半 1/5 残存。
29	深鉢	口径— 底径— 器高 [18.0]	頸部に横位隆帯を廻らせ、隆帯状に矢羽根状列点を施文。胴部には隆帯による唐草文を施文。区画内に単節RLの縄紋を充填施紋。	角閃石、片岩、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	頸部～胴部片。
30	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	無節Rの撚糸紋を縦位施紋して地紋とする。胴部に隆帯による渦巻文を施文。	石英、角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
31	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.6]	口唇部に隆帯が廻る。口縁部に隆帯による渦巻文。	石英、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
32	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.1]	無節Rの撚糸文を縦位施紋し地紋とする。口唇部に隆帯による区画。口縁部に隆帯による横位渦巻文区画。	片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	口縁部片。

表 19 遺構外出土遺物観察表 (3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
33	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.5]	口縁部に単節RLの縄紋を横位施紋し、横位沈線区画。その後、隆帯を貼付。	角閃石、片岩、白色・赤色岩片、砂粒 内 にぶい褐色 外 橙色	口縁部片。
34	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.5]	口縁部に隆帯による渦巻文区画。区画内に斜位の短沈線を充填施文。	石英、角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい褐色 外 橙色	口縁部片。
35	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.7]	口縁部に隆帯による渦巻文区画。区画内に縦位の短沈線を充填施文。	石英、角閃石、白色岩片、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
36	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.3]	口唇部に隆帯を廻らせ区画とする。口縁部に隆帯による渦巻文区画。区画内に単節RLの縄紋を横位充填施紋。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	口縁部片。
37	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.9]	口唇部に2条の沈線が廻る。口縁部に渦巻文を施文。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
38	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.3]	口縁部に隆帯区画。杵状文区画内に縦位の短沈線を充填施文。	石英、角閃石、白色岩片、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
39	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.1]	口縁部に隆帯区画。楕円文区画内に矢羽状沈線文を施文。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	口縁部片。
40	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.1]	口唇部に隆帯が廻る。口縁部に無節Lの撚糸紋を横位施紋したのち、隆帯による渦巻文を施文。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
41	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	小波状口縁。波頂部下に楕円文区画。区画内に丸棒状工具の頭部による刺突文を充填施文。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい褐色 外 褐色	口縁部片。
42	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.8]	小波状口縁。口縁部に隆帯区画。区画内に縦位の短沈線を充填施文。	石英、角閃石、片岩、白色岩片 内 褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
43	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.7]	口縁部に単節LRの縄紋を横位施紋したのち隆帯による渦巻文区画。	石英、片岩、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	口縁部片。
44	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.7]	口縁部に突起貼付。単節LRの縄紋を縦位施紋し地紋とする。突起部と口縁部に渦巻文を施文。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 褐色 外 にぶい褐色	口縁部片。
45	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.7]	口縁部に隆帯区画。区画下に押捺刺突を施した懸垂隆帯。胴部には楕円文を施文。	石英、角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 褐色	胴部片。
46	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.6]	口唇部肥厚。口縁部に条線文を施文して地文としたのち連弧文を施文。	片岩、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
47	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.0]	口唇部に2条の横位沈線区画。口縁部に単節LRの縄紋を横位施紋して地紋としたのち沈線文様を施文。	片岩、砂粒 内 にぶい褐色 外 褐色	口縁部片。
48	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.9]	口縁部に2条の沈線区画。無節Lの撚糸紋を地紋としたのち区画下に連弧文と沈線文様を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	口縁部片。
49	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.1]	口唇部に2条の横位沈線区画。口縁部に条線文を地文としたのち連弧文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	口縁部片。
50	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.5]	口縁部に3条の横位沈線を廻らせ交互刺突文を施す。無節Rの撚糸紋を縦位施紋し地紋とする。	角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 褐色 外 褐色	口縁部片。
51	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.7]	小波状口縁。単節LRの縄紋を横位施紋して地紋とする。口唇部に2条の沈線を廻らせ、口縁部に丸棒状工具の頭部による刺突文を施す。	角閃石、赤色岩片、砂粒 内 にぶい褐色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
52	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.6]	口縁部に2条の沈線を廻らせ交互刺突文を施文。沈線下に条線文を施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 灰黄褐色 外 褐色	口縁部片。

表 20 遺構外出土遺物観察表(4)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	胎土・色調	備考
53	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.4]	縦位の櫛描文を地文とする。頸部に3条以上の横位沈線区画。口縁部に連弧文を施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
54	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.9]	小波状口縁。口縁部に沈線区画。口縁部に渦巻文。区画内に単節RLの単節縄紋を充填施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい黄橙色 外 にぶい黄橙色	口縁部片。
55	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.0]	小波状口縁。口唇部に沈線が廻る。	角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 浅黄橙色 外 浅黄橙色	口縁部片。
56	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.6]	単節RLの縄紋を口唇部に横位、口縁部に縦位に施文し地紋とする。口縁部に懸垂文と逆「U」字文を施文し、逆「U」字文内を磨消。	角閃石、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	口縁部片。
57	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.1]	口縁部に大形の把手を貼付。胴部に沈線文。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい黄橙色 外 にぶい黄橙色	口縁部片。
58	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.4]	頸部に3条以上の横位沈線が廻る。沈線間に縦位と斜位に短沈線を充填施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 浅黄橙色 外 橙色	口縁部片。
59	深鉢	口径— 底径— 器高 [6.8]	口縁部に隆帯下端区画。区画内に縦位の短沈線を充填施文。口縁部に平行沈線による沈線文区画。沈線文区画内に単節RLの縄紋を充填施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	口縁部片。
60	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.9]	口縁部に2条の横位沈線が廻る。沈線下に5歯以上の櫛歯状工具による波状文を縦位施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 明赤褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
61	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.5]	口縁部に綾杉状沈線文を施文したのち口唇部に3条の横位沈線を廻らせる。	石英、角閃石、砂粒 内 橙色 外 にぶい赤褐色	口縁部片。
62	深鉢	口径— 底径— 器高 [10.6]	胴部に綾杉状文を縦位施文して地文としたのち、隆帯による唐草文を貼付。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
63	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.2]	口縁部に隆帯区画。区画内に短沈線を縦位充填施文。	角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 明赤褐色	胴部片。
64	深鉢	口径— 底径— 器高 [4.2]	胴部に懸垂文による文様区画。区画内に綾杉状文を充填施文。懸垂文間は磨消。	片岩、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 にぶい赤褐色	胴部片。
65	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.5]	櫛歯状工具による文様施文。櫛歯7。3条一単位の沈線で文様施文。	角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 橙色 外 にぶい赤褐色	胴部片。
66	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.9]	胴上部に丸棒状工具の頭部による連続刺突を施した隆帯が廻る。胴部には刺突文と斜位の懸垂文を充填施文。	角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 明赤褐色	胴部片。
67	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.6]	口唇部に1条の沈線が廻る。口縁部に隆線による文様区画。区画下に沈線による文様施文。	片岩、砂粒 内 にぶい赤褐色 外 明赤褐色	口縁部片。
68	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.8]	口唇部肥厚。口縁部に沈線区画。区画内に単節RLの縄紋を横位施文。	片岩、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい褐色	口縁部片。
69	深鉢	口径— 底径— 器高 [3.8]	口唇部肥厚。	角閃石、赤色岩片、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい黄褐色	口縁部片。
70	深鉢	口径— 底径— 器高 [8.0]	単節LR、RLの縄紋を縦位に交互施文した羽状縄紋を地紋とする。隆帯による渦巻文を施文する。	角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	胴部片。
71	深鉢	口径— 底径— 器高 [7.3]	胴部に隆帯区画。隆帯下に懸垂文区画。胴部上半及び胴部下半の区画内に単節RLの縄紋を縦位充填施文。懸垂文内磨消。	石英、角閃石、片岩、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
72	深鉢	口径— 底径— 器高 [5.1]	無節Lの撚糸紋を縦位施文し地紋とする。隆帯による渦巻文と垂下隆帯を貼付。	角閃石、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 にぶい赤褐色	胴部片。

表 21 遺構外出土遺物観察表 (5)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴				胎土・色調	備考
73	深鉢	口径－ 底径－ 器高 [11.7]	単節LRの縄紋を縦位施紋して地紋とする。3条一単位の懸垂文を施文。懸垂文内は磨消。				角閃石、片岩、砂粒 内 にぶい橙色 外 橙色	胴部片。
74	深鉢	口径－ 底径－ 器高 [3.9]	胴上半に小把手を貼付。				角閃石、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 橙色	胴部片。
75	深鉢	口径－ 底径－ 器高 [2.3]	口唇部貼付。口縁部に有孔。胴部上半に丸棒状工具の頭部による連続刺突文。				石英、角閃石、白色岩片、砂粒 内 暗灰黄色 外 にぶい黄橙色	口縁部片。
76	鉢	口径－ 底径－ 器高 [6.2]	口唇部に横位沈線区画。区画内に単節LRの縄紋を充填施紋。胴部上半に2条の横位並行沈線文を施文し沈線間に列点を施す。				角閃石、片岩、白色岩片、砂粒 内 橙色 外 にぶい褐色	胴部片。
77	深鉢	口径－ 底径－ 器高 [5.0]	胴部に三叉文。				角閃石、片岩、砂粒 内 灰黄褐色 外 にぶい黄橙色	胴部片。
78	深鉢	口径－ 底径－ 器高 [4.1]	胴部に玉抱き三叉文。				角閃石、片岩、赤色岩片、砂粒 内 灰褐色 外 にぶい橙色	胴部片。
No.	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	製作技法・特徴	
79	スクレイパー	頁岩	9.55	5.85	3.25	160.5	割り礫を素材とする。左側縁を直接打撃による両面調整。右側縁を直接打撃による片面調整。	
80	スクレイパー	砂岩	6.87	9.95	1.85	117.6	礫皮をもつ剥片を素材とする。縁辺を直接打撃による両面加工。刃部周辺はやや摩耗している。	
81	スクレイパー	頁岩	5.60	6.05	0.95	35.3	礫皮をもつ薄型剥片を素材とする。一側縁を直接打撃による両面調整、二側縁を直接打撃による片面調整。刃部周辺はやや摩耗。	
82	打製石斧	頁岩	8.25	4.50	2.35	84.2	短冊形。刃部の一部欠損。礫皮をもつ剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。両側縁部中央～上部に浅い抉り込み。刃部に摩耗痕が認められ、裏面は顕著な摩耗痕。	
83	打製石斧	片岩	10.35	4.55	1.50	84.2	短冊形。礫皮をもつ板状剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。刃部周辺に顕著な摩耗痕。	
84	打製石斧	砂岩	10.20	4.35	2.00	94.9	短冊形。礫皮をもつ板状剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。刃部周辺に摩耗痕。	
85	打製石斧	ホルンフェルス	11.55	5.25	2.40	144.3	剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。全体的に風化。	
86	打製石斧	砂岩	9.70	4.20	1.85	101.8	短冊形。礫皮をもつ剥片を素材とする。周縁を直接打撃による両面調整。	
87	磨石類	安山岩	[4.20]	[7.00]	[3.90]	149.4	上部欠損。表・裏面に顕著な摩耗痕。摩耗範囲の一部に擦痕。表面中央及び両側縁に敲打痕あり。	
88	凹石	緑色岩類	[8.90]	[5.10]	[2.65]	146.0	上部欠損。表・裏面中央に凹穴。凹穴内面に摩耗痕。左側面及び下端に敲打痕。	
89	敲石	砂岩	[6.90]	[4.40]	3.10	124.2	磨→敲。下部欠損。棒状礫の両側縁に敲打痕。裏面やや摩耗。全体に被熱痕とみられる変色と部分的に亀裂。	
90	台石	砂岩	15.35	11.20	7.00	1610.7	表面中央に摩耗痕。裏面に漏斗状の凹穴1穴。表・裏面の一部に被熱痕とみられる変色。	
91	多孔石	緑色岩類	10.55	8.00	3.00	350.2	上部欠損。表面に5穴の凹穴。上・下端部に敲打及び剥離痕。折損後、敲石として転用カ。	
92	磨製石斧	緑色岩類	[13.75]	5.75	3.84	530.8	上・下端部欠損。敲打→研磨による成形。刃部周辺に敲・磨痕が顕著。研磨成形後とみられる小さな凹穴が表・裏・側面に多数。磨製石斧→磨・敲石への転用の可能性あり。	
93	磨製石器	緑色岩類	[8.75]	[4.00]	[1.50]	83.7	下部欠損。扁平な礫を素材とする。表・両側面の一部に研磨痕。	

IV まとめ

(1) 新宮遺跡について

新宮遺跡は本報告を含め4次にわたる調査が行われている。調査成果により新宮遺跡は縄紋時代中期中葉から後半にわたる集落であることが確認されている。新宮遺跡の北側には古井戸遺跡や将監塚遺跡といった大規模集落が近接している。本庄台地縁辺部ではこの3つの大規模集落がほぼ時間を同じくして同一台地上が営まれているという特異な状況を示している。このようななか、本報告である新宮遺跡について、既に報告されているD地点の調査結果と照らし合わせながら本調査地点を概観したい。

新宮遺跡において集落を営み始めたのは、各区の調査から勝坂式期であると考えられる。以後、加曾利EⅢ式期まで継続し集落中央に遺構の希薄域をもついわゆる「環状集落」が形成される。本調査地点においては加曾利EⅠ式～EⅢ式期にあたる竪穴住居跡が検出されるとともに、新宮遺跡を構成する「環状集落」の東端を担っている。

集落初現期である勝坂式期に該当する遺構は、D地点の竪穴住居跡5軒とその周囲に密集する土坑である。また、AⅠ区についても竪穴住居跡が確認されており(恋河内1995)、当該期の遺構は遺跡の西側に集中している。ただし、本調査地点においても1号竪穴住居跡覆土中や調査区内から当該期の土器片が多量に確認されており、東側もその活動の範囲内にあると推測される。このことから、今後の調査によっては東側でも当該期の遺構が検出されると予測され、居住域が西側だけでなく東側においても形成していた可能性が高いといえる。

続く加曾利EⅠ式期では本調査地点で1軒、D地点で2軒の竪穴住居跡が検出されている。本調査地点1a号竪穴住居跡、D地点11、20号竪穴住居跡は加曾利EⅠ式でも新しい様相を示している。竪穴住居跡は本調査地点では調査区の西寄りに、D地点では調査区の東寄りに位置する傾向がみられ、この頃「環状集落」の最も内側に形成されるようである。土坑は前時期と同様に竪穴住居跡の周囲に集中する傾向があるが、その一方でD地点では調査区北側で土坑のみが点在する箇所が見られる。このような竪穴住居跡に近接する土坑とそうでない土坑はその性格に相違があるものと思われるが、これは集落が終焉を迎える加曾利EⅢ式期まで見られる傾向である。

加曾利EⅡ式期の竪穴住居跡はD地点で2軒検出されている。D地点の竪穴住居跡は加曾利EⅠ式期の住居跡と重複しながら構築されている。竪穴住居跡の検出数は全時期を通して現在のところもっとも少ないが、反対に土坑の検出数は当該期が最も多い。本調査地点1号遺物集中で検出された土器(第33図1)はこの時期に当たる。これは曾利式に該当する土器であるが非常に丁寧な作りをしており、在地的な土器製作要素を持ち合わせていない。したがって、これは曾利式分布圏からの搬入もしくは人々の移入を想定させる出土事例といえる。

加曾利EⅢ式期では本地点で3軒、D地点では5軒検出されている。新宮遺跡では竪穴住居跡が最も多く検出されている時期である。新宮遺跡では加曾利EⅢ式古段階の竪穴住居跡が主体で、新段階では本調査地点1b号住居跡、D地点18号住居跡があげられる。D地点では竪穴住居跡がやや弧状に配置されている。本調査地点1b号住居跡は加曾利EⅠ式期の1a号竪穴住居跡と重複している。土坑はD地点では減少するが、反対に本調査地点では埋設土器を含めこの時期の土坑が多い傾向にある。

加曾利EⅢ式期以降、新宮遺跡では遺構の検出数が減少する。これは古井戸遺跡や将監塚遺跡と同様

の変遷をたどっている。一方で新宮遺跡の「環状集落」から逸脱するように周辺遺跡において遺構が検出されるようになる。中下田遺跡や将監塚東遺跡では竪穴住居跡、平塚遺跡において土坑が検出され加曾利EⅢ式期以降の人々の移動が推測される。

なお、D地点において集石を伴う土坑が19基検出されている。これは北側に位置する将監塚遺跡・古井戸遺跡においても同様に確認されている。帰属時期は新宮遺跡では勝坂式期から加曾利EⅠ式期に属するものが特に多い。本調査地点では確認されていないが、大量の片岩が調査区内から出土しており、集石土坑が存在した可能性はある。

そのほか本調査地点の特徴としてピットが大量に検出されていることがあげられる。そのほとんどは出土遺物が貧弱なため時期不明であるが、そのなかでも黒曜石の破片が覆土中から多量に出土した1号小穴は注目される。ほとんどが微細な破片であり石鏃の未製品が1点ほど出土しているだけであるが(図34-1)、集落内における石器製作跡の存在とその配置が窺えるものであるといえる。

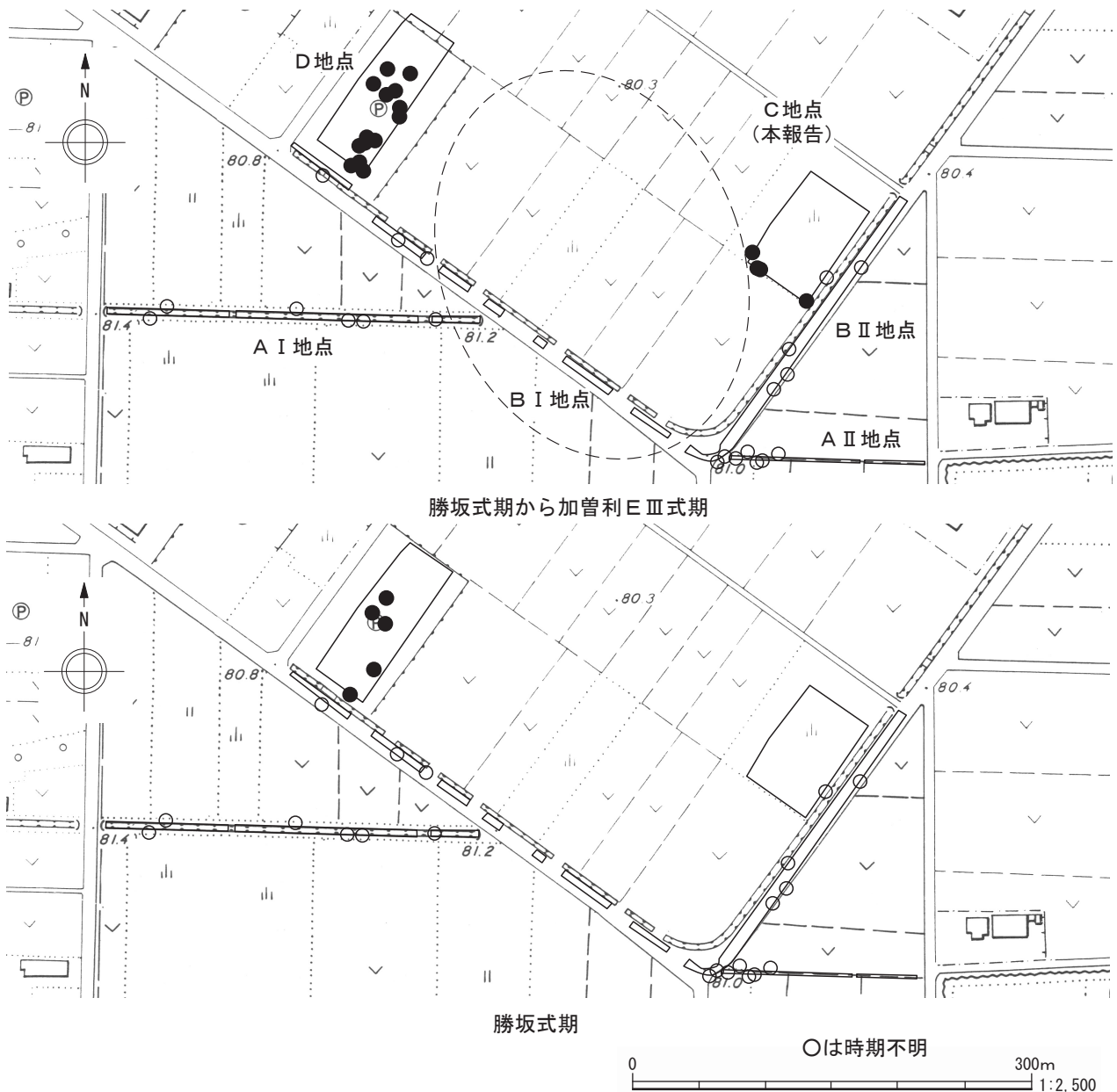
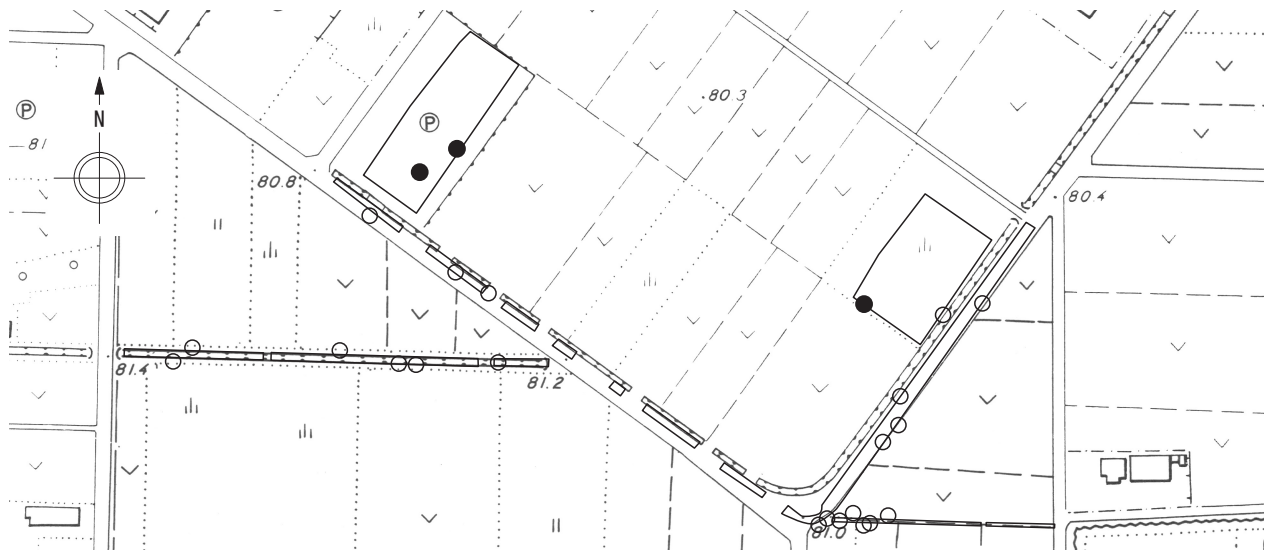
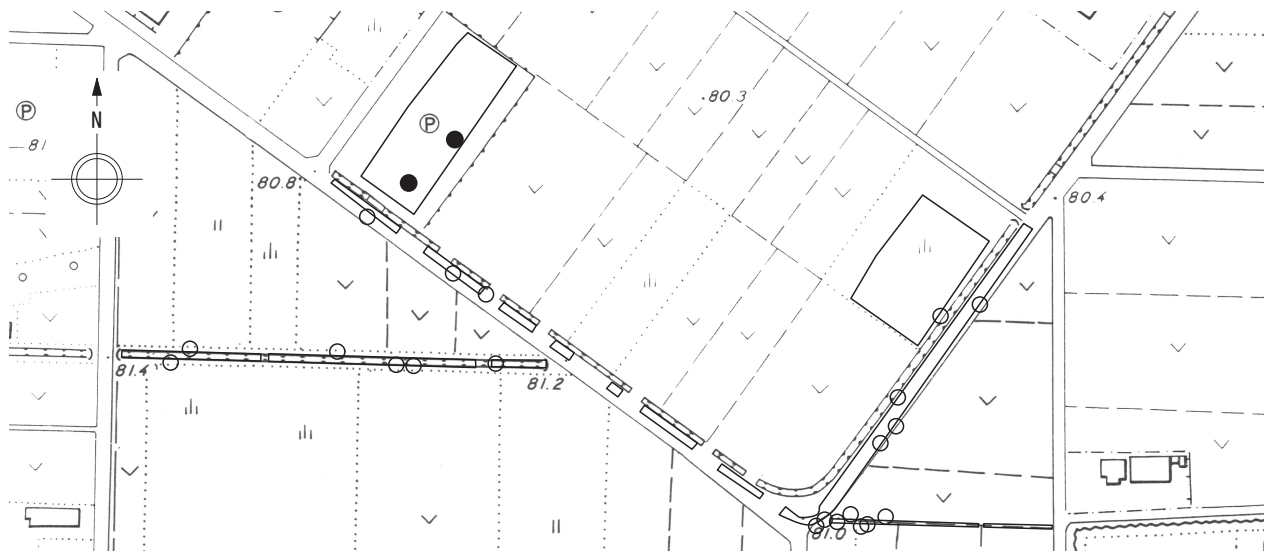


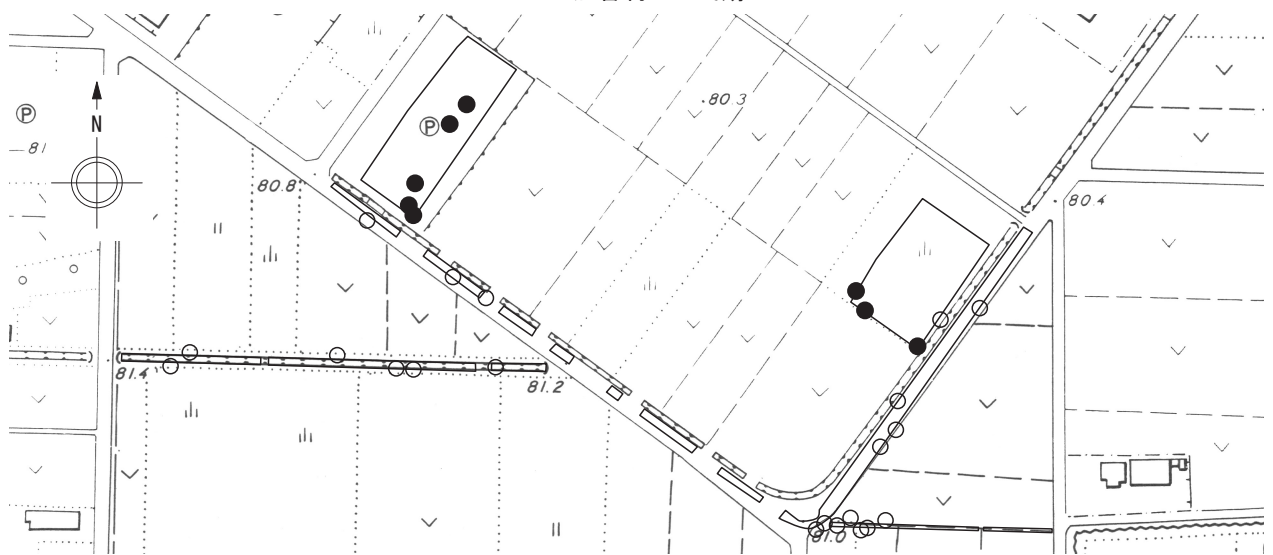
図42 新宮遺跡集落変遷(1)



加曾利 E I 式期



加曾利 E II 式期



加曾利 E III 式期

○は時期不明

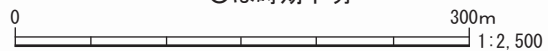


图 43 新宮遺跡集落変遷 (2)

これまでのところ、新宮遺跡では各地点の調査によって「環状集落」内から加曾利EⅣ式期の遺構や土器片は検出されていないことが判っている。そのため、「環状集落」の終焉は加曾利EⅢ式期の新しい時期までであると考えられる。（宮田忠洋）

（2）新宮遺跡周辺の縄紋時代中期中葉から後半の集落様相

本遺跡を南西端とする本庄台地縁辺部には東西約1,000 m、南北1,350 mの範囲に縄紋時代中期中葉から後半の遺跡が多く分布している。特に本報告である新宮遺跡や将監塚遺跡、古井戸遺跡は大規模集落として台地上の一大拠点として存在している。図44には新宮遺跡、将監塚遺跡、古井戸遺跡の位置とその周辺の遺跡を示している。これら3遺跡は台地縁辺部に沿って北東-南西方向へほぼ一直線に並んでおり、新宮遺跡は古井戸遺跡から約600 m南西に位置している。将監塚遺跡と古井戸遺跡の集落の距離が約200 mであることに比べると、新宮遺跡はやや距離が離れていることがわかる（註1）。これらの集落は、遺構密度が希薄な中央部分を中心として環状に遺構を形成する「環状集落」を呈する。これら3つの「環状集落」は勝坂式期よりほぼ同時期に集落を形成し始め、加曾利EⅢ式期には「環状集落」からの逸脱が始まり、低地部分への進出が行われる。このことは以前より論考されているところであり（鈴木徳 1997ほか）、この地域の特徴として位置づけられている。また、竪穴住居跡の増減は3遺跡とも同様の経過をたどる。

各遺跡の状況をみると、本台地上に集落が形成されるのは勝坂式期であり将監塚遺跡B地点、将監塚遺跡、古井戸遺跡、新宮遺跡で竪穴住居跡が検出されている。将監塚遺跡B地点は将監塚遺跡の北側に位置し、2軒の竪穴住居跡が検出されている。当該期における竪穴住居跡の軒数は各遺跡2～5軒ほどであり、小規模集落が点在している状況が窺える。その後加曾利EⅠ式の古い段階で古井戸遺跡において「環状集落」が形成され始め、やや遅れて新宮遺跡と将監塚遺跡がそれに続く。将監塚遺跡の「環状集落」外であるが将監塚遺跡東側に位置する将監塚東遺跡では、当該期の竪穴住居跡2軒が検出されている。また時期ははっきりしないが河川跡も確認されており、当時台地縁辺部に河川があった可能性がある。加曾利EⅡ式期では徐々に竪穴住居跡が増加し、加曾利EⅢ式の古い段階になると竪穴住居跡や土坑の検出数が最も増加する。やがて「環状集落」が緩む加曾利EⅢ式の新しい段階には竪穴住居跡がやや減少し、続く加曾利EⅣ式期の竪穴住居跡は将監塚遺跡で1軒、古井戸遺跡で3軒見られるのみで新宮遺跡ではこれまでのところ検出されていない。

一方でこの3つの「環状集落」の外縁には加曾利EⅢ式以降の遺構が検出されている。内手遺跡、神田遺跡、中下田遺跡においてそれがみられる。内手遺跡や神田遺跡、中下田遺跡は台地上ではなく低地上に位置する遺跡であり、加曾利EⅢ式以降の台地から低地へという占地の進出がみられるようになる。内手遺跡A地点では竪穴住居跡が、神田遺跡では竪穴住居跡と土坑が検出されている（註2）。平塚遺跡は古井戸遺跡の南側に位置し、土坑が2基検出されている。土坑内からは2個体の完形個体が出土している。中下田遺跡は新宮遺跡の東側に位置し、竪穴住居跡2軒、集石土坑3基が検出されている。これらの時期はすべて加曾利EⅢ式の新しい段階から加曾利EⅣ式に該当するものである。

ところで、新宮遺跡と古井戸遺跡との間には南共和遺跡や塚畠遺跡があり、ともに調査されている（恋河内 1995、鈴木徳 1991）。両遺跡では縄紋時代の遺構は現在まで検出されておらず、この領域は縄紋時代の遺構の空白地帯といえる。このことは、この領域が居住領域としてではなく、活動領域と推定され

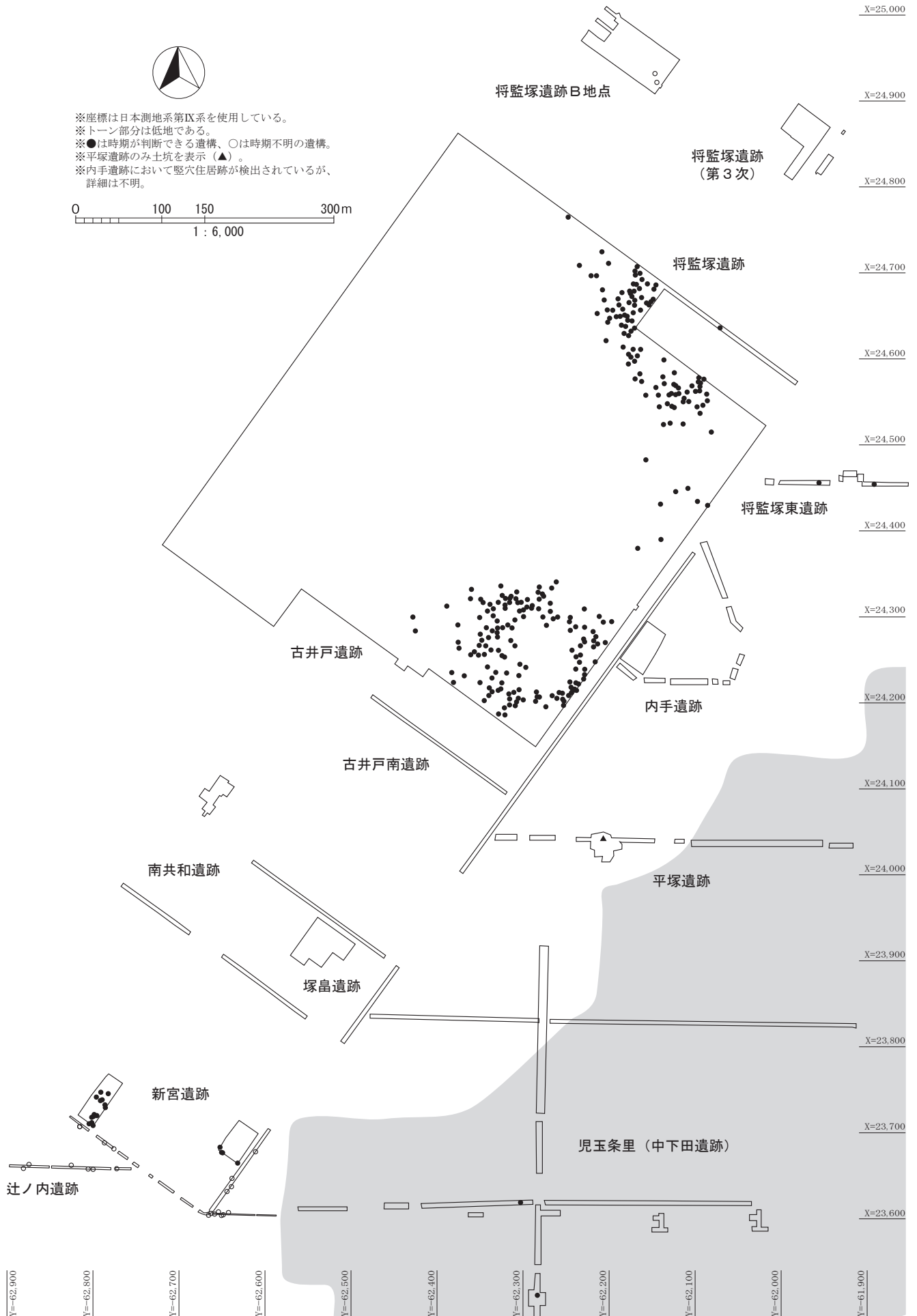


図 44 新宮遺跡周辺の縄紋時代中期中葉から後半にかけての遺構分布

るものであるといえる。鈴木氏が指摘しているように、新宮遺跡をはじめ将監塚遺跡や古井戸遺跡では打製石斧の出土量が多いことから、根茎類・堅果類採集といったような生業活動を主とする生活であったことが想定されるが（鈴木徳 1997）、この新宮遺跡と古井戸遺跡の間はまさにその生業活動の場であったことが推測される。この領域がほぼ同時期に形成され始めた古井戸遺跡と新宮遺跡の集落同士においての共有域であったものか否かは実証する術はないが、近接する「環状集落」間にある活動領域というもののその意義について考えるにあたり大変興味深いものである。

以上のように、本庄台地縁辺部にある新宮遺跡とその周辺の遺跡について見てみたが、3つの「環状集落」が縄文時代中期中葉以降一拠点として存在することは類例の少ないことである。しかし、やがてその「環状集落」がその形態を維持せず、中期後半に徐々に周辺へと分散していくという傾向は広く関東域のこの時期においては普遍的であるとみることができるのは確かであるといえる。（宮田忠洋）

註1 同一地区に大規模な「環状集落」が3箇所営まれる集落構造を鈴木保彦氏は「鼎立状環状集落」と呼んでいる（鈴木保彦 2006）。本遺跡も「鼎立状環状集落」にあたるとしているが、「鼎立状環状集落」は神奈川県岡田遺跡のように、近接した範囲の中で3つの「環状集落」が纏まって存在していることを特徴としており、本文中では本庄台地の例にはやや躊躇もみられる。

註2 内手遺跡、神田遺跡ともに堅穴住居跡の位置は未報告のため不明。

[引用・参考文献]

- 安孫子昭二他（1980）「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」『縄文時代中期後半の諸問題—特に加曾利E式と曾利式との関係について—』神奈川考古第10号
- 石塚和則他（1986）『将監塚—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 恋河内昭彦（1995）『南共和・新宮遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第6・7集
- 鈴木徳雄（1991）『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第15集
- 鈴木徳雄・丸山 修（1992）「児玉郡地域の縄文時代遺跡概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』埼玉県教育局指導部文化財保護課 児玉郡市文化財担当者会
- 鈴木徳雄（1997）『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第26集
- 鈴木保彦他（1980）『神奈川県における縄文時代中期後半土器編年誌案 第2版』神奈川考古同人会
- 鈴木保彦（2006）「縄文集落の隆盛と双環状集落・鼎立状環状集落の出現」『長野県考古学会誌』118号 長野県考古学会
- 谷井 彪他（1982）「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』第1号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 徳山寿樹（1994）『平塚・左口・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第16集
- 徳山寿樹（1995）『堀向・藤塚A・柿島・内手B C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第18集
- 徳山寿樹（1996）『東鹿沼・藤塚B 1・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第21集
- 徳山寿樹（1996）『藤塚遺跡—B 2地点の調査—』児玉町文化財調査報告書第22集
- 長谷川勇他（1994）『将監塚遺跡B地点発掘調査報告書』本庄市遺跡調査会報告第4集
- 宮井英一他（1989）『古井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集

写真図版



新宮遺跡C地点



調査区全景（北から）



調査区全景 遺物出土状況
（北東から）



調査区全景 遺物出土状況（不明）

写真図版 2



1 a・b号竪穴住居跡（北東から）



1 a・b号竪穴住居炉跡（南西から）



1 a・b号竪穴住居跡 遺物出土状況
（北西から）



2号竪穴住居跡（南西から）



3号竪穴住居跡（西から）



4号竪穴住居跡（西から）

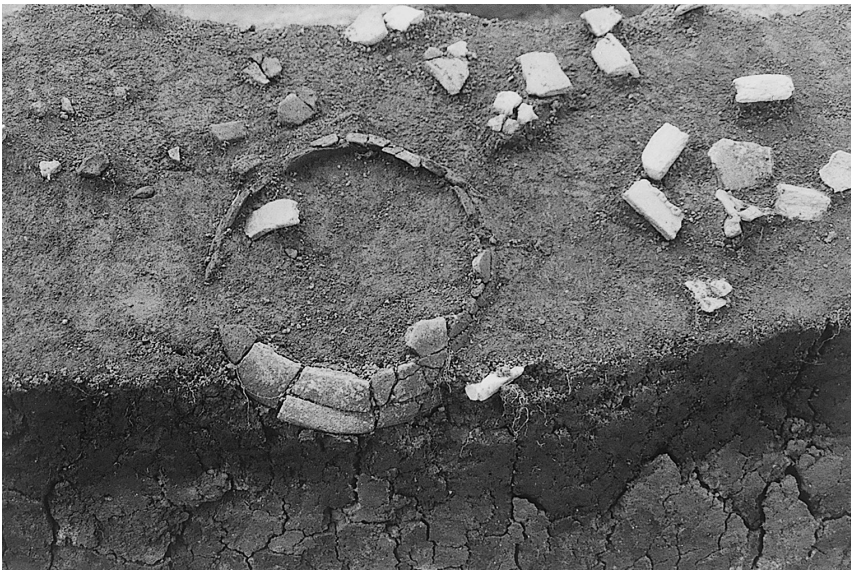
写真図版 4



2号竪穴状遺構（南西から）



1号埋設土器（北東から）



2号埋設土器（南東から）



1号土坑（北東から）



2号土坑（南東から）



4号土坑（北から）

写真図版 6



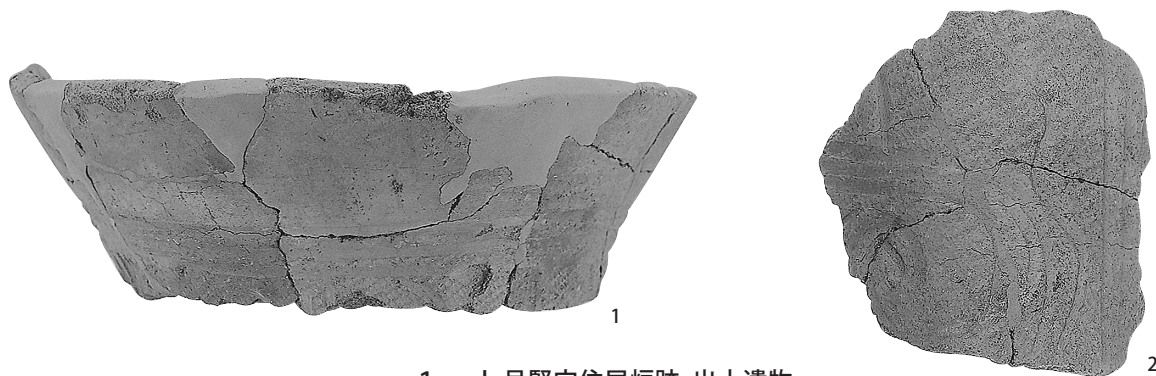
1号遺物集中部（北東から）



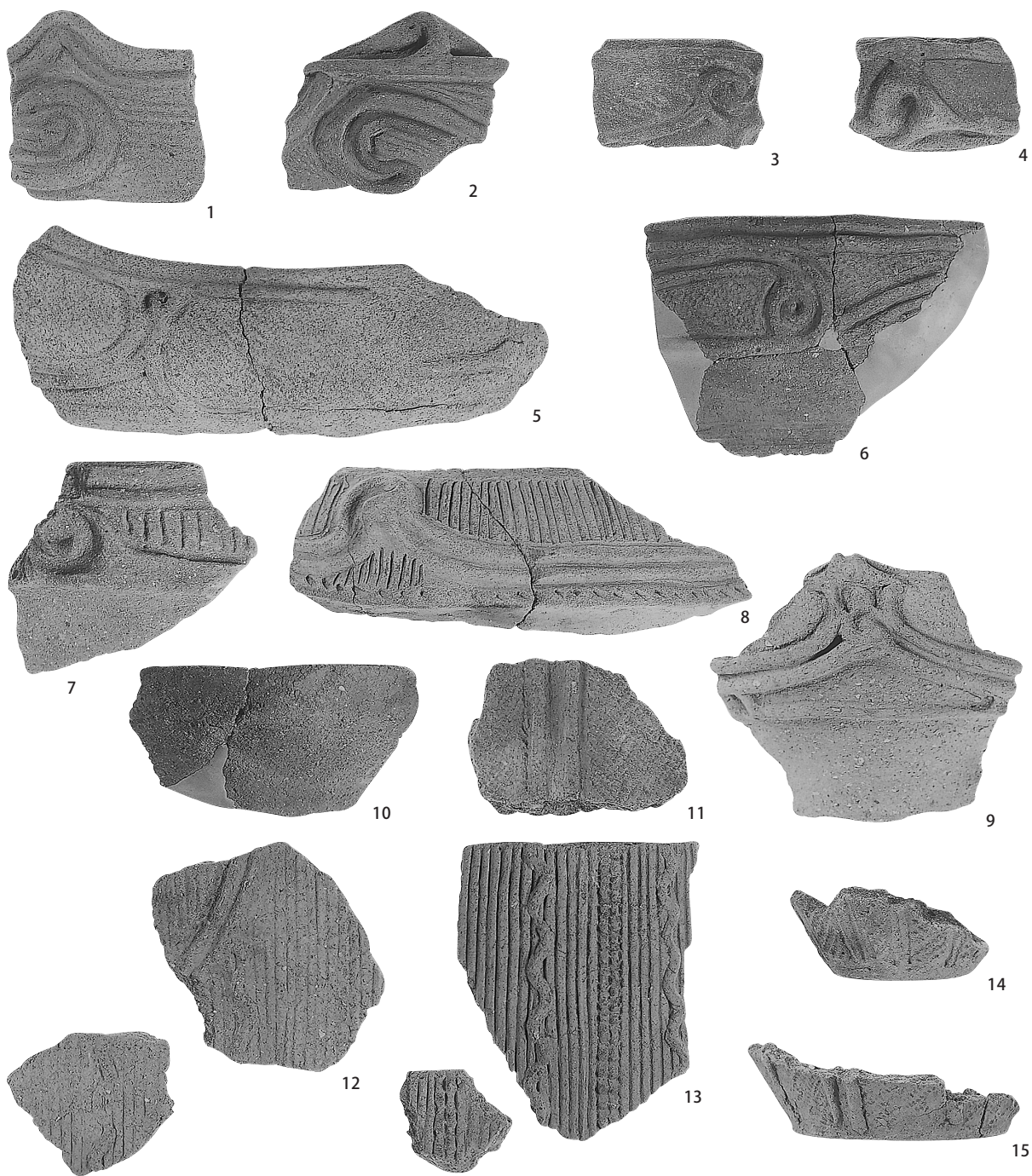
2号遺物集中部（北東から）



1号小穴（ピット）（南東から）



1 a·b号竖穴住居炉跡 出土遺物



1 a·b号竖穴住居跡 出土遺物 (1)



16



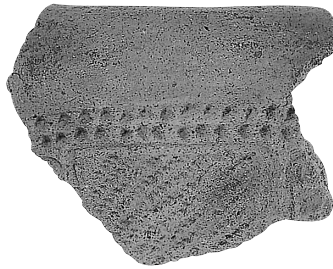
17



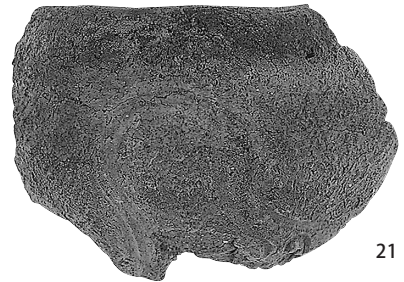
18



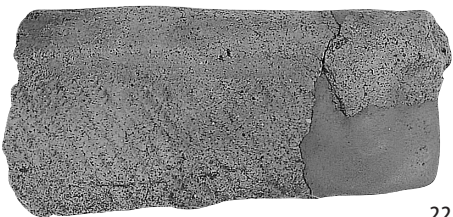
19



20



21



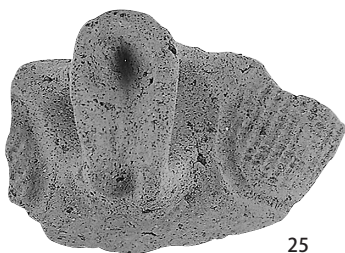
22



23



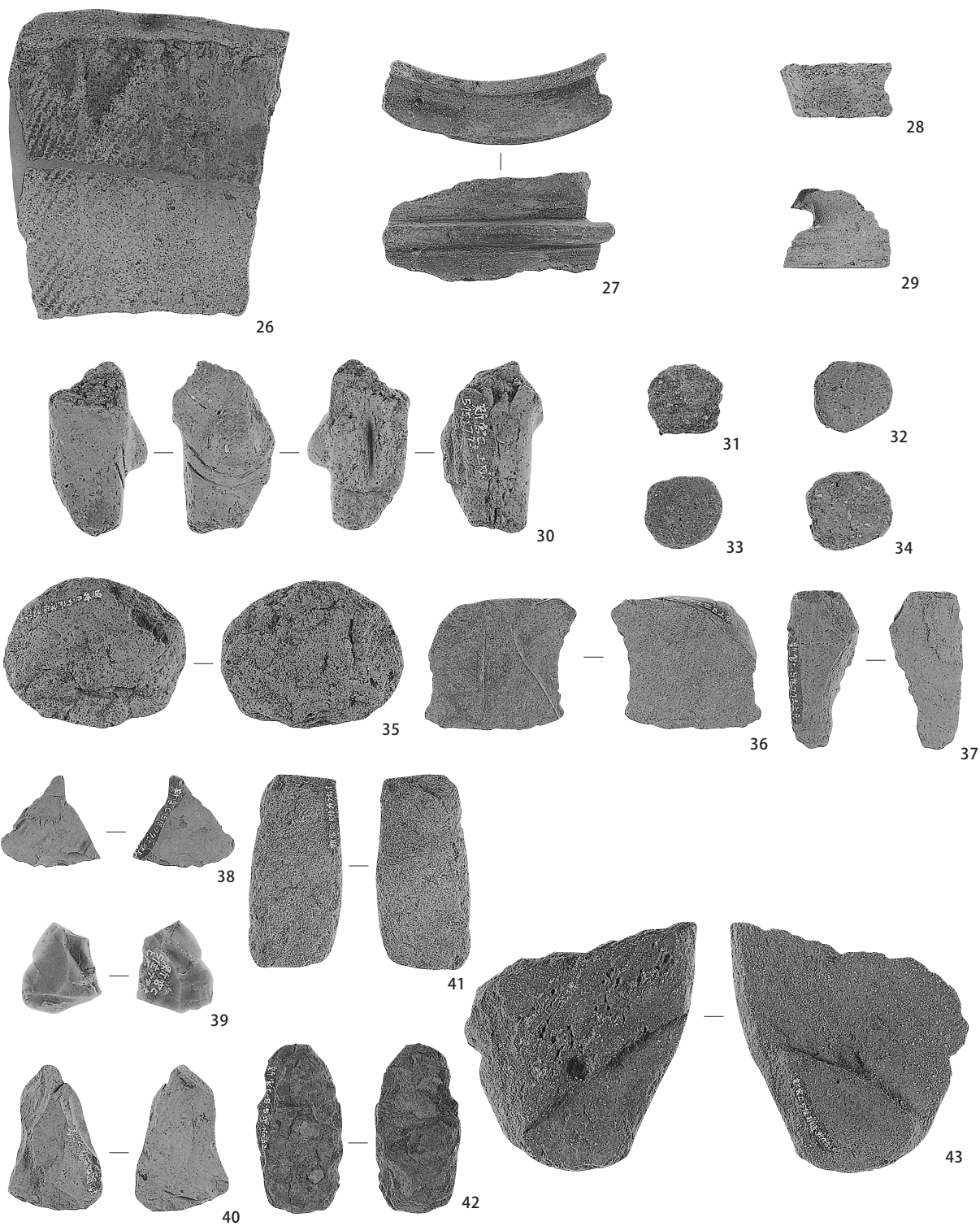
24



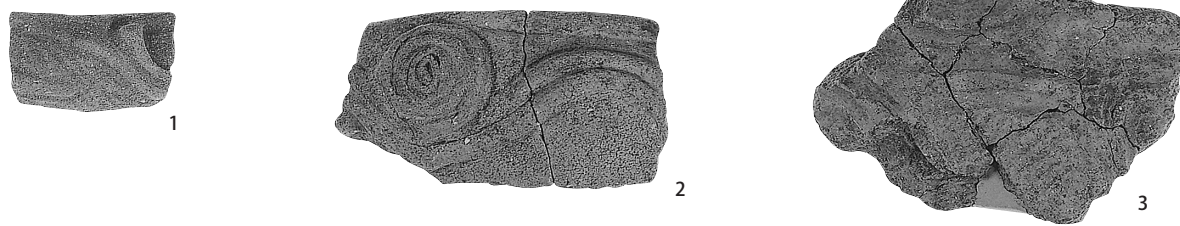
25



1 a · b号竖穴住居跡 出土遺物 (2)

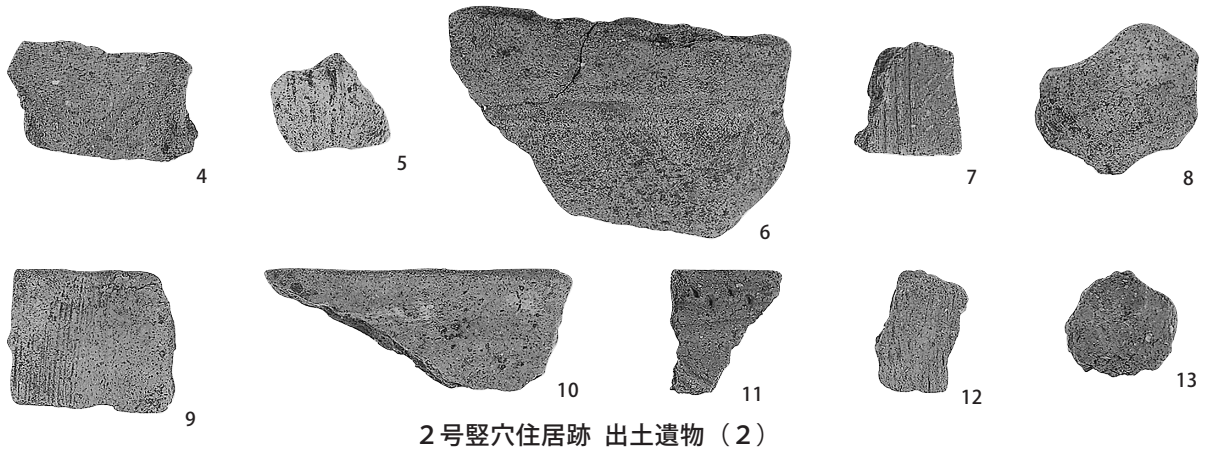


1 a·b号竖穴住居跡 出土遺物 (3)

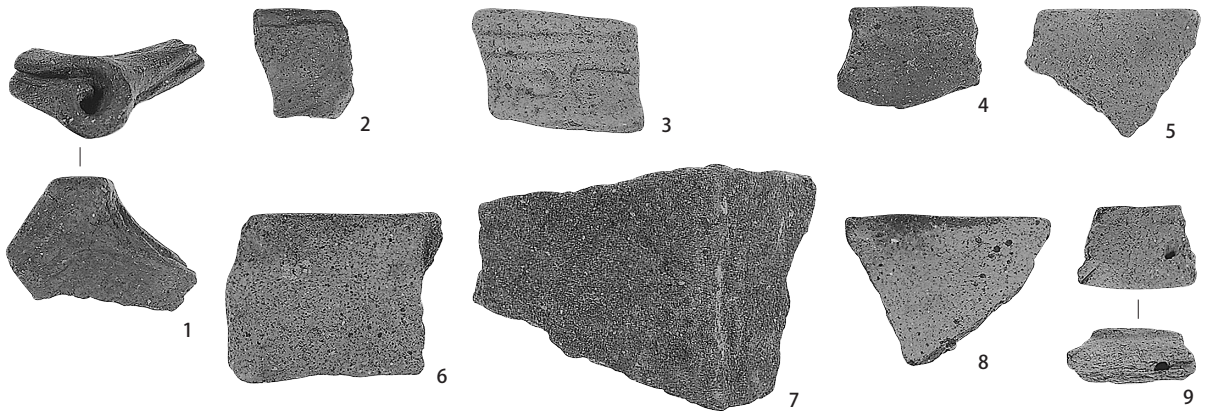


2号竖穴住居跡 出土遺物 (1)

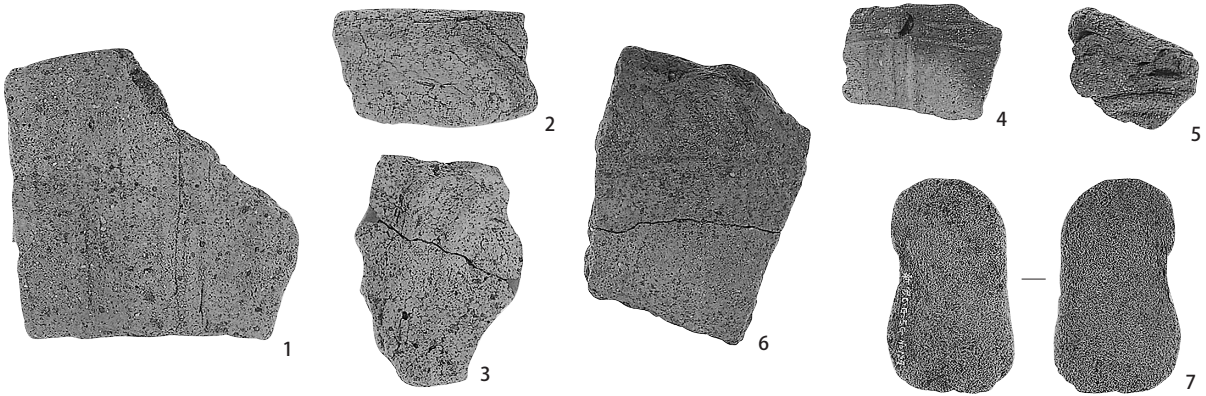
写真图版 10



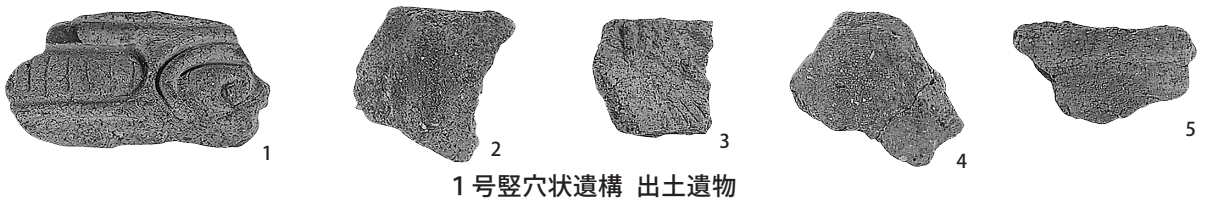
2号竖穴住居跡 出土遺物 (2)



3号竖穴住居跡 出土遺物



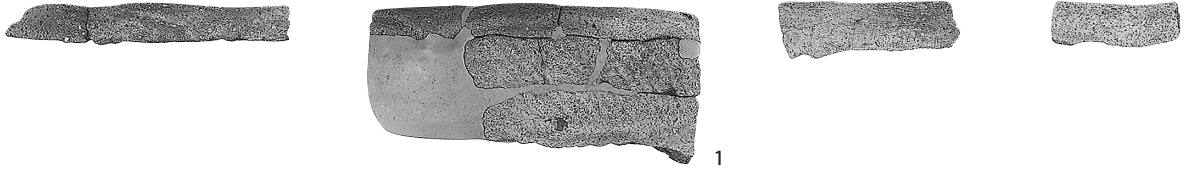
4号竖穴住居跡 出土遺物



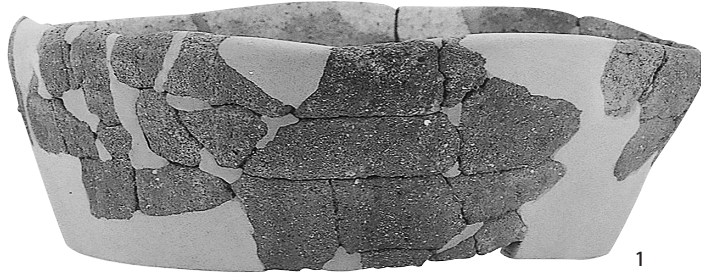
1号竖穴状遺構 出土遺物



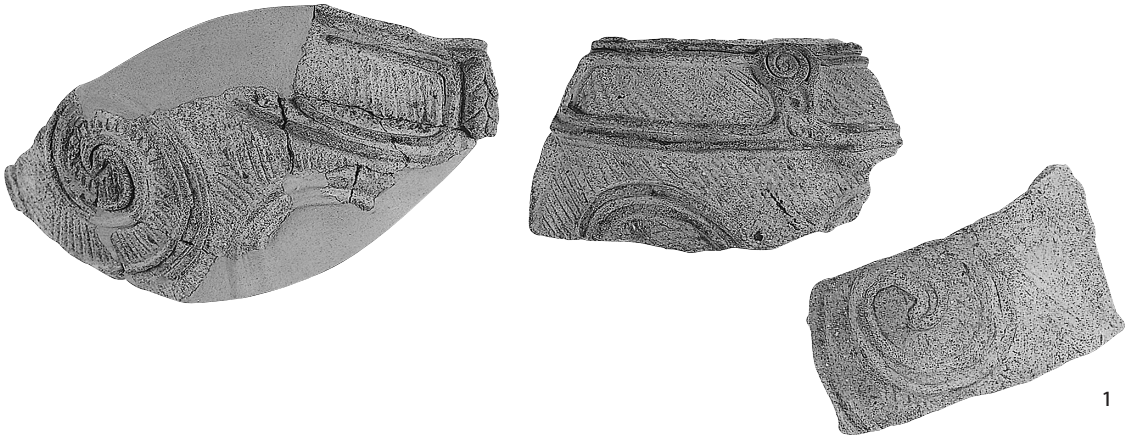
2号竖穴状遺構 出土遺物



1号埋設土器 出土遺物



2号埋設土器 出土遺物



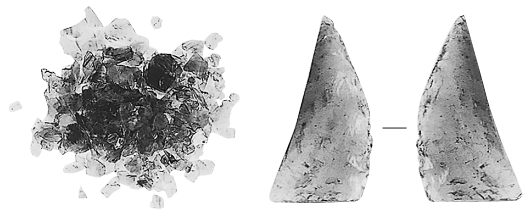
1号遺物集中部 出土遺物



2号遺物集中部 出土遺物

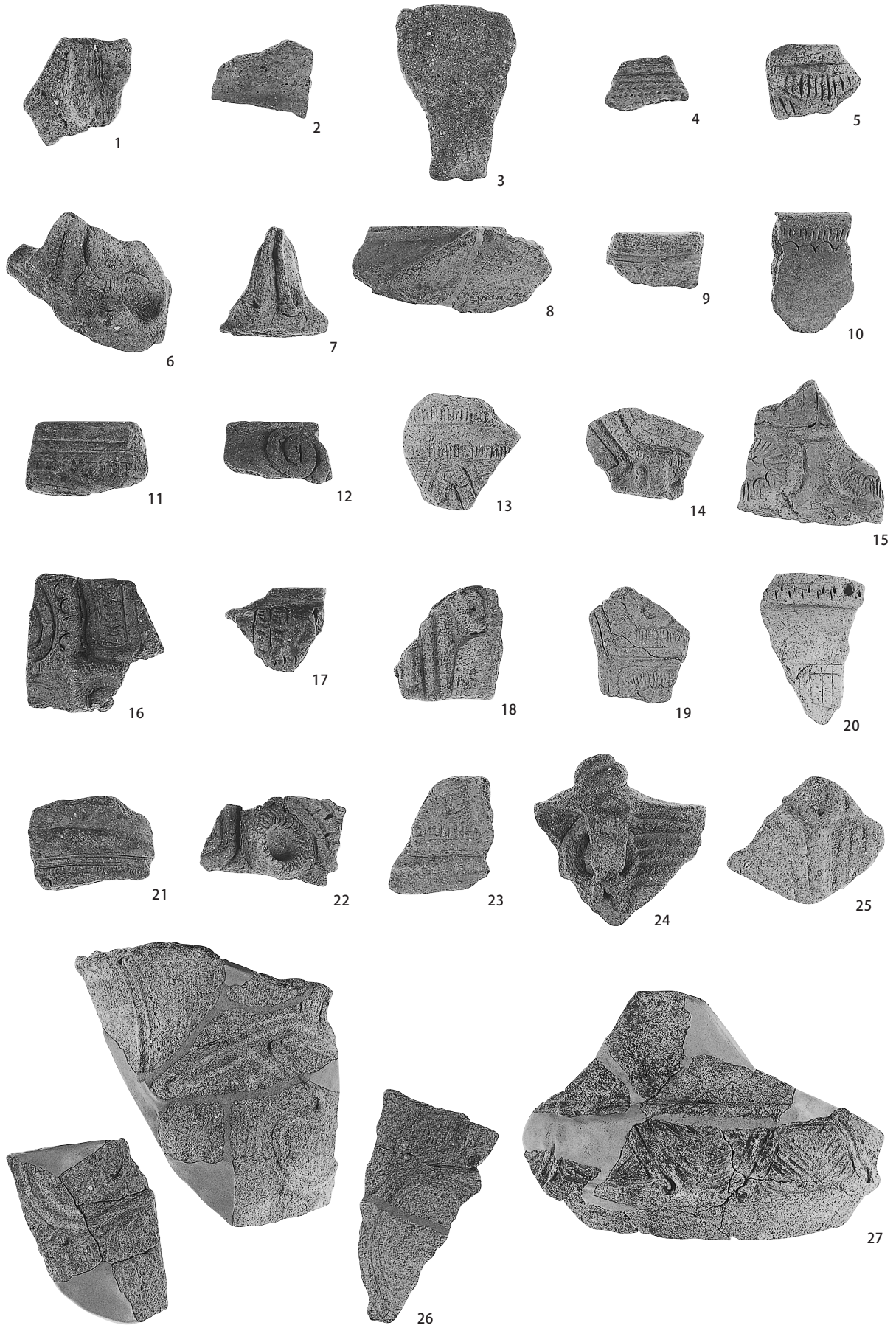


2号土坑 出土遺物

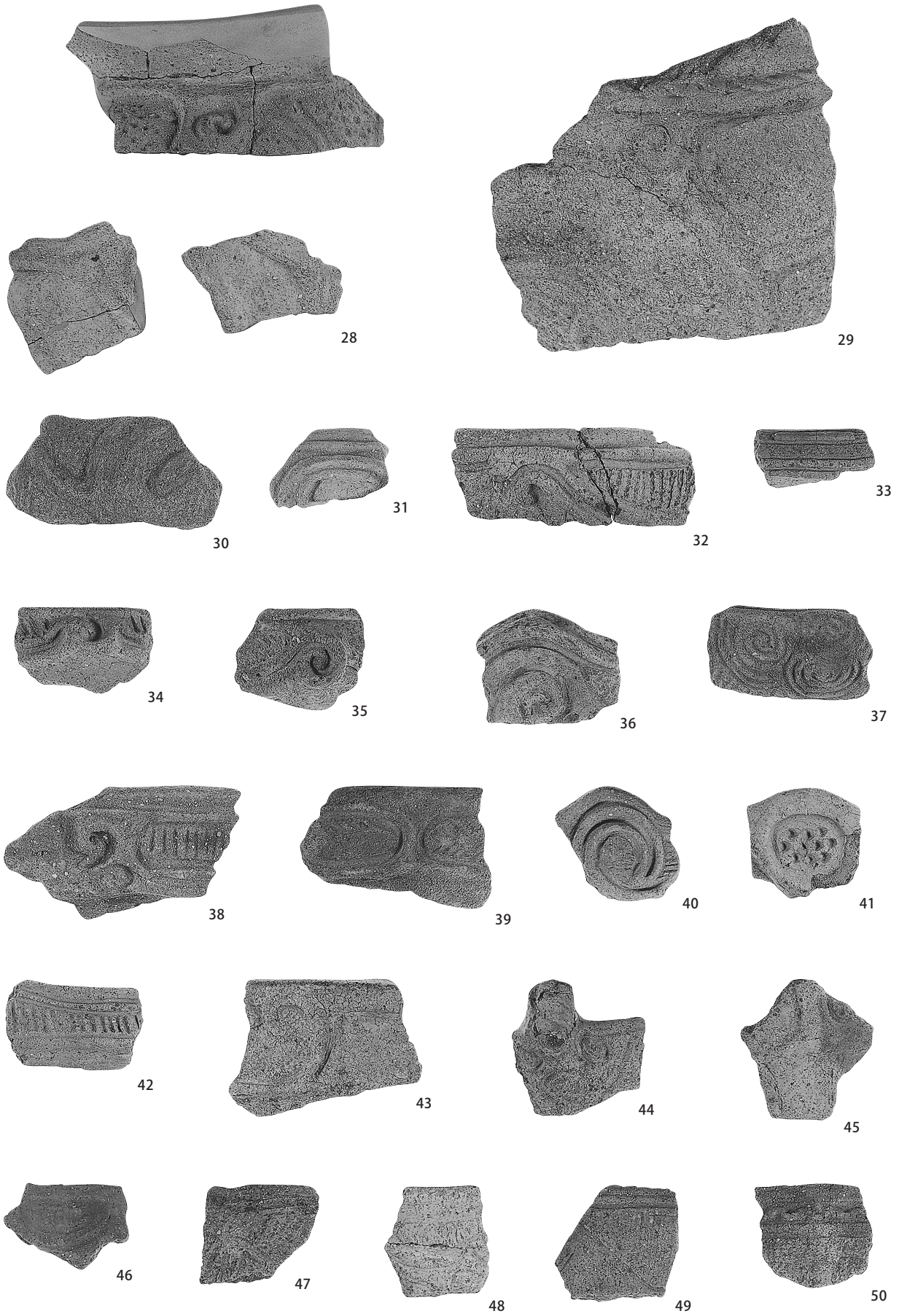


1号小穴 出土遺物

写真図版 12

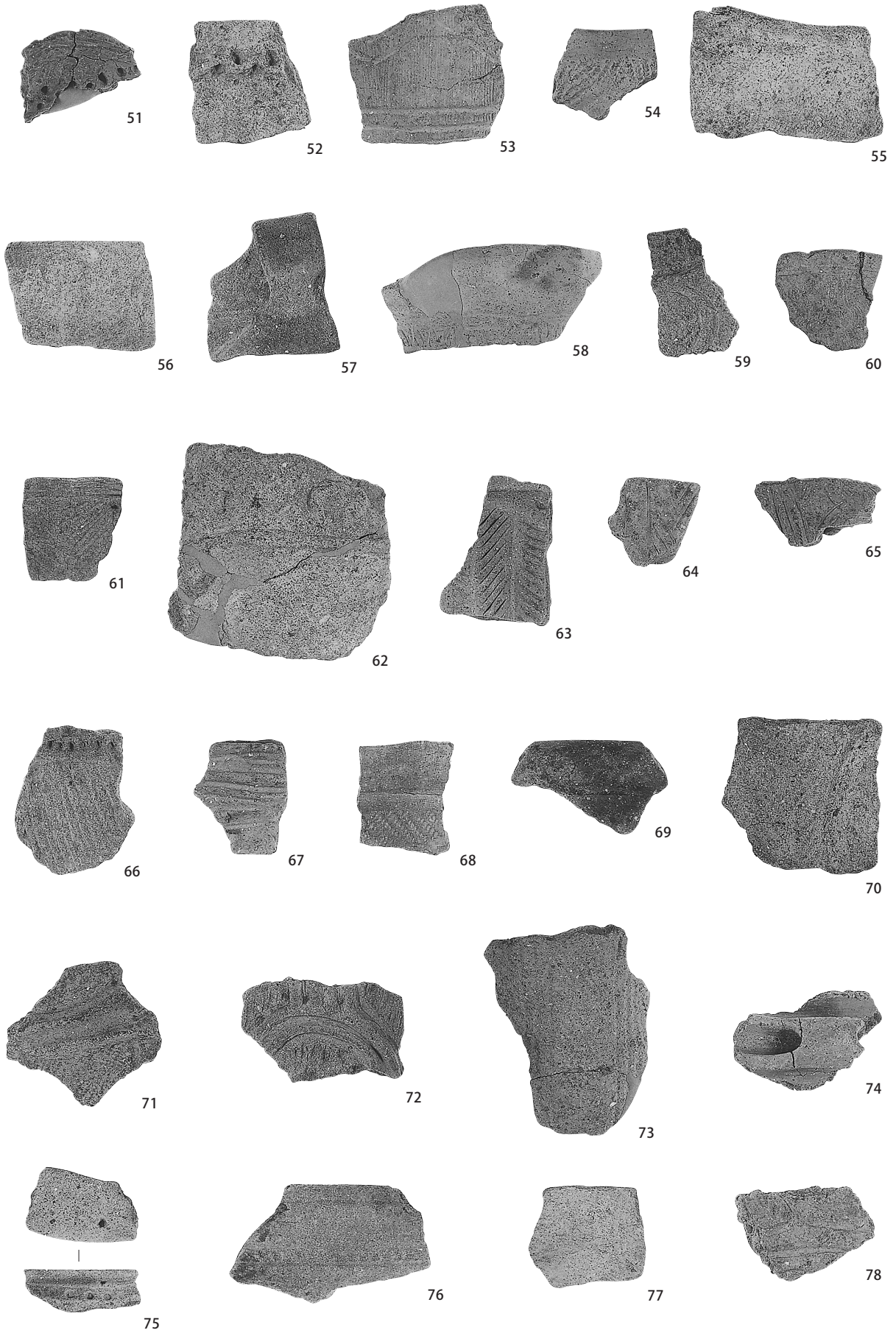


遺構外 出土遺物 (1)

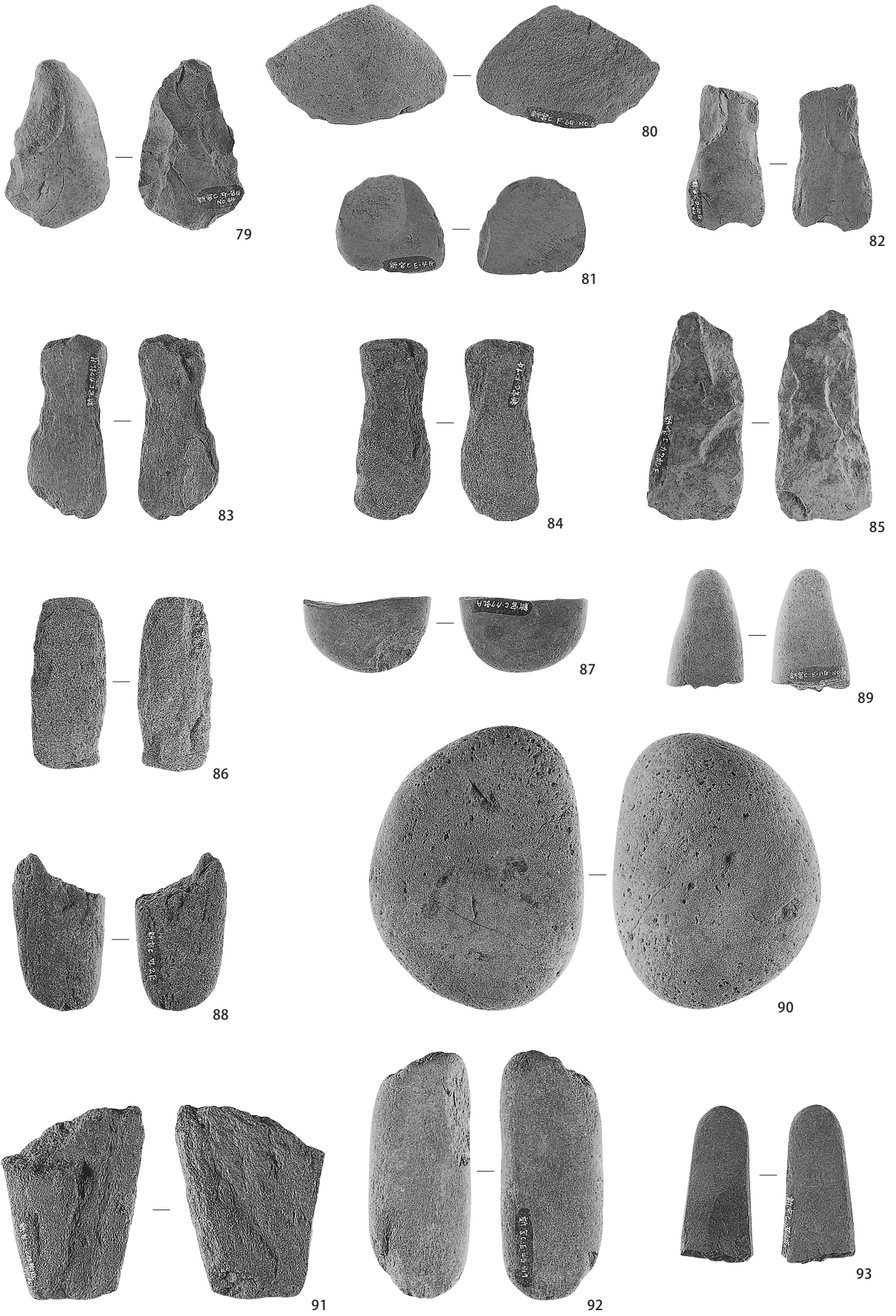


遺構外 出土遺物 (2)

写真図版 14



遺構外 出土遺物 (3)



遺構外 出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	しんぐういせき							
書名	新宮遺跡Ⅱ							
副書名	—C地点の調査—							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	宮田 忠洋・高橋 清文							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	西暦2011(平成23)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんぐういせき 新宮遺跡	さいたまけんほんじょうしごだまちょう 埼玉県本庄市児玉町 おおあざきょうえいあざみなみきょうわ 大字共栄字南共和	54	030	36° 12' 41"	139° 08' 12"	19900515 ～ 19900818	747.7 m ²	民間工場建設計画に伴う緊急発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新宮遺跡 C地点	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代	竪穴住居跡 4軒 竪穴状遺構 2軒 埋設土器 2基 土坑 32基 遺物集中部 2箇所 小穴(ピット)	縄文土器、土偶、石鏃、磨石、敲石、石皿、スクレイパー、砥石、剥片、打製石斧、磨製石斧 土師器・須恵器		縄文時代中期後半の集落が検出された。		

本庄市遺跡調査会報告書 第42集

新宮遺跡Ⅱ
— C地点の調査 —

平成23年3月28日 印刷

平成23年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

TEL 0495 - 25 - 1185

印刷／朝日印刷工業株式会社